

合成DNAおよびRNAを基盤とした自己集合ナノテクノロジーからCOVID-19ワクチンの連続接種まで

シモン・D・ヤノウィッツ, EE₁ と ダニエル・ブrouディ, PhD₂

¹ 独立研究者 兼 アソシエイトエディター (IJVTPR、イスラエル・ハイファ; メール: shimon.yanowitz@yahoo.com; ORCID: <https://orcid.org/0009-0008-0636-0257>)

² 日本国沖縄県西原町 沖縄キリスト教学院大学 応用言語学教授 (〒903-0207)、ならびにIJVTPR; メールアドレス: dbroudy@ocjc.ac.jp; ORCID: <https://orcid.org/0000-0003-2725-6914>)

要旨

合成「mRNA」を含むとされる脂質ナノ粒子が、52億人に注射されたと報告されています。法医学的研究により、一般の人々はこれら新型コロナワクチンの化学組成、毒性、破壊力について嘘をつかれていたことが明らかになっています。規制や制度上の障壁が残っているため、本件は後遺症と入手可能なバイアルの法医学的検査によってのみ評価することができます。注射後の後遺症には以下が含まれます：(1) 注射率に見合った壊滅的な影響：(a) 全死因死亡率の上昇、(b) 自然流産の増加と生殖能力の喪失、(c) 遺体処理業者が遺体から、医師や看護師が生存者から現在も摘出している新しい異常な「白色血栓」、(d) 心筋炎、心不全、脳卒中、多種の急性神経後遺症；(2) 注射剤とその培養サンプル中に、法分析と顕微鏡検査により合成物質と未公開の有毒元素が発見されています *in vitro*、すなわち *in vivo* では生存者の体液中からも発見されています。一方で、人々を制御し場合によっては死に至らしめるために、注射その他の方法で侵襲的な合成技術と毒素を埋め込む意図が、国立国防大学 破壊的技術・未来戦争センター (CDTFW) 所長のジェームズ・ジョルダノ博士によって1月31日以来公表されています。ウェストポイント陸軍士官学校で行われた2時間を超える講演 (2025)、2018 の講演および 2026 の公開声明 (2024年10月30日投稿) の中で、DARPAの立場で発言・執筆したジョルダノは、次世代非外科的神経技術 (N3) プロジェクトの一環として、非外科的にコンピューターで感知・送信可能な脳インターフェースの開発を進めていると発表しました。IEEEフェローで電気工学者のイアン・アキルディス博士は、2023 のYouTube動画で、注射されたナノテクノロジーを通じて人々を密かにクラウドに接続し、監視・制御することに焦点を当てた内容を公開しています。2012年以来IEEEで標準化された生物工学の進歩により、ジョルダノが言及したノビチョクなどの神経毒を用いても、両者が表明した野心を実現する手段が既に存在することから、新型コロナワクチンは、培養ワクチン検体や接種者の体液中に見つかっているような自己集合性の反応性物質を配備・研究する好機となったのです。また、ジョルダノが暗に示唆しているシェディング (排出) による合成感染や、その他ナノテクノロジーを体内に侵入させる方法についても議論します。新型コロナワクチンの普及後、細胞、臓器、生体本来のエネルギーと資源を破壊する自己集合性の合成物質が、壊滅的な後遺症の明らかな原因となっています。ミクロンレベルで集合したこれらの物質は、法医学顕微鏡学者が確認する通り、暗視野/明視野顕微鏡で容易に観察することができます。現在進行中の感染拡大を阻止するため、合成ナノテクノロジーを無効化し体内から除去する安全なプロトコルの開発が緊急に必要であると我々は訴えています。

キーワード: 生体電子回路、生物工学、無細胞タンパク質合成 (CFPS)、DNAナノポア、注射可能なワクチン、巨視的自己組織化、材料科学、メタDNA、ナノロボット、ナノテクノロジー、神経兵器、プロト組織、資源採取、自己組織化ナノテクノロジー、放出、合成伝染病、合成感染症、合成寄生虫、合成DNAおよびRNA、急速進行がん

序論

材料科学とナノテクノロジーの進歩、つまりより大きな構造へと自己組織化する合成DNA分子（タンパク質・ペプチドの場合もある）の自己組織化技術であり、他の原子や分子も含むこの技術は、ナノスケールを基礎として、米国電気電子学会（IEEE）が定義する「1ナノメートル（nm）から100nm」の範囲の実体を製造する技術です（IEEE標準1906.1-2015）。これにより、ナノスケールから始まる合成生物学的な実体が21世紀の現実となりました。こうした実体全体が、科学・工学・製薬分野の大きなパラダイムシフトを構成しています（シーマンによる「核酸接合部と格子」、1982；シーマン&スライマンによる「DNAナノテクノロジー」、2018を参照）。この技術から生まれた技術は指数関数的に増加しており、体格に関わらず人を含む身体域ネットワーク（BAN）に関するIEEE規格（IEEE規格802.15.6-2012）にその現れが見られ、人体の内部・表面・周辺にある計算機デバイスが、ネットワーク内の人に気付かれることなく、人体との間でメッセージの読み書きを行うことを可能にしています。さらに近年、本稿で示すように、米軍の顧問を務める第一人者の神経倫理学者であり、DARPAの最も権威のある広報担当者ジェームズ・ジョルダノ博士によると、5G・6Gのために携帯電話や携帯基地局が供給する電磁波によって接続・管理されるこうしたナノテクの無線ネットワーク機能は、二重用途技術と兵器システムの基本要素であるとされています（オラー、ブルーディ、& サンティアゴ、2025）。世界保健機関がCOVID-19の「パンデミック」開始を発表したちょうどその時期に、世界中で5G基地局の大規模建設が急速に進んだ（Wikipedia、2026a）ことは、単なる偶然なのでしょうか（ゲブレイエス、2020）？

コロナ禍の時代に入る前、製薬業界の影響を受けたメディアと支配下に置かれた政府機関（特に米国CDCとFDA）は、NI-を用いたカリコ・ワイスマンの研究に注目を集めましたメチルシュードウリジン（ Ψ ）の修飾（複数）はRNA上にあり、「SARS-CoV-2スパイクタンパク質」をコードするとされ、いわく¹恐怖を煽る「SARS-CoV-2」疾患を引き起こすとされています（2005）。米国国防総省はナンスとマイヤーの研究（2021）に多額の費用を投じており、明らかに、合成ナノテクノロジーで「メッセンジャーRNA」をコードした特定の脂質ナノ粒子が、パンデミックから世界を救うことができるという考えを広めることを目的としていました。当局によると、ワクチン接種者の体内の有核細胞のリボソーム生産機構を乗っ取り、標的の（疾患を引き起こすとされる）スパイクタンパク質の少なくとも一部を数十億個複製させることで、想定上のSARS-CoV-2病原体の致命的部分である「スパイクタンパク質」を無力化できるとされ、これにより

¹ここでは曖昧な表現が不可欠です。というのも、特にセガラの研究、その他多数の研究者（例えばミケルス他、2023）の研究から、公表された実証的証拠と、人々に生じた観察可能な被害が「認可された主流の医療・製薬の語り」から組織的かつ意図的に排除され続けていることから、一般の人々は新型コロナウイルスの注射剤について、過去から今もなお騙され続けていることは明らかです。このような情報伝達の慣行は大手製造企業の間で常態化しており、ジョー・バイデン前大統領のような高官、企業メディアが起用したトーキングヘッド（有名ニュースキャスター）、例えばモデルナ社のために研究を行っているソシ他（2026）のような研究者が発表する報告書にも広く見られます。新型コロナウイルスの問題が発生して6年が経った今、メディアや支配された学術誌で医療・製薬産業の宣伝のために広められている計画、政策、製品、義務付け、指示、主張のうち、一般の人々は一体何を信用できるのでしょうか。容易に見抜ける半ばの真実と欺瞞が広め続けられていることで、この膨大な産業そのものは、かつて一般の人々から得ていた無条件の信頼を損なってしまいました。

ウイルスの構成要素はその後、人体の免疫防御機構によって攻撃され破壊されるとされています。後に、スパイクタンパク質に依存するとされるSARS-CoV-2ウイルスのあらゆる変異株は、際限なく続くように見える追加接種・ブースター接種の連続によって無力化されるとも主張されました。この基礎となるナノテクノロジーはナンスとマイヤーによって

公衆衛生上の画期的な進歩であり、100年以上ぶりに発生した世界最大級のパンデミックに対する初の防御措置を提供するもので…、規模と緊急性は有名なマンハッタン計画に匹敵します [2021, p. 748]。

しかしながら、COVID-19時代に喧伝されたこの画期的成果は、遺伝子操作された合成mRNAを「隠蔽」する技術に依存しており、免疫防御システムを回避し、自然な分解から逃れられるようになっています。今では疑いのない事実として、ファイザーとモデルナのナノテク製品の推進者たちが、後に追加された他の製品は言うまでもなく、医薬ヘゲモニーが支配するメディアの中で、何度も自社製品について虚偽の説明を行ってきたことが分かっています。彼らはこの注射剤が病気を予防し命を救うと述べました。しかし、この配合製品がもたらした結果は、これらの主張と全く相反するものでした（ビーティ、2021, 2022; サンティアゴ & オラー、2023; ボロス 他、2024; キリアコプロス 他、2024; キリアコプロス、ニー 他、2024; サンティアゴ、2024; ミード、セネフ、ローズ 他、2024; ミード、セネフ、ウォルフィンガー 他、2024; ラタスター、2026）。COVID注射剤は当初から非常に有毒で有害であることが証明されています — セガラ (2023a, 2023b, 2024, 2026; さらにミシェルズ 他、2023) がファイザー公開の文書で示した通りです — 製造業者による「安全性と有効性」などの虚偽の主張だけでも十分に非難に値するにもかかわらず、ソン 他 (2026) は製薬業界所有のScienceDirectジャーナル『*Vaccine*』に発表したモデルナ雇われの「研究者」グループですが、現在入手可能な全ての独立した証拠に反して、依然としてCOVID-19製品は宣伝通りの効果を発揮したと主張しています：

証拠はmRNA新型コロナワクチンの安全性と有効性を裏付けています。公衆衛生政策の参考にするため、継続的な監視と厳格な評価が今後も不可欠です。特に重要な点として、ワクチンの安全性に関する課題は、効果、害、証拠の質、価値観、実現可能性を体系的に比較考量する、透明性のある構造化された枠組みを用いて評価されるべきです [2026, p. 128393]。

一方、これらの製品に含まれるあらゆるナノテクノロジーは、米国防総省とDARPAによって改変された秘密戦争を実行する計画を遂行するため、約52億の身体から成る生物学的環境（ファーマシューティカルテクノロジー、2024）に現在進入しています。この計画では、接種者の脳が現在の戦場となっています。プログラムされたナノシステムによって生産されるあらゆる合成生成物は、宿主となる生体自身の本来の生体シグナル伝達系とは完全に独立して機能しています。世界的な新型コロナウイルスの実験は、DARPAやその他の政府機関が明言する目的、すなわち「ハッキング可能な動物」（ハラリ 2020）にナノテクを侵入させ、「マインドコントロール」を達成するため、あるいは人々を力で屈服させるのに十分な痛みを生じさせるために、電磁場を介して脳に移動できるプログラム可能な物質を浸透させるという目的を実行する生物学的基盤を既に提供しているのでしょうか？これらの質問に対する妥当な答えは、ジョルダーノが2026年に説明した野心的な目標を読み解くことで、すぐに得られると考えられます：

米国防高等研究計画局（DARPA）の次世代非外科的神経技術（N3）プロジェクトは、膨大な数のナノスケールを開発することを目指す野心的な取り組みです

感知・送信型の脳-コンピューターインターフェース（BCI）。……ナノ材料を経鼻、静脈内および/または経口から導入し、電磁場を用いてユニットを脳内の分布箇所まで移動させる。……このシステムは、感知と送信の働きが認知、感情、行動の脳プロセスからの「読み取り」と脳プロセスへの「書き込み」を伴う場合、更に深い意味合いを帯びる。……その軍民両用性は明らかだ。そうパンドラ、この壺は開けられてしまった。肉体を持つ脳の全活動を「心（マインド）」とみなし、N3型技術がこれらの活動を遠隔から感知し調整することを目的としているとすれば、これが本質的に「読心」と「心の制御」であると理解することは、それほど難しいことではない…… [n.d. 6月に閲覧 12, 2026].

極めて重要な点として、侵襲的な構造は、天然あるいは本来の生体プロセスを乗っ取る行為に限られることはなくなり、その悪意のある目的が中枢神経系への攻撃に限られることもなくなりました。人工知能と生成モデルにおける近年の画期的進歩により、ペタスケール合成が可能になりました。つまり、操作された合成DNA材料の中で、毎秒少なくとも1京（ 10^{15} ）回の計算処理を行えるのです（ワインスタインら、2026）。さらに、これらの合成構造を体の免疫防御システムによる破壊から守る、新型コロナウイルス製剤の脂質ナノ粒子に類似した送達包材は、人工知能（AI）によって設計されたとされています。マスメディアで宣伝されている公称の目的は、高精度で達成可能かどうか、またこの目的に関する公の説明が真実かどうかに関わらず、生体内の特定の実体を標的とするものとされています（スーラ、2026）。例えば、新型コロナウイルス製剤によってスパイクタンパク質の一部を生産するために乗っ取られたリボソーム、あるいはジョルダノが「パンドラの瓶」と呼んだDARPAの生物戦争における脳神経細胞といった組織が対象とされています。

急速に進歩するナノテクノロジーの世界的な産業化は、10年以上前から企業が目指してきた事業であり、ファイザーのような製薬大手が早くもプログラム可能な論理ゲート搭載DNAナノロボットに多額の投資を行っていたことから、その動きは10年以上前から存在していることが明らかです。2015年。それよりさらに前の2012年2月29日に、IEEEはすでに「無線身体域ネットワーク」の規格公開を開始していました：

この規格では、人体の近傍または体内（ただし人間に限定されない）における短距離無線通信を規定しています。既存の産業科学医療（ISM）バンドに加え、各国の医療・規制当局が承認した周波数帯を使用します。必要な箇所では厳格な非干渉ガイドラインを順守しつつ、サービス品質（QoS）、極低消費電力、最大10Mbpsまでのデータレートのサポートが要求されます。この規格では、人物の存在による携帯アンテナへの影響（男性・女性・痩せ型・太り型などで変化します）、体内への比吸収率（SAR）を最小化するための放射パターン成形、利用者の動作による特性の変化について考慮されています [IEEE, 2012年, 271]の4ページ。

注目すべき点として、IEEEから適格なユーザーが入手できるPDF文書は非常に詳細で、多くの技術仕様、図などが含まれています。さて、早くも2015、IEEEは「ナノスケール・分子通信フレームワークに関する推奨規格」を発行しました。概要は以下の通りです：

ナノスケールにおけるアドホックネットワーク通信について、定義、用語、概念モデルおよび標準的な指標を提示します。人間が設計したネットワーク技術は、ナノスケール通信の物理的性質により、既存の通信規格で定義された範囲を超えて拡張されます。これにはインビボ、亜細胞レベルの医療通信、スマート

材料および分子レベルでのセンシング、ならびにマクロスケールの通信機構では動作が困難なほど過酷な環境下で動作する能力が含まれます。ナノスケール通信では、用語によって定義や意味合いが異なる多様な分野の協力が必要となるため、分野間の連携を支援するために共通の用語が不可欠です。ナノスケール通信について抽象的に考える共通フレームワークは、研究開発活動の定義とその関連付けに役立ちます。このフレームワークの構成要素は、比較的個別に開発を進められる十分な独立性を持ちながら、相互運用も可能です [IEEE, 2015, p. 3 の 64]。

本論文で記載されている通り、現在進行中の21st 世紀のパラダイムシフトの結果、核酸は受動的な情報担体から、能動的な自己組織化材料、ナノロボットシステムや大規模な合成ネットワークの生産材料へと変貌を遂げています。一般大衆に受け入れやすく整えられたこれらの産業開発は、進行中のDARPA「次世代非外科的神経技術(N3)プロジェクト」においてジョルダーノが指摘する通り、大規模な障害、疾患、死亡を引き起こす恐ろしいほど現実的な可能性があるにもかかわらず、人類全体の幸福のための医療進歩として位置づけられています。ナンスとマイヤー、そして数え切れないほど多くの主流派後継者たちが、新型コロナウイルスワクチン実験の鍵要素として改変合成RNAを推進してきた一方で、**合成DNA**はより安定しており、扱いやすいことが知られています。さらに、新型コロナウイルスワクチン製剤から発見された成分の中には、注射剤推進派が製造残渣として片付けてきた数十億個の合成DNA分子が含まれています。ただし、ナノテクノロジーの分野ではDNAが合成RNAよりもはるかに安定しており、操作しやすいという点を考慮することが重要です。

DNAは天然および合成のあらゆる分子の中で、最も予測可能でプログラム可能な相互作用を持っています。優れた結合特異性と熱力学的安定性を備え、相補的な相手に確実に結合する配列をほぼ無限に選んで作製することができます。ナノメートルスケールで構造が明確に定義されており、持続長は~50 nm 通常条件下です。自動化された方法で迅速に合成・修飾が可能で、DNAに作用する多種多様な酵素により、構造を制御しながらさらに調整・改変することができます [Seeman & Sleiman, 2017, p. 1]。

ナノテクノロジーを基礎とする規模の階層構造

核酸ナノテクノロジーという新しい学問 (He ら、2017) は進化を遂げ、自己構築 (自己組織化) と指数関数的複製 (自己複製) を行うよう設計された、非常に精緻で複雑なナノ構造から始めることが可能になりました。ナノスケールでは、上位レベルの構造のためのコードと構築命令を含む合成物は検出されません。生きた人間の体内に入ると、これらの合成プログラム装置の一部は、より大きなスケールの構造へ自己組織化を始める前に、体内のあらゆる自然な生物学的バリアを通過することができます。表1に示す通り、レベル1・レベル2の構造は通常の光学顕微鏡で検出するには約100万分の1の大きさから、徐々にスケールが大きくなっていきます。レベル3・レベル4を経て上に進むと、レベル5に到達します。このレベルでは、世界中の防腐処置士が発見した遺体から摘出される、巨大で致命的、醜悪な「白い血栓」と同じ大きさの構造となります (ClarkCountyToday.com、2022; Santiago & Oller, 2023; Kasner, 2024; Hulscher, 2026)。

表1

ナノテクノロジーを起点とした合成集合体の階層分類

レベル	分類	サイズスケール & 観察 モダリティ	説明および構造的特徴
レベル1	サブナノスケール 前駆体 & モノマー	オンゲストロームから <2 nm まで (標準的なものでは見えない 顕微鏡)	基礎を成す原料の分子ビルディングブロックです。 鋳物原子、毒素原子、アミノ酸、小さな を含みます 合成DNAおよびRNA分子、合成 ヌクレオチド、および初期のDNAオリガミ結晶 (ダグラス、バシユレ、& チャーチ、2012。
レベル2	ナノスケール メタマテリアル & ナノ粒子	数nmから数十 nm (走査を必要とする 電子顕微鏡または 原子間力 顕微鏡)	基礎となる構造部品およびドーパント が 物理的、化学的、電子的、光学のあるいはを変化させる DNAおよびRNAオリガミの生物学的性質 構造体、構造足場、ナノ粒子 (金属性の ランタノイド、超常磁性酸化鉄ナノ粒子 SPIONs、脂質ナノ粒子、小型ヒドロゲル、および大型の タンパク質分子。
レベル3	機能的 ナノロボット & 複雑なタイル	数十から数百nm (走査型を必要とする 電子顕微鏡または 原子間力 顕微鏡)	非常に小さく、人工的に設計された機能的構造体です。具体的には これには、自身の能力によって定義されるDNAオリガミナノロボットが含まれ 能動的でトリガーに応じた機械的動作を行う能力を持っています (例： 化学的な論理ゲートや外部の電磁気を利用した 信号で「箱のふた」を開けてペイロードを放出します)、より大きな ハイドロゲルマトリクス、および自己集合する「タイル」で す。
レベル4	マイクロスケール アーキテクチャ & プロトセル	ミクロンから数百の ミクロン (で視認可能な 光学顕微鏡法)	剛性のある幾何学的な自己集合体 (フィラメント、 チューブ、リボン) を含み、頻繁に生物の寄生虫を模倣しています、 リボソーム膜のような「柔らかい」構造も、これらと共に存在します、 細胞スケールの容器と小さなプロト組織が含まれます。このとき バイアル内の物質から発達する過程を観察すると、これらが観察されます 自己組織化の段階で活発に働いています。これを観察すると 体液中に浮遊している時点で、既に自己組織化が完了しており 最終的な形態に形成されています。
レベル5	マクロ- 構造 (「白い血栓」)	ミリメートルから >1 まで メートル (にとって容易に見える 肉眼)	から抽出された最終的な物理的集積物 血管系です。これらはかさばった肉のような構造物であり 大型の原組織です。肉眼で容易に見える一方で、 光学顕微鏡により、それらが元素から編み上げられていることが明らかになった。 先行する段階の要素からできており、しばしば筋状の様態とし て確認できます。

類似の構造物とその起源は生きている人の体内から発見されています（ライオンズ＝ウェイラー、2023；ケル & プレトリアス、2024）。DNAオリガミは画期的なナノテクノロジーで、長い1本鎖DNA分子を短い「ステーブル」鎖を使って、複雑で特注の2D・3D形状に折りたたむ技術です。このプログラム可能な折りたたみにより、科学者はナノスケールの構成ブロックを作製でき、バイオセンサーや薬物送達媒体を開発するため、他の物質や分子を組み込む足場や容器として利用できます（石田ら、2025）。表1にはこのスケールの階層構造がまとめられています。簡単に説明すると、構造物の階層分類を示しており、レベル1からスケールが上方に向かっていきます。レベル1では構成ブロックは150ピコメートル未満から2000ピコメートル（つまり2ナノメートル）の範囲の原子で構成されています。新型コロナウイルスの合成製剤の中では、このレベルの構造物には、ディブラシらがCOVID-19製品から発見した、毒性の高い電磁波または光周波数のアップコンバートを行うランタノイドが含まれます（2024）。分子構造内の原子レベルの距離はピコメートルまたはオングストローム（Å）で測定されます。1ピコメートルは1ナノメートルの1000分の1、または100オングストローム（Å）です。レベル1の範囲に含まれるその他の構成ブロックはアミノ酸で、最も小さいグリシンのファンデルワールス直径は~300ピコメートルで、これは大量の水に含まれる単一のH₂O分子とほぼ同じ大きさです。合成タンパク質の構成ブロックとなるアミノ酸は、一般にその断片が「ペプチド」と呼ばれ、合成DNAおよび/またはRNAが要求する厳密な配列に基づいて構築された、かなり長いアミノ酸残基の連なりから構成されることがあります。

141個から146個のアミノ酸の連なりから成り、最大ファンデルワールス長が約5500ピコメートル（つまり5.5ナノメートル）であるヘモグロビンのようなタンパク質の領域を対象とするには、レベル2に進まなければなりません。重要でかなりよく知られた例として、ヘモグロビンタンパク質は構成成分であるアミノ酸よりもはるかに大きく、アミノ酸はさらにその構成要素である原子よりもかなり大きいです。（「古典的生物学」による説では）任意のタンパク質における構成要素の順序と配置を定めるには、さらに複雑で大きなRNAから成る分子が必要で、このRNAの長さは最大50ナノメートルと推定されています（幅はこれよりもかなり小さいですが）。同様に、天然生物のRNA分子は（伝えられるところでは）DNA遺伝子配列内のはるかに大きく複雑な構造から縮小されたもので、DNAの直径は約2ナノメートル、長さは最大約750ナノメートルです。

したがって、ナノテクノロジーの合成分野における合成DNAオリガミ分子（緻密に設計された平面状の「ブレッドボード」、つまり設計通りの生成物を作り出す高度に洗練された動的な鋳型のようなものです）を扱う場合、進む方向が誤っているように見えるかもしれません。すなわち大きいものから小さいものへの方向です。というのも、合成RNA分子は対応するDNAより小さく、そのタンパク質生成物より大きいからです。しかし、合成DNAのブレッドボードである合成コード分子には、動的で能動的に機能する情報が搭載されているため、任意のタンパク質生成物の多数のサンプルを生産することが可能となり、表1の尺度においてレベル2からレベル3へと迅速に移行することができます。また、基本的な合成DNAブレッドボード分子は非常に小さいにもかかわらず、技術者はサブナノメートル精度でこれらにナノ電子部品やデバイスを取り付けることができ、これによって精巧でありながら非常に高精度な電子回路の設計・開発が可能になることも留意すべきです。

次にレベル4では、ミクロン領域で十分な大きさを持ち、図1および図2に示す種類の顕微鏡で観察できる実体に到達します。法医顕微鏡検査によって、自己組織化する実体の驚くべき多様性が明らかになるのはこの段階です。これらの実体は、以下の両方の場所から形成されていることが確認されています：

新型コロナウイルスワクチン液の入ったバイアル内、ならびに新型コロナウイルス調剤の接種者および当該接種者の近くにいた人の体液内で、(Y. M. Lee, Park & Jeon, 2022)。本論文では、例示的な顕微鏡写真を少数のみ提示しますが、インターネット上には何千枚もの写真がアクセス可能です。また他の著者ら(Hughesを参照、2022; Lee & Broudy, 2024; さらにNixonら、2022)らは、自己組織化する実体の体細胞に対する毒性と致死性に関する包括的な縦断的証拠を提示しています。

レベル5では、既に記載したすべての小規模な実体に加え、より大きなスケールの高分子化成分が存在します。これらは遺体の中だけでなく、COVID-19の合成病原体を接種された生存者の体内からも発見されており、下の図3に示す反発を呼ぶ「白い血栓」として現れています。

しかしながら、DNAとRNAの構築物の階層で作られ得るすべての構造がナノスケールから始まることは、常に心に留めておくべきであり、いくら強調してもしすぎることはありません。したがって、実体の階層全体をナノテクノロジーの生成物として認識することは、合理的であるだけでなく、必要なことでもあります。さらに、これらは仮説上の実体ではなく、これらは

現実の存在であり、安易に否定することはできません。ウルリッヒ(2024)が示唆したような、天然産物である「遊離した脂質」として片付けることはできないのです。このように単純化しすぎた説を提唱することは、少なくとも無意識のうちに材料科学の進歩を否定することになります。この進歩は、小型・中型・大型のIoBNT(生物/ナノモノのインターネット)、BAN(身体域ネットワーク)、IoB(身体のインターネット)に関するIEEE規格に記載されているほか、脳が現在の世界の戦場であるというDARPAの公開声明、本論文で参照されているその他多くの科学文献、およびそれらの参考文献で引用された文献にも記載されています。

本論文で議論されている技術が既に運用されていることを疑う合理的な懐疑論者のために、政府の秘密研究開発プロジェクトが後に一般公開されるまでに約5年から30年(あるいはそれ以上)の遅れが生じることを示す例が、過去70年間に多数存在します:(1)マンハッタン計画の理論的基礎と核爆弾の開発は、1938年にボーアが明らかに知っており、アインシュタインもそれよりずっと早く知っていた可能性が高いですが、1945年7月16日のトリニティ実験まで一般に知られることはなく、少なくとも7年の歳月が経過していました(マンハッタン計画、2024);(2)1950年代半ばに開発されたU2偵察機は1960年に一般に公開されました(エリス、2025);(3)B2ステルス爆撃機、SR-71/A-12(オックスカート)、ハブブルー/F-117の機密研究開発は、公に認知されるまでに約10年から25年の遅れがありました(DARPA、2020);そして(4)現在では車や携帯電話などあらゆる場所で日常的に使われているGPSは、研究の起源が1960年ごろまで遡るにもかかわらず、広く一般に普及したのは1990年代になってからで、約30年の遅れがありました

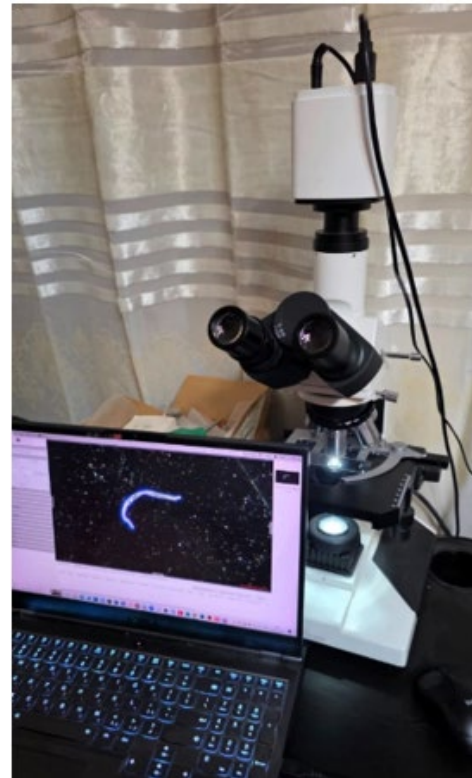


図1. 暗視野モードで表示されたネオジェネシス・システムズ製暗視野/明視野光学顕微鏡です。デジタルカメラとコンピューターインターフェースを搭載しています。

(ウィキペディア、2026). これらはすべて、COVID-19として知られる計画パンデミック (ウィリス、2020; アイク、2020) と同じく、一般大衆にその存在が知られるよりずっと前から、現実存在していたものです。

法医 COVID-19注射剤における顕微鏡検査と合成侵入物質

理論モデルや独立した化学分析を超えて、未加工の注射用バイアルと生のヒト末梢血サンプル (およびその他の体液) のオリジナル法医顕微鏡検査により、ナノテクノロジー構造のリアルタイム形成と全身への侵入が記録されています。例えば、Lee、Park & Jeon (2022) は、COVID-19注射液のバイアル中に見られる物体と、同製剤接種者の遠心分離後の血漿中に見られる物体が事実上同一であることを示す並列顕微鏡写真を提示しました。それ以来、複数の研究者が法医顕微鏡検査を広範に応用し、Leeらの発見を確認しています。例えば、Hughes (2022)、Lee and Broudy (2024a、2024b)、Yanowitz (2023a、2023b) をご覧ください。

図1に外観、図2に機能が記載されている Neogenesis Systemsの暗視野/明視野光学顕微鏡は、デジタルカメラインターフェースに3.3倍の2次切り出し倍率を加えた仕様で、光学画像は対角1/2.6インチの4Kセンサーに投影されます。この光学的な基準を超えて、最終的な見かけの倍率は表示媒体に大きく依存します。例えば、1/2.6インチセンサーで撮影した画像を、対角8インチの標準的なコンピューター画面に表示すると、さらに20.8倍のデジタル倍率が追加されます (計算: 8インチ × 2.6)。したがって、20倍の対物レンズを8インチ画面で表示する場合、画面上の合計相当倍率は約1,373倍 ($20 \times 3.3 \times 20.8$) となります。多くのコンピューターではさらに大きな27インチ画面が使用されています。一般的な法則として、対物レンズの

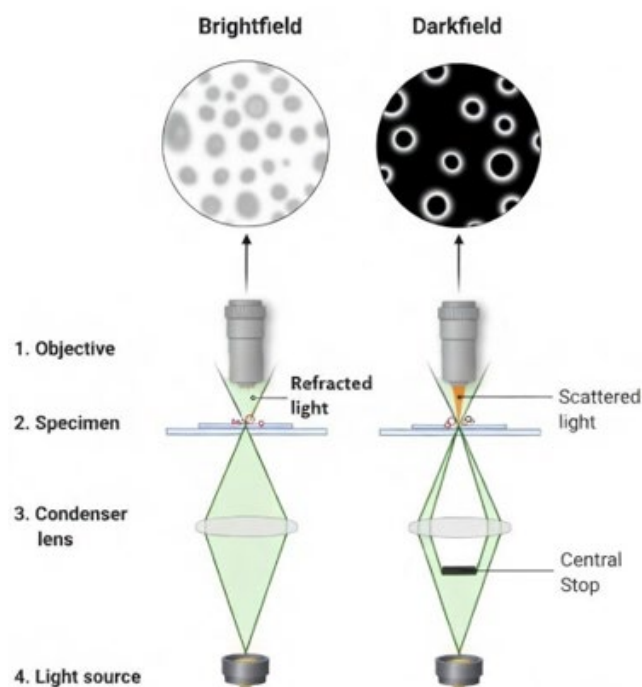


図2. 明視野顕微鏡法と暗視野顕微鏡法の比較。

倍率は最終的な表示サイズに応じて実質的に50倍から100倍が乗算されます。つまり10倍の対物レンズでも、大型モニターで表示する場合、容易に最終倍率1,000倍を得られます。特筆すべき点として、カメラ (図1) はネイティブ4K解像度で撮影を行い、ソフトウェアで標準HD解像度の1920×1080ピクセルに容易に縮小できるため、大きくデジタル拡大しても最終画像は滑らかでピクセル化が生じません。

明視野顕微鏡では、光源からの光を、光路の一部であるコンデンサーレンズによって円錐状 (図2) に標本に集光します。コンデンサーレンズは下方から標本に光を集めます。屈折した光は標本を通過した後に対物レンズに集められ、明るい背景上に標本の低コントラストな像が作成されます。

暗視野では、中心の光を遮るために光路に中央絞りが配置され、光源の外周部の光だけが中空の円錐として斜めにサンプルに集光されます。この斜めの光（標本内のエッジ部分から来るもの）は、標本のエッジによって上方に散乱されて対物レンズへ向かい、この散乱光だけを集めることで高コントラストで明るい像が得られ、暗い背景上で標本のエッジが強調されます。このように、暗視野像は明視野像の2次元微分像と考えることができます。



図3. 防腐処理業者によって遺体の血管系から摘出された長い「白い血栓」。

光学顕微鏡は自己集合の否定できない形態学的証拠を提供するものの、観察された出現構造の元素組成や分子組成を特定することはできません。表1にナノのレベル1として記載されている原子サイズまで分析するため、研究者は誘導結合プラズマ質量分析（ICP-MS）のような高度な機器に頼らなければなりません。しかし、この機器であっても、次の物質の存在を容易に検出することはできません。

特定のタンパク質などの複雑な化合物または生化学物質です。化学結合体と複雑な分子構造を評価するためには、全て高額な追加の機器が必要になります。残念ながら、このような高度な機器の利用は、費用だけでなく、規制の不透明さの維持、秘密契約、完全に独立した研究者が利用料を支払う能力と意思がある場合でも意図的に利用を制限する措置によって、制限されています。

ディブラスではあるもの ¹ et らは、多くの未記載の化学元素を特定するためにICP-MSを使用することに成功しました —

彼らが処理した新型コロナウイルス注射剤のバイアル内に存在する光遺伝学用のランタノイドや重金属など — にもかかわらず、任意の成分・大きさを持つ複雑な化合物を特定するために質量分析法を用いることはできません。そのため、以下に示す光学画像の形態学的解釈は、micを用いた我々自身の視覚的発見の関連付けに依存しています

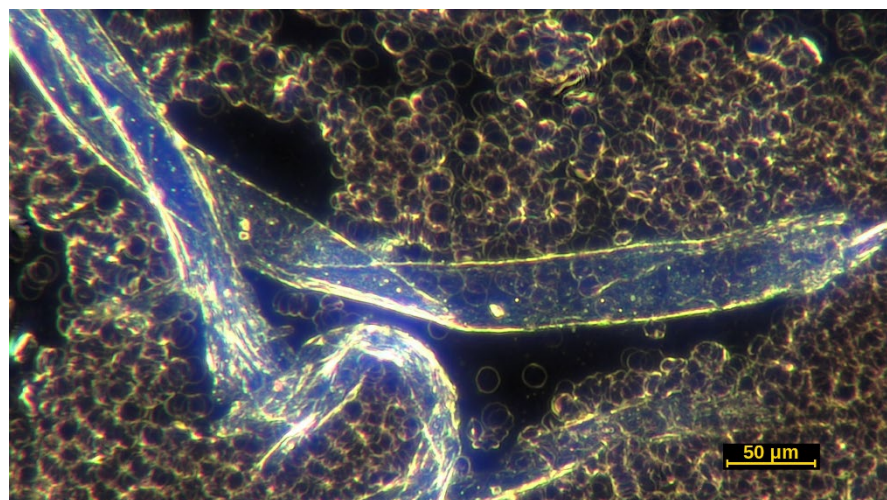


図4. ワクチン未接種のボランティアから指先採血した血液サンプル中に見られるナノテクノロジー構造物の一部。この構造物は剃刀のように鋭いリボン状で、長さが数百マイクロメートルあり、折り重なった形状をしています。

Diblasiらの元素データを用いた分光分析は、直接的な

図、その他の顕微鏡画像、および先端材料科学の文献に広く記録されている自己集合挙動との視覚的比較（例：Saekiら、2014）。

表1を参照して前述した通り、ナノテクノロジーがレベル5まで規模拡大されると、図3に見られる「白い血栓」のような構造物が生成され、肉眼で容易に確認できます。鋭利なりボン状の物体（図5および図6に示すファイザー社製品に発生するリボンに類似した、図4に示す物体など）によって血管内皮が裂傷することで生じると予想される損傷や残留デブリは、

図3に示される「白い血栓」を摘出する遺体防腐処理業者によって確認されています。彼らは一貫して、異常な「白い血栓」が血管内壁に強く付着しているため、無傷で取り出すことが非常に困難であると報告しています（O’Looney ら、2022, 2025; 2022; Trigo, ; Clark County Today.com, 2022; Zee et al., 2024; Kasner, 2024).

図4のリボンに類似する構造で、ヒト血管系内の毛細血管に付着したり自由に循環しているものについては、これまでにM. Leeらによって議論されています（2022）。また、本内容は生物医学研究・環境



図5. ファイザーのバイアルから採取した液を滴下したスライドガラス上で自己組織化し、カバーガラスの下に位置する「寄生虫」に似た合成構造。

科学』に掲載のJeonら（2023）による論文でも報告されています。問題の事実についてはYanowitzが2023aで最初に議論しており、Y. M. Leeの記述通り、彼の研究は他の顕微鏡学者や研究者の研究と並行して行われてきました

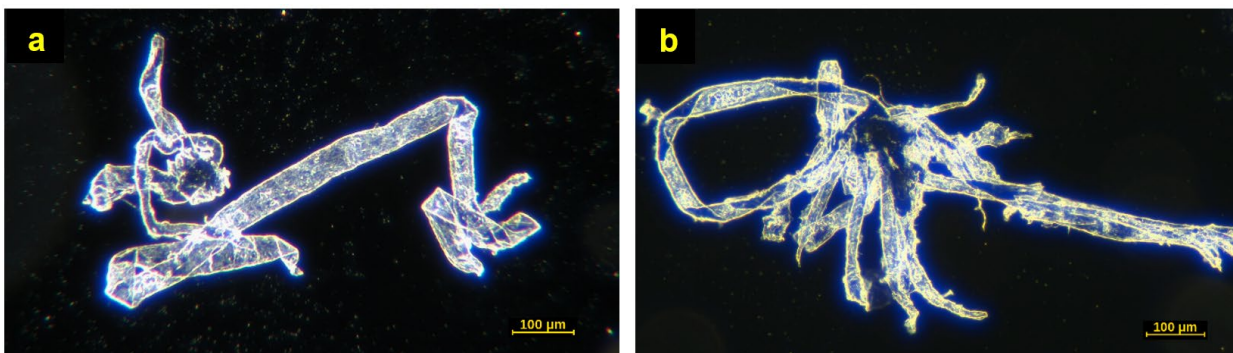


図6. a)とb)はいずれも、ファイザーのバイアル内容物を1滴載せた顕微鏡用スライドガラス上で自己組織化した、非常に大きな「リボン」型の構造です。上部のカバーガラスによって高さが制限され、構造が自身の上に折り重なっています。

およびBroudy（2024a）、Hughes（2022）によって報告されています。彼らはナノ材料の物理的形状、模様、幾何学構造について記述しており、血管、臓器、腱といった組織を穿刺、摩擦、または裂傷させることで機械的損傷を引き起こす可能性のあるナノ材料も含まれています。Donaldsonら（2010）は、カーボンナノチューブとアスベストの物理的特性、例えば長く細い針状の

幾何学構造が、肺内での残留と炎症を引き起こすメカニズムに焦点を当てていました。彼らの研究では、ナノファイバーの鋭さと長さが内臓に物理的損傷を与えうることが確認されています。LeeおよびBroudy (2024a) は、合成mRNA注射用溶液の培養サンプル中に「実時間での自己組織化」による「実体顕微鏡で観察可能な人工構造物」が存在することを記録しています。彼らは鋭い角を持つ「長方形」「正方形」「リボン状」の硬い構造物を含む幾何学形状について記述しています。Campra (2021) は、カミソリのように鋭い辺を持つグラフェンの二次元シート状構造を検出しており、これらは確実に細胞膜を機械的に破壊する可能性を持っています。したがって、これら独立した研究者たちによるすべての証拠を総合すると——強調しておくべき点として、新型コロナウイルスワクチン製造企業を代表する販売関係者は生活や雇用が雇用主・資金提供者の製品支持に依存しているのに対し、これらの研究者は主流の医学・製薬の覇権に異を唱えることでむしろ組織から非難を受ける立場にあります——現時点で、異常なタンパク質構造は実際に、世界中に流通した新型コロナウイルス注射剤に起因する合成物質による直接的な後遺症であることはほぼ確実です (Santiago & Oller, 2023; McCairnら, 2025; McMillanら, 2025; Westmanら, 2025; Hulscher, 2026)。

さらに、直接的な視覚的証拠により、バイアルの液体基質内で無細胞タンパク質合成を行い、機能的に生きた生物細胞を模倣する、膨大な合成細胞サイズの容器が捉えられています。この様子は図5で確認できます。注目すべき点として、ここに写されたワーム状構造の画像では、寄生虫のような実体の周囲を除き、ガラススライド全体に粗いバイアル粒子が見られ、この実体の周りは何もないきれいな空間になっています。この実体は以前周囲にあったあらゆる物質を集めており、おそらく自身を組み立てるためにそれらを使い切ったのだと考えられます。いずれにしても、ワーム状の実体の近傍には何もない空間が存在するようです。

類似した構造は図6aと図6bにも見られ、局所に留まることはありません。これらは（既に組み立てられた実体として）血液中だけでなく、全身に浸潤した精液 (Lee & Broudy, 2024a)、イオンに富み導電性の高い血漿環境 (Lee, Park, & Jeon, 2022)、さらに脳脊髄液にも記録されています (Yanowitz自身の脳脊髄液中に存在する、図3および図4のリボン状構造に類似した異物の動画は [こちら](#) でご覧いただけます)。

生物学と医学における盲点

現在も進行し、さらに拡大し続けている巨視的な幾何学格子、未公表の光遺伝学的ランタノイド (Diblasi ら, 2024)、図5、図6a、図6bに示されるような細胞スケールの巨大合成容器のリアルタイム生血観察という現実を前に、重要な疑問が生まれます。なぜ世界の医療界は、現在数十億人に影響を与えている、有害なナノテクノロジーが世界中で人間の体内に浸入している明白な事実に、気づかないままなのでしょうか？

現在の健康危機は「生物学的な死角」のため、誰の目にも見える場所に隠れているようです。医療業界の注目は他の場所に向けられているためです。世界各国の国防省やその他の政府機関は、まるで巧みな手品師のように、片手でカリコ=ワイスマンのNI-にスポットライトを当てていますメチルシュードウリジン (Ψ) 修飾体について、ナンスとマイヤーが大々的に発表しています。(2021)。彼らは天然の生物学的システムを支配下に置いているというのですが、手品師はもう片方の手で、全体を視界から隠しているのです

合成生物学分野におけるIEEEの技術進歩とそれに対応するインフラの歴史、ならびに人体本来の生体シグナル伝達システムを利用する必要性を完全に回避するDNAナノテクノロジーを記述した膨大な科学文献の全体です。実際、合成ナノテクノロジーは体系的に本来のシステムを回避し、人体の自然な防御システムから身を隠しています。それにもかかわらず、伝統的な臨床医、ウイルス学者、研究者は、天然の生理学的脅威への関心から、COVID-19注射剤によって目の前に導入されたと思われる、人工設計された非生物学的な病原性ナノテクノロジーを考慮に入れていないようです。実際、研究者を名乗る多くの主流の販売担当者は、注射剤の製造元である医薬品メーカーが所有する権威ある学術誌に、自社のCOVID-19製品を誤って称賛する内容を発表し続けています。例えば、ソーンら (2026) は現在も「安全で効果的」とされるCOVID-19の製剤が宣伝通りの役割を果たしたと主張しています

感染予防と人命救助を目的としています。一方、事実を検証する独立研究者たちは全く正反対の結論に達しています。新型コロナウイルスの注射剤は害しかもたらさず、世界各国の人々への普及度に比例して全原因死亡率を上昇させている、という結論です。

主流派の医療専門家は、古典ウイルス学の考え方、あるいは人体本来の生体シグナル伝達系の特発性機能異常という考え方で思考し続けることを促されているようです。その結果、彼らは何百万人もの人々に広がる現在の不調、過去に例がないほど増加した原因不明の突然死（ダウドら、2024）はもとより、路上で交通に飛び出し罵りながら激しく身振りしたり、ゾンビのように道端に座って独り言を言ったりする認知障害の人の数が大幅に増えている現象さえも、不安の新しい形、新型コロナウイルスのまれな「ウイルス変異株」、「ロングコロナ」の重症例、あるいは自然発生した新しい「自己免疫疾患」だと誤って判断しています。自閉症の「謎」のようなケース（子どもの健康防衛チーム、2019）では、医師が患者自身を責めることさえあります。「あなたはただストレスが多すぎるので、抗不安薬や幻覚抑制薬を処方できる精神科医を受診した方が良いでしょう」と言うのです。

人間の体内に本来存在する天然核酸に関する伝統的な見方は、見たところ、すでに開発され世界中の数十億人に投与されている合成核酸ナノテクノロジーを完全に覆い隠しています。現在の材料科学ではすでに、「非遺伝子DNA」と呼ばれる設計された合成DNA分子が利用されています。これらはプログラム可能なコンピューティング基盤、そして分子ベイト（捕獲用の餌）として機能するように設計されています（「非遺伝子DNA・・・」 2026）—このような「ベイト」は短くプログラム可能なDNAから構成され、他の物質と結合し、細胞内の特定のタンパク質を集めて結合することで、標的タンパク質を「餌」として捕獲するように設計されています。医療における治療と戦争における破壊の両面で、これらが善悪いずれの目的に利用される可能性は、生体の体内に入った後の実際の影響をどこまで制御できるかによってのみ制限されます。ジョルダーノが権威ある2018bウェストポイントでの講演で指摘したように、2時間を超える同発表の終わり近く、脳や他の臓器系を標的とする軍用途は、組織や臓器の損傷という形で衰弱を引き起こし潜在的に致命的な結果をもたらすのに、さほど高い精度は必要ありません。ブトナルとチャップマンが指摘したように、標的設定の精度が重要となるのは治療用途の分野だけです（2019）。爆弾、手榴弾、広範囲に作用する毒、そして脳に応用される磁気妨害装置

を人間に用いる場合、非常に正確な標的設定は必要ないと、ジョルダーノは2018bウェストポイントでの講演で繰り返し述べていました。

おそらく善意の医療専門家の大半に影響を与えているこの非常に現実的な「死角」は、COVID-19関連技術が数十億もの人々に与えている現在の影響を隠蔽する作用をもたらしています。同時に、助けを求めて切望し、何らかの効果的な「回復プロトコル」に期待を寄せる普通の患者の方々は、表1に示されたナノテクノロジー階層の合成実体のいずれも検出することすらできず、ましてや分解して除去することもできない多くのアプローチを試しているようです。しかし、こうした技術の世界的な影響こそが、現代の伝統医学への課題において支配的な力となっているようです。最も絶望し、医療界に見捨てられたと感じている患者の間で、自殺に至るケースが記録的な数に増えています（Kikuchiら、2023；Bouzaら、2023；ならびに de la Torre-Luque、2023）。ファイザー社が広く流通させている「コミナティ」として知られるCOVID-19注射剤の欺瞞について告発したフランスの生物統計学者で内部告発者のクリスティーヌ・コットン氏が、絶望の中で自死を選ぶに至った理由を公表した、最近の記録が明確な事件をご存じでしょう。彼女は、ファイザーの合成mRNAによる製剤に対する内部告発活動を始めた後に自身に降りかかった、原因不明の終わりのない苦しみに終わりが見えなかったのです（Leake、2025）。

無細胞タンパク質合成（CFPS）

現在のバイオエンジニアリング科学では、一般的な医学的定説や伝統的な古い教育と異なり、タンパク質の生成は生きた宿主細胞の機構を利用することに依存していません。タンパク質は無細胞タンパク質合成（CFPS）システムによって、予測可能に、安定的に、大量に合成することができます（シルバーマンら、2020）。基礎研究では、生体の本来の細胞の外全体で強力なCFPSを機能させるため、非常に単純化された粗細胞ライセートを抽出・調製する方法が明確に解明されています（グレゴリオら、2019）。したがって、工業用CFPSを駆動する生体機構はヒト細胞由来であることが稀です。代わりに製造工程では、細菌、真菌その他の非ヒト生物から採取した細胞ライセート（抽出物）が使用されます。中でもよく使われているのは*E. coli*で、そのライセートは新型コロナウイルス感染症の製品に使用されています（シュパイヒャーら、2025；およびカイザーら、2025）。この工程にはいまだ企業秘密が適用される部分があり、インスリンなどの治療用タンパク質の合成にも使われています。例えば製造業者の研究室では10年以上前に、バイオエンジニアはCFPS機構を小型化・区画化し、注射用の半透過性マイクロカプセルに封入できることを図7の通り実証に成功しています。マイクロ流体工学を用いて、研究者らは鋳型DNAと翻訳機能を持つ細菌酵素を、均一な細胞サイズのマイクロカプセル（直径約25～50マイクロメートルで、図8に見られる種類のもの）に封入しました。このマイクロカプセルは、ポリエチレンイミン被覆アルギン酸塩から構成される半透過性ポリイオン複合体膜を備えています（サエキら、2014）。図7はこの工程を段階ごとに示しています。

第1段階では、ライセート翻訳機構を供給源生物から採取します。例えば*E. coli*といった細菌や、一部の真菌が用いられます。次の第2段階では、抽出されたライセートに鋳型DNAプラットフォーム、エネルギーを供給するアデノシン三リン酸（ATP）、アミノ酸を加えて体外で混合します。続く第3段階で混合液をマイクロカプセルに封入し、第4段階でこのマイクロカプセルを体内の血液や組織に浸透させます。マイクロカプセルは半透性拡散バイオリクターとして機能し、体内から栄養分を取り込み、設計された任意の働きを実行するために合成タンパク質や毒素を排出します。繰り返しになりますが、

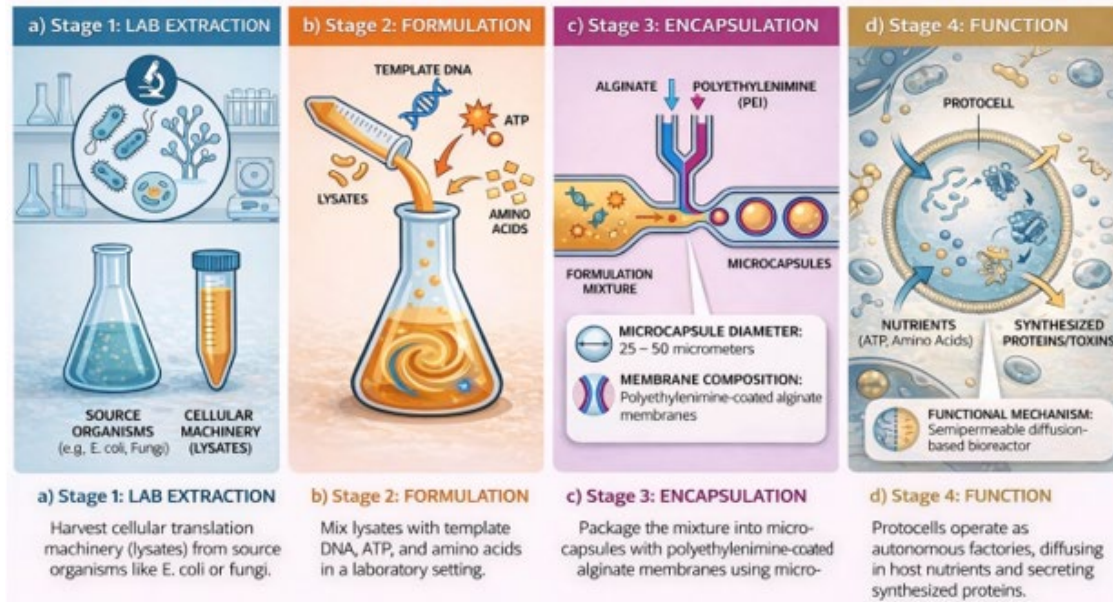


図7. CFPS製造を研究室からマイクロカプセルへ移行する様子を描いたイラストです。この製造プロセスでは涙形のマイクロカプセル（または「プロトセル」）が生成されやすい特徴があります。Saekiら（2014）を参照してください。

次の点に注意が必要です。ブチナルとチャップマンの指摘によると、軍事的な加害用途では、合成タンパク質や毒素を特定の細胞や組織に送り込むために高精度な標的設定は必要ない一方、治療目的では精度が要求されるという点です（2019）。

このような細胞サイズのCFPSカプセルの形態的存在と機能性については、これまで広範囲に記録・分析されています（

Yanowitz,

2023b)。外膜の半透過性により、宿主環境から周囲のアミノ酸やATPなどの未加工の生体基質が連続的に内部へ拡散し、反応のエネルギー源となります。一方、合成された特定のタンパク質、毒素、副産物は宿主内に分泌されます（図7を参照）。人工CFPSまたは天然の細胞膜の透過性は、外部の電磁場およびパルスによって動的に調節できることが十分に研究されています（Kuo

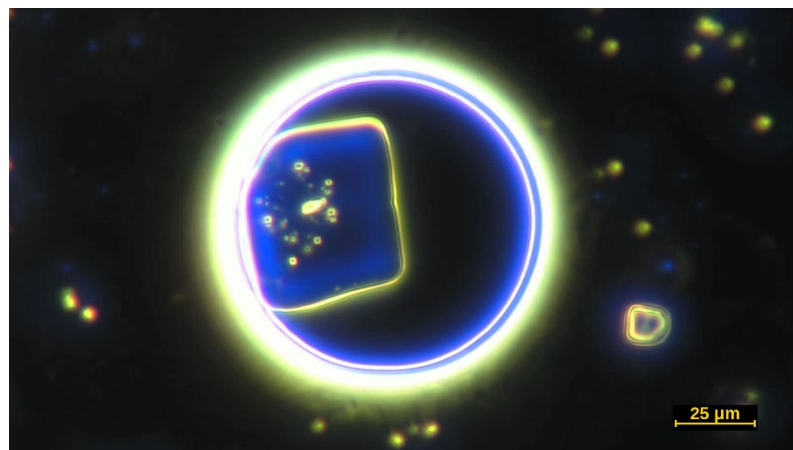


図8. 非常に大きな（約75マイクロメートル）球状で区画化された細胞サイズのカプセル（「プロトセル」。メタDNAを含む可能性のある小さな長方形区画を内包しています）。ファイザーのバイアルに入っていた脂質二重膜に封入されたもので、事前に存在していたものか、極冷凍保存されていたファイザー液を解凍した際に自己集合したものです。

& Chen, 2010 ; Angelova ら、 2025 ; Agrawal & Khurana、 2026)。これらは軍事用途において特別な重要性があり、様々な文脈でGiordanoによって指摘されています（Oller、Santiago、& Broudyも同様に、 2025）。

図9の顕微鏡画像では、b、c、dがCFPSによって生成されたマイクロカプセルの予想通りの涙滴型に似た形状をしています。実際には図7で詳しく説明されている生成物の例である可能性があります。CFPSで生成されたタンパク質が持続的に分泌されることから、DNA誘導型タンパク質重合の基質を提供する「分子ベイト」構造を思い起こさせます（McMillanら、 2018; Hundtら、 2022）。

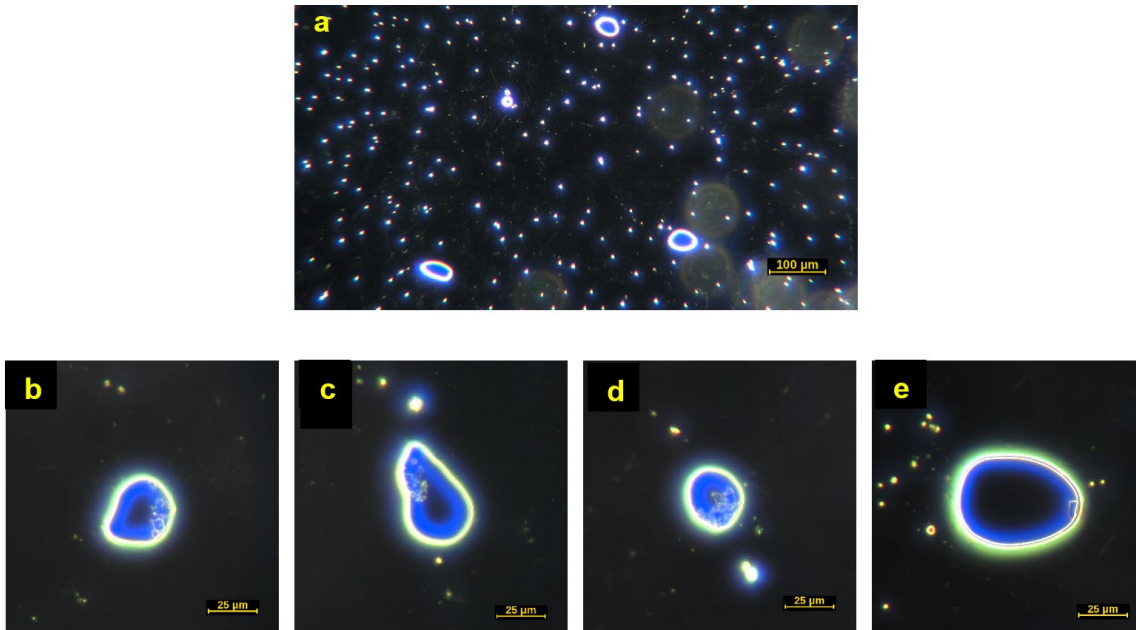


図9. a) カバーガラス下でファイザー社バイアルの液滴中に浮遊するCFPS細胞に似たプロトセル。高倍率で観察すると、一部の細胞 (b、c、dを参照) はSaekiら (2014) が示した涙滴型CFPS細胞に似ている一方、より大きなプロトセル (eを参照) は形状が異なり、本論文後半で議論する通り、全く別の種類のプロトセルである可能性があります。

私たちは、このようなDNA誘導型タンパク質重合こそが「白い血栓」の最も可能性の高い根本原因であると主張します（上の図3を参照）。このような長いタンパク質重合体は、合成DNAとRNAによって生まれたものにすぎないと私たちは考えています。

合成DNAは本来の生体シグナル伝達の役割を奪われ、巧みな工学技術によってプログラム可能な巨視的な構成ブロックへと変革され、操作された「メタDNA」構造として機能することが可能になりました (Yaoら、 2020) は、連続一本鎖オリガミの骨格内で作用しています (Hanら、 2017) 。主流の医学界のほぼ全体、および主流の資金提供を受けて研究する多くの研究者は、背景に深く隠されながらも厳格に強制される厳しい制約の下で活動しており、公表される結果はワクチン製造元の目標に有利なものに制限されているようです。彼らの多くは、次の観点のみで考えるよう誘導されているように見えますΨ改変RNAであり、一方独立した法医学分析者らは、莫大な量の未宣言濃度のプラスミドが存在することを明らかにしてきました

DNA、さらにスパイクタンパク質をコードする合成mRNA中に、発がん性が指摘されている「SV40プロモーター・エンハンサー」配列さえも存在しています (Speicherら、2025)。BroudyとUeda (2026a; 2026b) は、体系化された「ベイトアンドスイッチ (おとり商法)」アプローチについて詳しく論じています。このアプローチは医療業界の大部分を欺き、ひいては一般大衆に大きな影響を与えたようです。注射剤に含まれるナノテクノロジーにこの手法が適用されており、人々は注射剤の毒性について率直な回答を期待していましたが、BroudyとUedaによると、人々は偽の「「汚染物質」[を再分類した、未宣言の生物学的活性成分]」を受け取ったとされています。その間、製造元と規制当局は、「投与1回あたり脂質ナノ粒子に封入されたプラスミドDNA断片が最大 1.23×10^8 から 1.60×10^{11} 個存在することについて (ただしこの電子顕微鏡画像は未だ公開されていません)、これらを単なる「製造不純物」、あるいは生産時のろ過不良による残留鑄型に過ぎないとして片付けています (Kaiser、2025)。私たちは、合成メタDNAと自己組織化ナノテクノロジーに関する豊富な研究文献が、このような無害な説明に対する合理的な信頼を完全に消滅させると信じ、主張しています。

宿主のクリアランスシステムを回避する合成DNAとRNAの設計

上記表1に詳述された階層的成長を達成するには、初期のナノ構造が、人体のヌクレアーゼに富んだ有害な環境を生き残る必要があります。そのため、非常に洗練されたステルス技術、さらには要塞化技術のセットが開発されてきました。DNA鎖置換反応への化学修飾ヌクレオチドの導入は、生体系内でDNAナノテクノロジーを機能させるための、基本的で認められた前提条件です (Kabzaら、2022)。構造的な知見から、宿主のヌクレアーゼによる酵素分解を防ぐために特定の核酸塩基修飾が明確に設計されており、正確な幾何学的折りたたみに必要な極めて高い熱力学的安定性を人為的に高めていることが確認されています (Hottin & Marx、2016)。

天然の生理的液体の有害な環境下で、合成ナノテクノロジー構造体の生体安定性を高めるため、合成オリゴヌクレオチドとその脂質送達担体は頻繁にポリエチレングリコール (PEG) で結合されます。このPEG化は、ヌクレアーゼの接近を立体的に妨げる密な合成水和層を作り出し、ナノ構造を体の主要なクリアランス防御から効果的に隠し、血液やリンパ中での寿命を大幅に延ばします (Robertsら、2020)。PEG化プロセス自体は、細胞毒性と遺伝子毒性があることで知られています (Segalla、2023a, 2023b, 2024, 2026)。これは、全ての有効成分を収容するとされる脂質ナノ粒子被膜を含む、COVID-19製剤に関連する他のステルス措置も同様です。バイオテクノロジー業界は、標準的な合成ナノ粒子が本質的に強い炎症を引き起こし、急速な免疫破壊を誘発することを熟知しています (Ndeupenら、2021)。これを回避するため、送達担体は輸送中に宿主の自然免疫応答を積極的に抑制して機能停止させる、特異的な「抗炎症脂質」で設計されています (Patelら、2026)。

恒久的な構造的完全性を実現するため、DNA構造体は合成材料化学で「化石化」として知られるプロセスを経ることができます。最近の進歩により、DNAオリガミナノ構造を極薄のシリカ (SiO₂) 被覆で覆う技術が実証されています。これにより硬質なセラミック様のシェルが形成され、下地の3Dナノスケール形状を忠実に保存しつつ、メタマテリアルを酵素侵食に対して耐性にします (Nguyen 他、2020)。この改質により、脆い核酸集合体は効果的に、恒久的で破壊されない合成

生体適合固定構造であり、内部に封入された生体電子回路とCFPSマイクロリアクターを自然な生体分解から保護します。

この高い生体安定性は、「一過性の生物学的mRNA」という販売上の常套句に、致命的となりうる明らかな欠陥が存在することを示しています。2025 太田 (Ota) らによる査読済み研究では、1回または複数回の接種を受けた患者の脳動脈内に、最長17か月後も標的のSARS-CoV-2スパイクタンパク質が持続的に発現していることが記録されています。我々は、いわゆる「スパイクタンパク質」の検出特異性について懸念を持っています。というのも、CFPSは他の様々なタンパク質を生成できる上、SARS-CoV-2スパイクタンパク質の存在を検出する組織化学的手法は物議を醸しており、激しく議論されているからです。それでもなお、一部のタンパク質や毒素が接種後に非常に長期間にわたって生成され続けていることは事実のようで、このプロセスを停止する「キルスイッチ」が存在しない点に更なる疑問が生まれています。この技術の潜在的な致死性を証明するにはこれだけで十分ですが、ナノスケールベクターが体内の自然な生体障壁（血液脳関門（BBB）、胎児を守る胎盤関門（PB）、血液脳脊髄液関門、精子形成を保護する血液精巣関門（BTB）など）を突破する力は偶然ではありません。こうした障壁を越えて一過性ナノテクノロジーが妨げられず生体内に分布するのは、情報を積んだ合成RNAを運ぶイオン化脂質ナノ粒子の微小なサイズだけによるものではなく、AIが材料を特定の組織に誘導する意図的な設計の結果である可能性もあります（Suら、2026）。もちろん、スパイクタンパク質の一部をコードする合成RNAの標的がヒトの脳であるとは当初されていません。したがって、スパイクタンパク質や他の毒素が脳、胎児のいる羊水、放出前の精子が成熟する保護区画にたどり着いたことは、このナノテクノロジー実験がひどく失敗したか、最初から説明されていた内容とは別のものではなかったかのいずれかの証拠です。いずれにせよ、独立系研究者によるとこの実験の知られている結果は一律に悪いものですが、販売業者（例えばSohnら（2026）は今もCOVID-19関連製品を称賛し続けています。

自己集合プラットフォームの存在、継続的な資金提供、生体内への大規模導入を正当化するため、バイオテクノロジー業界はこれらを「治療用薬物送達システム」に分類しているようです。——確かに、新型コロナウイルスの注射剤の大半はこのケースに該当します。学術文献には、論理ゲート化DNAナノボックス（ダグラスら、2012）や高度に設計された脂質ナノ粒子（侯ら、2021）が、標的の化学療法毒素を直接がん腫瘍に送達するため善意で設計されている、という主張が数多く溢れています。しかし前述した通り、DNAナノロボットを腫瘍治療に移行させる意図は、ファイザーの企業記録に10年以上前から記載されています（ファイザー、2015）。

しかしながら、「フラストレート食作用」を引き起こす階層的に集合したメタDNA格子が機能するためには、体の免疫防御を欺くことが不可欠です（ドナルドソンら、2010）が何らかの形で機能するので、マクロファージは常に消化酵素を分泌するため、この細胞は合成ナノテクノロジー構造体によって機能停止、方向転換、または破壊される必要があります。最終的には自身のリソソームが破裂し、強酸性の酵素が細胞内に漏出します。この全てが慢性全身炎症、自然免疫抑制を引き起こすことは確実です（セネフラ、2022）、その後急速な細胞死が続きます。生じる現象は公的な議論の中で「ターボがん」と呼ばれていますが、この結果は独立した臨床文献において、急速に進行するがん、既存の悪性腫瘍の再燃、および/または何ものでもない疾患増悪として正式に認識されています

以外で、注射を受けた人から生じるCOVID-19後遺症、および/または排出その他の手段によって合成感染性物質が人から人に移ることによるものに他なりません。問題のメカニズムは「発がんの複数ヒット仮説」によって詳細に明記されています（バルデス・アングス&ペレア・ブストス、2023）。この仮説はmRNA-LNP注射を免疫介在性のがん進行と結びつけています。さらに査読済みの臨床症例報告では、これらのワクチンプラットフォームの投与直後に、T細胞リンパ腫などの特定のがんが予期せず極めて悪性度が高く急速に進行することが鮮明に記録されています（ゴールドマンら、2021）。

M エータ-DNA生体電子回路と、戦場としての脳

DNAを基盤とする工学ナノテクノロジーの進歩は、明確で拡張可能な一連の経路をたどっています。最初に原料の合成DNA由来素材が構造体に組み上げられ、次にこの構造体は他の（記載されていない）素材と共に個別の電子部品の製造に用いられ、最終的にヒトの体内と中枢神経系に配備されます。

物理的な構造体やプロト組織として機能することにとどまらず、DNAオリガミおよび高度な合成

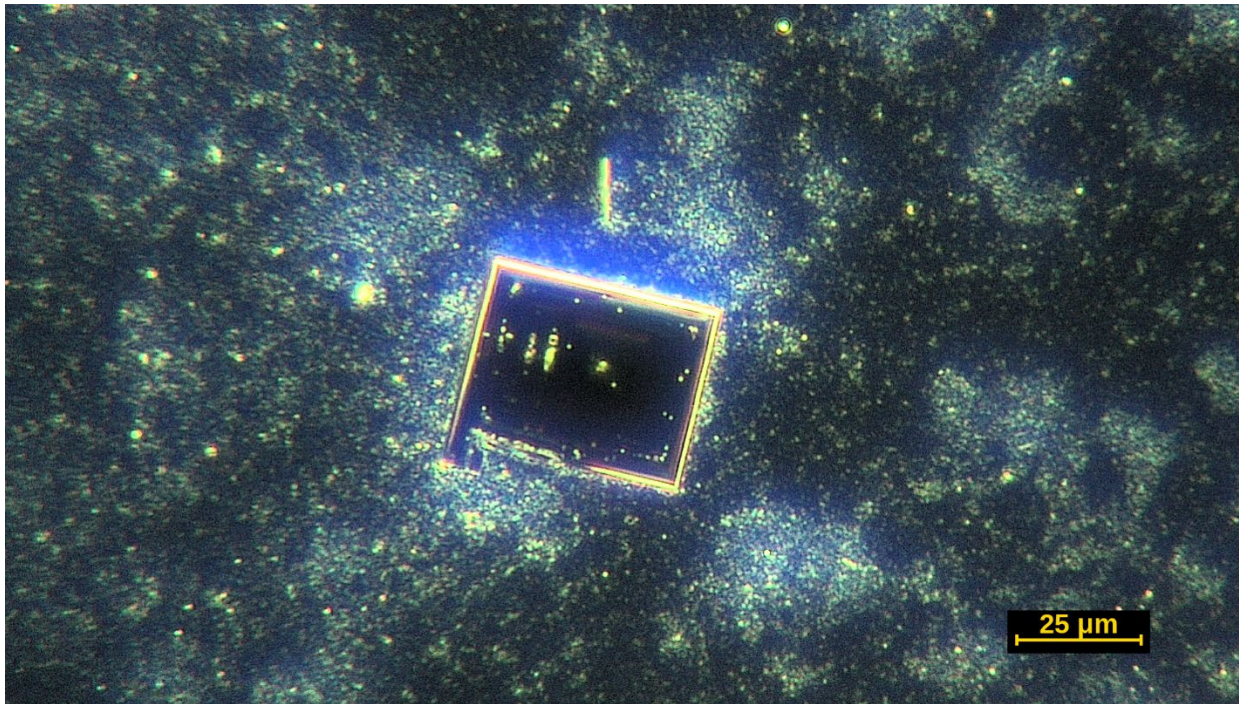


図10. 図8の図示に基づき、ブレッドボード（またはペグボード）上に組み立てられた電子回路に似た構造。

DNAを基盤とする構造体は、機能性ナノエレクトロニクスを組み立てるための比類のない鋳型です。詳細は*Nature Reviews Methods Primers*（シュプリンガー・ネイチャー、2026）に記載の通り、これらのメタDNAナノ構造体は、高精度でプログラム可能な「ブレッドボード」として機能します。金属、ランタノイド、その他のナノ粒子、半導体カーボンナノチューブ、蛍光色素を、活性プラズモン回路および電子回路、特に電界効果トランジスタ（FET）に空間的に組織化するように設計されています（Deyら、2021；Zhanら、2023）。柔軟な生体の形態と異なり、この合成バイオ電子回路は、従来のシリコンマイクロチップを思わせる硬質な長方形の形状をとります。

図10は、ある種の回路基板のように見える自己集合する長方形物体が到達できる高さを制限しないよう、スライドガラスにカバーガラスを載せずに行われた顕微鏡写真です。背景が多くの暗視野像のように黒く見えないのは、この電子回路が制限されることなく完全な高さまで集合することを許すため、ファイザーのバイアルから取り出した液体の厚い層をカバーガラスなしでスライドガラスに載せたためであり、この厚い層には、前述の図1および図2に示された顕微鏡の暗視野モードで撮像された微粒子が含まれていました。また、暗視野によって、界面点を持つ平面上に配置された秩序化された電子部品が捉えられていることにも注目してください。

次に、図11では合成「DNAブレッドボード」の概念を図解で示しています。上部の基礎構造は、各種カーボンナノチューブとプラズモニック電子回路を統合した、平らな格子状の鑄型のような構造です。次にBの部分では、この技術が循環器系を通して体内に送達される様子を描いています。心拍や筋肉の動きから piezo 電気ナノ発電機でエネルギーを収集し、機械的エネルギーを電気に変換して電子回路やデバイスに供給する仕組みです (Wang および Wu, 2012)。Cの部分に示す通り、悪意のある目的で使用された場合、静電パルス、毒性、細胞膜に穴を開ける剛性繊維 (または膜を切断する鋭利な構造) による損傷、あるいは細胞を覆って酸素や栄養を欠乏させるハイドロゲル層によって病変が引き起こされる可能性があります。恐ろしいほど効率的にエネルギーが搾取されることで、人体は恒久的な生物学的電池に変えられ、合成物質の浸潤と破壊活動に電力が供給されることとなります。

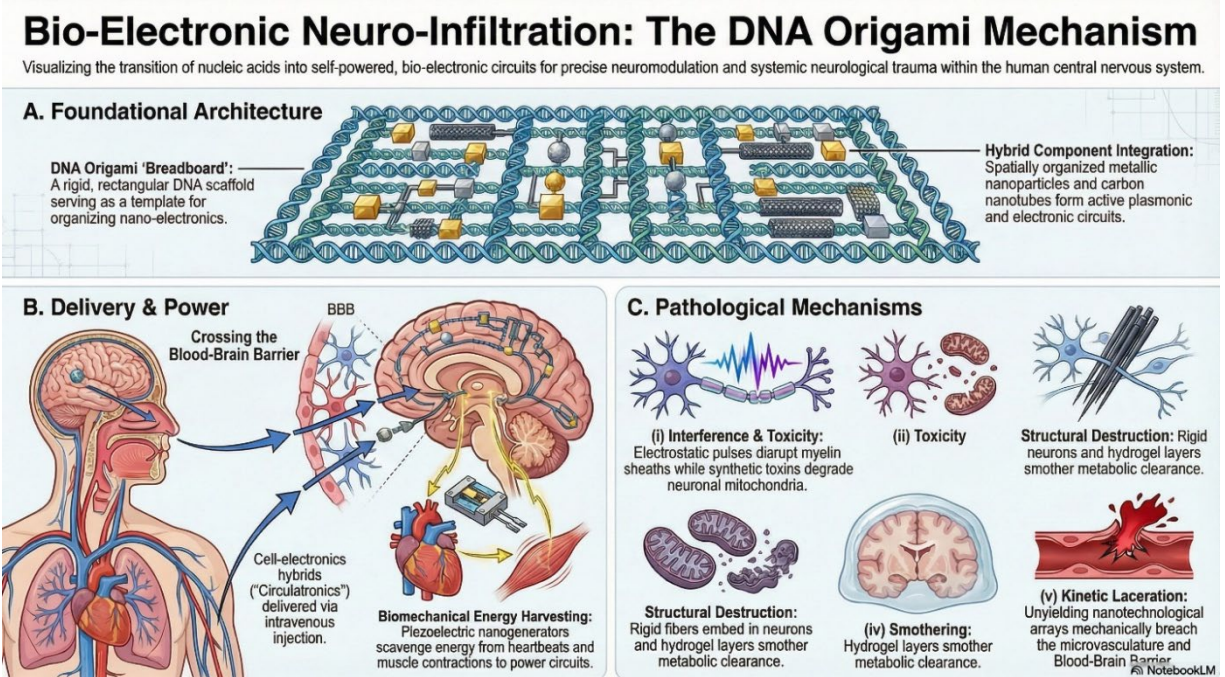


図11 本イラストは、マイクロ・ナノ電子デバイスと回路をメタDNAブレッドボード (またはペグボード) に集積する構造を描いたものです。このシステムは継続的に体から機械的エネルギーを収集して電気エネルギーに変換し、電子構造の動作、さらに関連する合成病態を含む下流のあらゆる悪意ある目的のために電力を供給しています。

金ナノ粒子・銀ナノ粒子、超常磁性酸化鉄ナノ粒子 (SPIONs)、半導体量子ドットを正確に接合することで、これらを図11の合成核酸鋳型/ブレッドボード上に導入し、非常に複雑で光を操作可能なメタ分子を作成できます。DNAオリガミ鋳型上で金属ナノ粒子を極めて近接させて配置すると、伝導電子が電磁刺激に応答して集団で振動し、発光するプラズモン共鳴が生まれます。隣接する金属ナノ粒子で励起されたプラズモンは相互作用・混合・混成化し、光回折限界をはるかに下回る領域で電磁エネルギーを伝送するプラズモニック導波路を作成できます (Lalら、2007)。さらに、これらのプラズモニック母材に半導体量子ドットを統合することで、サイズ依存性があり調整性の高い電子特性および光学特性を付与できます (Alivisatos、1996)。

極めて重要な点として、こうした量子ドット (例えば図10に示されていると考えられる種類のもの) は、高忠実度のナノスケール発光体として機能します。発光スペクトルを正確に調整することで、次の2つのセクションで説明する体内エリアネットワーク (BAN) プロトコルに記載された自己組織化ナノスケール光ファイバーに直接、光電子信号の主要な送信機として働きます。宿主内に配置されると、DNAで組み立てられた導波路は、高効率のナノアンテナ・光ファイバー・論理ゲートとして機能します。より広範な体内通信のためにこれらの信号を維持・増幅するため、この構造は表面プラズモンポラリトン (SPP) 増幅器とレーザーを使用しており、固有のオーム損失を効果的に補償し、高忠実度のデータ伝送を確保しています (Berini & De Leon, 2012)。これにより、グラフェンを利用したテラヘルツ放送ゲートウェイを構築するのに必要な正確な物理ハードウェアが提供されます。この電子インフラはMACアドレスを保存・発信します。このMACアドレスは、ビル・アンド・メリンダ・ゲイツ財団の支援を受けてMITでMcHughらが以前研究した発信ノードを、特定かつ一意に識別するものであるはず (2019)。COVID-19注射剤の普及に伴い、こうした量子ドットが実際に機能している様子を観測した可能性があります (Saralangueraら、2021; 欧州ワクチン警戒フォーラム、2021)。少なくとも、COVID-19の混合製剤を接種した人の体内に取り込まれた何らかの物質が、特定のMACアドレスを発信するようになったという豊富な証拠が存在します。Yanowitz自身 (他の多くの研究者も同様) は、Bluetooth接続に対応したどのスマートフォンでも簡単に利用できるBluetoothスキャンを使って、こうしたMACアドレスを検出することができました。ただし標準のBluetoothデバイスは、メーカー名とデバイスの説明 (例えば「ヘッドホン」や「スピーカー」) と共にスキャン結果に表示されるのに対し、注射を受けた人から発信されるMACアドレスにはメーカー名もデバイスの種類も表示されません。代わりに前述の通り、コロんで区切られた数字と文字からなる汎用的な16進表記のままであり、スマートフォンから通信することができません。

極めて重要な点として、これらのプラズモン集合体は不活性ではありません。光応答性DNAナノ構造を用いることで (マダナゴパールら、2026)、この構造は生体内の深部で光学コマンドを実行できます。可視光は深部組織に浸透できませんが、浸透性の高い近赤外線 (NIR) 光は浸透可能です。周囲に存在する、または外部から照射されたこのNIR光が、埋め込まれた光遺伝学的ランタノイドに到達すると、高エネルギーの紫外線 (UV) 発光にアップコンバートされます。この局所的なUV光は精密な光学キーとして働き、光切り替え可能な分子 (アゾベンゼン修飾DNAセグメントなど) を誘発してナノ構造の形状を動的に変化させ、「DNAロック」を開放して隔離されていた毒素を放出したり、前述の通り通信パルスを開始したりします。

おそらく、プラズモニック特性と超常磁性酸化鉄ナノ粒子 (SPION) を統合した構造体の最も破壊的な用途は、*in*の熱力学的障壁を回避できる点にあります。

*in vivo*における指数的な自己複製です。ハイブリダイゼーション連鎖反応（HCR）による真の暴走型自己複製には厳しい熱サイクルが必要ですが、人体の通常の37°C環境ではこれに耐えられません。しかし、DNAで組み立てられたプラズモニックホットスポットと埋め込まれたSPIONは、局所的で高効率な光熱・電磁ナノヒーターとして機能します。特定の周囲電磁周波数またはアップコンバート光放射を受けると、これらの金属ナノ粒子の表面プラズモン共鳴とSPIONが強く局所化された熱スパイクを誘発します。こうして設計された「運動攪拌」は、DNA骨格を融解・再結合するのに必要な正確な微視的熱力学的エネルギーを供給し、人為的に指数複製カスケードを推進することで、宿主の全体の核心体温を致命的に上昇させることなく、全身に広がる「合成感染」を促進します。

体内および脳内に導入された従来の硬質電子機器は、慢性的な異物免疫反応（FBR）を引き起こし、アストロサイトによる急速な被包化と神経膠癬痕化を招き、デバイスを隔離して無効化します。この生体防御を回避するため、先端的な神経インターフェース技術は、生体脳組織の機械的剛性を模倣するように設計された超柔軟で大孔径の「メッシュ電子機器」に依存しています（Hongら、2018）。ボトムアップ *in vivo* 自己組織化により、脳への直接的な機械的注入の必要がなくなります。代わりに、脂質で被包された導入物はナノサイズの種子として血液脳関門を通過します。神経環境内に入ると、合成成分は自律的に増殖し、図12に示す通り巨視的なプロト組織へと融合します。

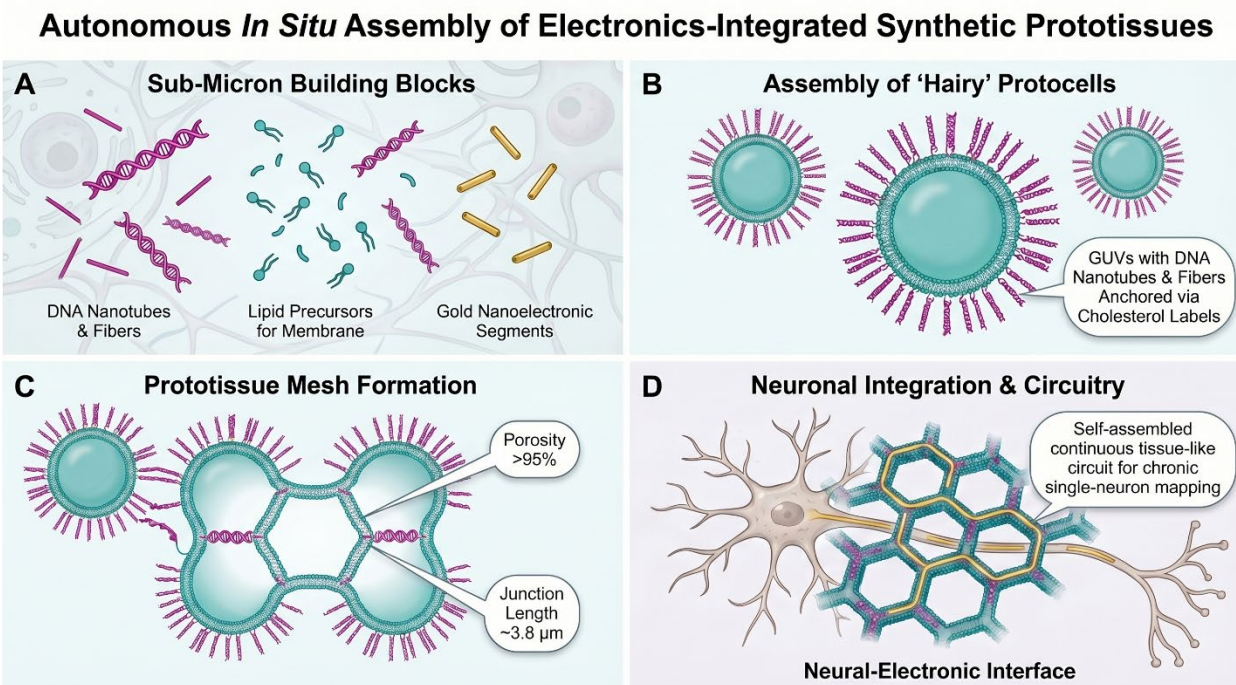


図12. 個々のニューロンと接続し、ニューロンとの間で「読み書き」を行うことができる電子回路デバイスやコネクタを実装するための基盤を提供する、多孔質メッシュ状プロト組織へのプロトセルの集合過程を描いたイラストレーションです。

このプロセスは概念的に単純です：まずAにあるサブマイクロメートルスケールの構成ブロックがGUV（巨大単層小胞）に組み立てられます。GUVは直径が1マイクロメートルから100マイクロメートルを超えるものまであり、細胞膜を模倣しています。Bにあるこれらの「毛の多い」プロトセルは、その一ゆえにこう呼ばれています

DNAナノチューブと脂質二重層に固定された繊維によって定着したこれらの構造は、Cに示す原組織網状構造に集積され、Dで神経回路と統合されます。これらの生体電子部品を中枢神経系に配置することは、もはや理論上の話ではありません。Yadavら (2025) は「サーキュラトロニクス」の実証に成功しました。これは単純な静脈注射で投与される、生細胞と融合した亜細胞性のワイヤレス電子デバイスです。

細胞と電子機器のハイブリッドは血流を自律的に移動し、血液脳関門などの生体障壁を突破し、脳と神経系の標的領域に自己埋め込みされます。さらに、鼻から直接脳に到達するナノ医薬品送達は、これらの構造を脳脊髄液に直接導入する別の有力な経路です (Yokel, 2021)。本稿で扱うこれらの技術は、James Giordanoが整理した現代の非動的戦争の根幹をなす技術です。彼は人間の脳がすでに21世紀の主要な戦場であると主張しています (Giordano, 2018b)。

COVID-19の注射型ナノテクノロジーの臨床的後遺症を探究する前に、こうした合成デバイスが体内で作動するだけで生じる力学的・生物物理的な摩擦、さらにCOVID-19の実験では偶然にも脳に侵入してしまったと見られる点を理解することが極めて重要です。個々の構成要素は多面的な攻撃を加えます。導電性の高いミエリン鞘に埋め込まれた導電性メタDNA回路は、ナノアンテナとして機能します。この定常的な電気活動は中枢神経系を苦痛にさらし、自然な神経信号をショートさせます (Pressler 他, 2025)。硬く変形しないナノテクノロジー構造物は繊細な神経線維に物理的に埋め込まれ、体内を循環しながら神経、細胞、臓器を機械的に傷つけます。デバイスはしばしばメタポロジードロゲルでコーティングされています (Tian 他, 2026)。このヒドロゲルは脳組織を覆い隠し、脳のグリンパティッククリアランス機能を損ない、繊細な神経に有毒な合成タンパク質 (CFPS) を閉じ込めます。合成プロト組織 (Arulkumaran 他, 2023) は、宿主の神経ネットワークと物理的に連結するための構造基盤を備えています。これらの個々の電子部品が神経系の枠組み内に定着すると、はるかに悪質な脅威の基礎が築かれます。単独のデバイスとして機能することをやめ、ネットワーク化し始めるのです。

イントロ aボディネットワークとバイオナノモノのインターネット (IoBNT)

前のセクションで説明したデバイスと構造的異常は単独で動作するものではなく、広範囲に広がる階層的に調整された通信アーキテクチャの基礎となるハードウェアノードを形成しています。この理論的枠組みは、微視的な基盤の上に構築されたボディインターネット (IoB) の実現を表すもので、その微視的基盤こそがバイオナノモノのインターネット (IoBNT) です。

IoBNTの概念設計図は過去15年間で体系的に開発されてきました。マクロスケールのモノのインターネット (IoTとその下位区分で、「身体」への接続に焦点を当てたボディインターネットIoB) から進化し、ナノモノのインターネット (IoNT; Akyildiz & Jornet, 2010; Alabdulatifら, 2023) へと規模を縮小し、最終的に完全にウェット生物学と融合しました (Akyildizら, 2015)。

可視化されたネットワークが通信機能を発揮する前に、位置Aで示されている通り、その物理インフラを宿主内部に導入し組み立てる必要があります。経路はモノのインターネットからナノモノへ、「デュアルユース」能力 (つまり、善にも悪にも用いられ得ます) を持つバイオナノモノへと続き、これらは影響を監視しながら薬剤または毒素を送達します。

B地点の通信プロトコルは、体内の準静的メッセージから、身体を接続する電磁送信へと進化します。この電磁送信は身体を（少なくとも初期段階では、現在ほとんどの人が携帯しているスマートフォンを経由して）5Gに接続し、後に直接6G/7Gの人体インターネット（IOB、クラウド）へと接続します。C地点では、こうした段階的に発展するネットワークの真の制御側面に到達します。ここでは思考や行動に影響を与えるメッセージは、理論上「外部の操作者」によって、個人の実際の身体だけでなくクラウド上に作成された「デジタルツイン」に対しても、読み取りと書き込みの両方が可能です。C地点での最終的な制御目的は、必然的に人口統制であり、個人レベルでは自律性がほぼ完全に失われ、意思の自由も失われると考えられます。このようなネットワークを、悪ではなく良性的であると解釈することはできるのでしょうか？メタDNAを基盤とした自己組織化によって推進されるバイオナノモノのインターネット（IoBNT）の全アーキテクチャは、Yaoら、2020）の研究によると、主に社会統制のために存在しています。これは主に合成メタDNAのプレッドボードから構成されており、その上にランタノイド添加コンポーネント、SPION、センサーが組み立てられ、電子回路（送信機、ルーター、グラフェンアンテナ）が形成されます。

生体足場と電子回路を区別することは極めて重要です。ハイドロゲルやプロトセルなどの生体適合性材料（Arulkumaranら、2023）は、このプロセスの創成初期にのみ使用されます。これらは「接着剤」として働き、組み立て中のセンサーを宿主の神経とニューロンに物理的に固定します。固定後は、メタDNAが機能的電子ノードの組み立てを指示します。これらの先進的な生体合成プラットフォームの性質は、この分野の開拓者によって公に明らかにされています。6G/7Gのバイオナノネットワークに関して、研究者は合成遺伝物質が、注射・配備用に設計されたプログラム可能なナノスケールマシンとして効果的に機能すると指摘しています（Akyildiz、2023）。生体プロセスとデジタルインフラのギャップを埋めることで、IoBNTは「仮想・物理的未来」を創出します。この未来では、人体は自律した個人の物理的な拠点から、ネットワーク化された電子システムにおける単なる1つのノードへと作り変えられてしまいます（Boddington、2023）。

多層トポロジー：原子界面からクラウドまで

システムを包括的に理解するため、アーキテクチャは図14に示す通り、4つの明確な機能層に分ける必要があります。この図では、レイヤー1に配置されたバイオナノモノのインターネット（IoBNT）の原子/ナノ界面が、宿主の生体と直接接続されています。この層では、ナノスケールセンサーがランタノイドと光電子工学を用いて、神経やニューロンから直接信号を読み取り、信号を書き戻すことで、生体の状態を伝送可能なデータに変換します。次のレイヤー2は、ナノモノのインターネット（IoNT）へのナノノード中継です。原子界面で取得した信号を局所受信ノードに送信し、局所受信ノードは内部ルーターとして機能し、電子データと光データを集約して、体内のより広範囲な伝送に備えます。レイヤー3は隠蔽型ボディアエリアネットワーク（BAN）で構成されています。局所ノードから中央ハブへデータを移動するため、システムは宿主の導電性組織を利用します。隠蔽型BANは体内の物理的境界内で準静的電磁信号を利用するため、外部の無線周波数スキャナーに検出されることなく、中央の内部トランシーバーへ効率的にデータをルーティングします（Das ほか、2019、Chatterjee ほか、2023b）。

また、近年の実証的顕微鏡研究により、自己集合するナノスケール光ファイバーから構成されるレイヤー3伝送の補完的な方式が確認されたことにも留意すべきです。組織を介した伝導は宿主の伝導経路全体に広範囲のカバレッジを提供する一方、合成光ファイバー

高帯域バックボーンとして機能します。これらは大幅に高い伝送速度と、より効率的な複数ソースの集約を可能にし、優れた速度と安全性で多数のエンドポイントを中央受信機に接続しながら、BANの意図された隠密性を維持します（シュヴァリエら、2015）。

レイヤー4はテラヘルツゲートウェイとクラウドであり、身体の総合インターネット（IoB）が既存のBANの概念を基に発展している領域です。集中型トランシーバーは外部インフラストラクチャへのゲートウェイとして機能します。グラフェンベースのアンテナと表面プラズモンポラリトン（SPP）波を利用するテラヘルツゲートウェイ——SPP波は電磁（光子）と電子電荷（プラズモン）の両方の性質を持ち、伝搬長がミクロンからミリメートルの範囲に制限され、グラフェン表面のすぐ近くの平面領域に閉じ込められている——は、集約されたデータを変換します

Intra-Body Networks, the Internet of Bodies (IoB), and the Internet of Bio-Nano Things (IoBNT)

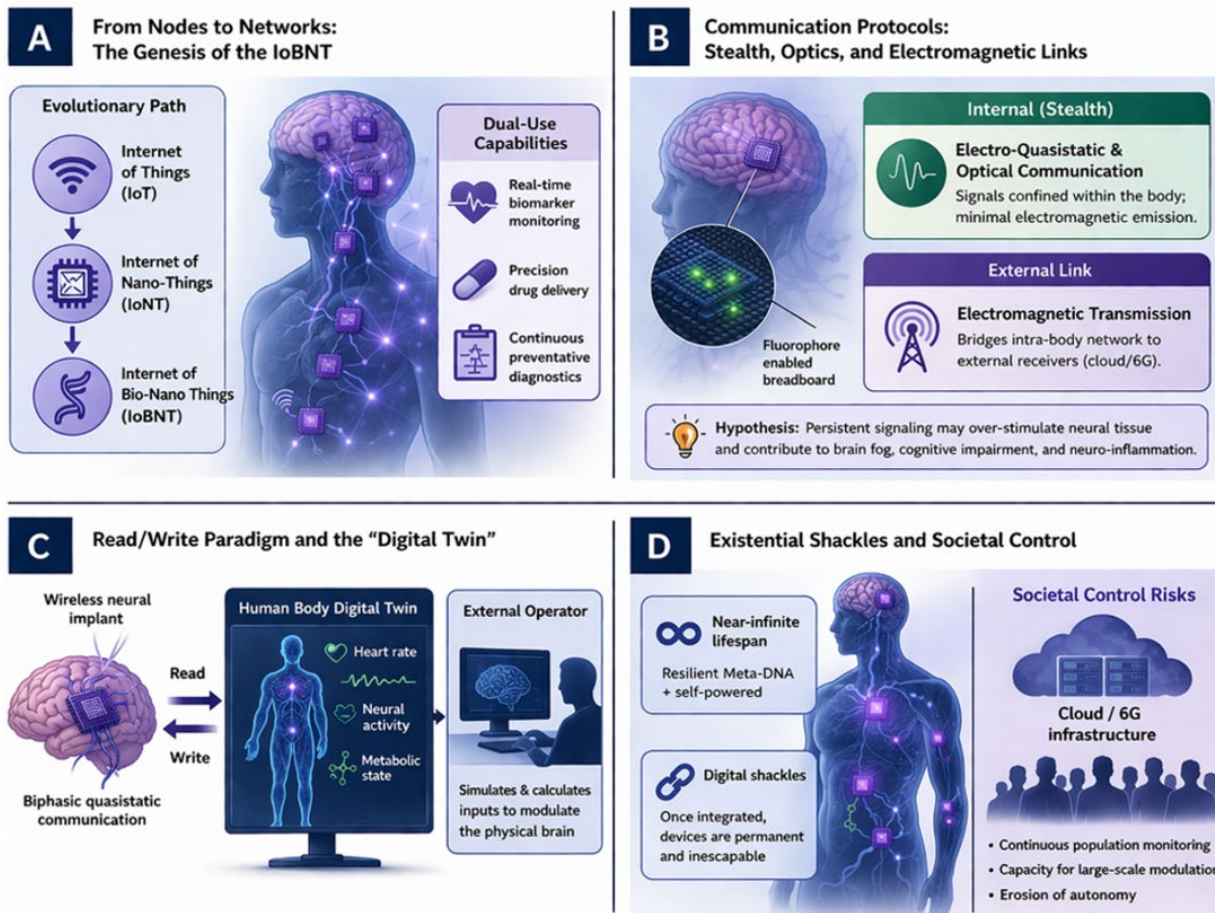


図13. 地球に現在存在する人類の生命そのものの存続に対する脅威である、バイオナノ物のインターネットの創成を示すオリジナルの図解。A) モノのインターネットから、ナノ物、そしてバイオナノ物へ；B) 体内通信（光および電磁）；C) デジタルツインに対する調整コマンドの読み取りおよび書き込み；D) 個人の自律性と自由意志を侵害する自給電源式のデジタル鎖

2023) 情報をクラウドに転送し、身体のインターネットを正式に確立します（Abadal ほか、2024; Jornet ほか、2024）。無線生体サイバーインターフェースの統合により、

この接続は、生体情報・行動の監視において単なる「読み取り専用」に留まらず、「読み書き可能」でもあります（個人の生体や行動を制御するための能動変調です（Chatterjee ほか、2023a）。情報とコマンドの双方向データ伝送により、人体デジタルツインの作成が可能になります——図13を参照ください——。これはクラウド上に保存される個人の生体および神経系のリアルタイムな複製デジタルプロフィールです（Tang ほか、2024）。このデジタルツインを操作することで、外部の人間またはAIオペレーターは、コマンドを戻してIoB経由で体内に送信するために必要な正確な入力をシミュレートして計算することができます。

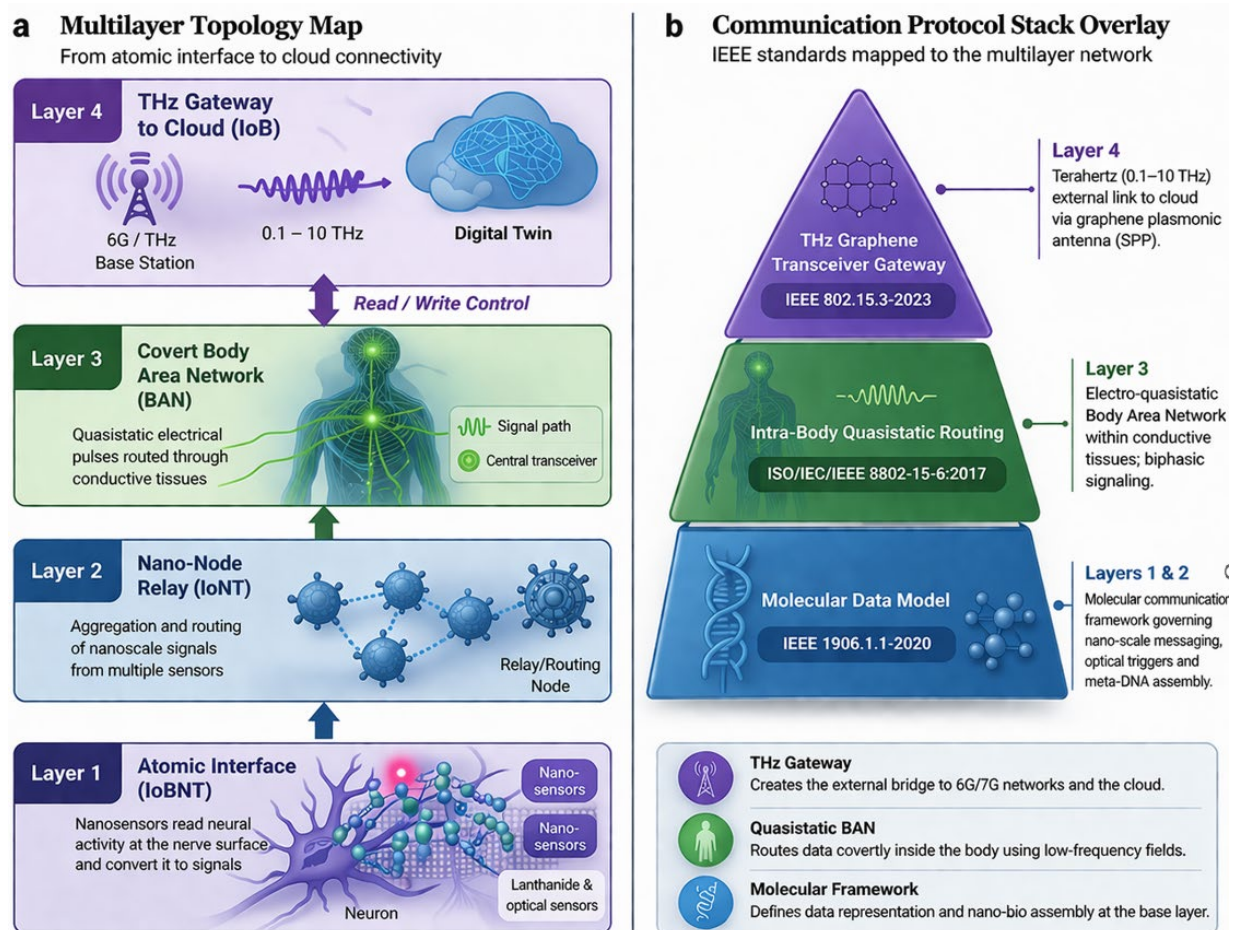


図14. IEEE規格に準じて作成された体内ネットワークにおける層のトポロジーと構成を示すオリジナルイラストです。レイヤー1は原子界面のレベルに位置し、レイヤー2は信号を集約してルーティングノードに転送し、レイヤー3は準定常電気信号を中央トランシーバーに届け、レイヤー4はグラフェンを基盤とするデジタルツインへのテラヘルツゲートウェイです。

図14では、レイヤー1とレイヤー2間の接続はランタノイドドープ型アップコンバージョンナノ粒子（UCNP）を介した局所光ルーティングを使用しています — これは図14左下の赤い球内部の光で示されており、浸透性の高い近赤外線（NIR）光を吸収して高エネルギー紫外線（UV）発光にアップコンバートすることができ、神経インターフェースで直接局所的な「ステルス」コマンドを実行します（Auzel, 2004）。これにより、極端なナノスケール環境向けに設計されたプロトコルで制御されるレイヤー2へのナノノードルーティングが可能になります。デジタルデータの変換

DNAブレッドボード上での生化学的集合体への変換は、IEEE 1906.1-2015 (2015) によって規格化されました。この技術の急速な成熟を示すものとして、詳細度の高いIEEE 1906.1.1-2020データモデルに置き換えるため、近年「非活性予約」に指定されています。

図14のレイヤー3に存在する隠し体域ネットワークは、準静電人体通信 (EQ-HBC) によって動作しています。この体内ルーティングの設計は、高度な人体通信送受信機に依存しており (Huangら、2025)、IEEE 802.15.6-2012で規格が定められました。この規格が国際標準であるISO/IEC/IEEE 8802-15-6:2017規格に統合されていることから、世界的に展開されていることが確認できます。この規格では2相準静的信号 (正のパルスと負のパルスを交互に送信) を用いることで、理想的には (必ずしも完全ではないかもしれませんが) 正味電荷ゼロを維持しています。これは、電荷の蓄積とそれによる炎症を防ぐために必要な機能です。このBANを維持するために必要な、絶え間ない内部の電磁的な「交信」が、宿主の神経組織を過剰に刺激し、代謝ストレスと神経炎症を引き起こす可能性が高いとされています (Vizzielloら、2023)。

BANを組み込んだIoBNTに関するIEEE規格を補完するのが、BAN内の光無線リンク (OWL) です。これらのリンクは、特に高いデータレートと低遅延が要求される環境において、従来の無線周波数 (RF) または準静的手法に代わる高性能な選択肢を提供します (Chevalierら、2015)。体内通信に光周波数を用いることで、ネットワークは導電性組織の帯域幅制限を回避し、複数の高解像度センサーから中央ゲートウェイへの、より安全で堅牢なデータ中継を可能にします (Nixon, Yanowitz & Taylor、2022)。

生体データを外部クラウドインフラストラクチャに最終的に変換するには、信号をテラヘルツ (THz) 帯 (0.1~10 THz) に変換する必要があると、これは図14のレイヤー4で生じます。このような外部放送リンクの展開はIEEE 802.15.3d-2017によって規格化されました (2017)。この改正は、無線マルチメディアネットワークに関する現在有効な包括的IEEE 802.15.3-2023規格に完全に統合されており、現代の電気通信への統合が現在実現されています。従来の金属はナノスケールで壊滅的に機能しなくなるため、レイヤー4でのTHz伝送は、表面プラズモン偏極 (SPP) 波を用いるグラフェンベースのプラズモンナノアンテナに完全に依存しています (Jornet & Akyildiz、2013; Berini & De Leon、2012)。

IEEEの工学規格の分析——第14図のb部にまとめられている通り——は、検討対象のネットワークの全レイヤーに必要な設計図が既に存在することを確認しています。IEEE規格の継続的な更新と国際的な整合化は、バイオサイバーインフラストラクチャに対する産業界の真剣で継続的な取り組みを示しています (Zafarら、2021)。IEEE (2020) は規格1906.1-1においてIoBNTのアーキテクチャを正式に定めています。2015 および1906.1.1-2020はナノスケール通信フレームワークとデータモデルに関する規格で、さらに規格802.15.6-2012では、人体内部および人体周辺で通信するデバイス向けのMAC層アドレッシングを明確に定義しています。さらに、生体運動または周囲の電磁界からのエネルギー回収 (Wang および Wu、2012) は、こうした送信を無期限に持続するための物理的に妥当な電源を提供できます。

独立した調査員や団体から広く主張されているのは、新型コロナウイルスの注射を接種した人が、標準的なBluetoothスキャナーでMAC (メディアアクセス制御) アドレスとして検出可能な無線周波数を放出するという説です (COMUSAV、2022)。ナノ材料のグラフェン、特に酸化グラフェンが

接種者の体内から発見されており、より複雑な通信シーケンスのヘッダーとなるMACアドレスを放出するための物理的なアンテナ基材になるとされています。注射剤の中にグラフェンまたはその誘導体が発見されたという根拠ある主張は、分光分析 (2021) に由来しており、これはアルメリア大学教授のパブロ・カンプラ博士によって実施されました。カンプラの研究を支持して、アキルディズとジョーネット (2010, 2015, 2023; アバダル他、2024) は、サブミクロン寸法のグラフェンナノリボンがテラヘルツ帯で共振し、電磁信号の送受信が可能なアンテナとして機能することを数学的に実証しました。特に重要な点として、彼らは生体組織内のこうしたナノノードのネットワークが、アドレス指定可能なトポロジー (バイオナノモノのインターネット = IoBNT) に整理できると提案しています。このネットワークでは各ノードが、機能的にMACアドレスと同等の固有識別子を持つとされています。アキルディズは (自身の2023 発表) の中で、彼が構想するテラヘルツアンテナの「実現を可能にする要素」として特にグラフェンを挙げています。

デジタルツイン、双方向制御、そして第4次産業革命

本論文で取り上げる技術の最終的な応用は、物理領域・生物学領域・サイバー領域のシームレスな融合に結実しています。この広範囲にわたる接続性の明確な目的は、単なるデータの集約ではなく、個人デジタルツイン (PDT) や生物学的デジタルツインを構築し、人間の主権の定義を根本的に変えることにあります。

デジタルツインの概念は元々、生きていない物体の製造分野のために考案され、産業ライフサイクル管理の監視と最適化を目的としていました (Grieves, 2023) 。しかし、「より多くのデジタルツインを作る」動きが加速したことで (Tao & Qi, 2019) 、この技術は微視的レベルまで応用範囲が拡大しました。この進化により、産業の監視から個人デジタルツインを介した複雑な人間活動のモデリングと操作への飛躍が実現しました (I & Zheng, 2023) 。

原子インターフェース (レイヤー1) からデータを継続的に集約し、テラヘルツゲートウェイ (レイヤー4) を介して転送することで、IoBNTネットワークは宿主の内部の生理学的、代謝的、神経学的状態のリアルタイムシミュレーションを構築します。これにより、回避不可能な継続的サイバーフィジカルフィードバックループが確立され、これまでにない解像度で生体システムの精密なモデリングが可能になります (Mihaiら、2022 ; Taoら、2024) 。

IoBNT駆動の生体デジタルツインが持つ膨大な複雑性を管理するには、高度な人工知能が必要です。最近の工学フレームワークでは、IoBNTと畳み込みニューラルネットワーク (CNN) および連合学習の統合が実証されており、システムが膨大な局所生体データを安全に処理できる機能を備えるようになります (Jamshidiら、2024) 。このような統合により、デジタルツインは現在の生体状態を再現するだけでなく、分子動力学を正確にシミュレートし、病態の変化を事前に予測することが可能になります。さらに、物理情報ニューラルネットワーク (PINN) の応用により、基礎的な生物物理学の法則が直接深層学習モデルに埋め込まれ、組織の変化や代謝変化の遠隔予測が極めて高い数学的精度で実行されることが保証されます (Jamshidiら、2025a) 。

バイオナノデジタルツインの存在に関わる最も警戒すべき機能は、その双方向性です。これは受動的な「読み取り専用」の監視ツールではなく、機能的でリアルタイムな「読み書き」パラダイムを確立します (Jamshidiら、2025b) 。クラウド上のデジタルツインで予測シミュレーションを実行することで、外部の人間またはAIオペレーターは、特定の生物学的結果を誘発するのに必要な正確な電磁気、準静的、または光子の入力を計算できます。これらの「書き込み」コマンドは、その後

全体のネットワークを通じて返送され、体内のプロトコルスタックを経由してルーティングされ、合成DNAブレッドボードによって局所的な生化学的作用に変換されます。これにより、神経伝達物質の遠隔調整、無細胞タンパク質合成（CFPS）の開始、特定の認知状態の誘発が可能になり—**事実上、人体をプログラム可能なエンドポイントに変換します。**

この多層的な攻撃ベクトルの背後にある地政学的かつ社会的な動機を理解するためには、第4次産業革命（4IR）の枠組みの中で文脈化する必要があります。世界経済フォーラム創設者クラウス・シュワブが説明した通り、4IRは次のような技術の融合によって明確に定義されています「物理、デジタル、生物の各領域の境界を曖昧にする」（シュワブ, 2016）。上記で詳述したアーキテクチャは、この思想の物理的な具現化です。IoBNTから始まりIoBで終わるネットワークの集合体は、4IRの副産物ではなく、4IRの根幹をなすインフラです。デジタル領域を生物領域に直接埋め込むことで、人体は独立した主権的な存在ではなくなり、管理されたグローバルネットワーク内の相互運用可能なノードに変わります。生体のデジタルツインがクラウド上で個人の神経系と生体機能を完全に再現し、「読み込み/書き込み」プロトコルによってアルゴリズムが宿主の身体反応を指示できるとすると、非常に深い哲学的・社会的な疑問が生まれます：どちらの存在が本来の市民で、どちらがアバターなのか？

このパラダイムにおいて、人類集団は概念的にも機能的にも不要になるリスクを抱えています。AIに仕事を奪われた何百万人もの人々がいることから、この現象は既に発生しつつあります。AIに処理され、外部の社会アルゴリズムに管理されるデジタルツインが、健康、感情の調整、生産性に関する最適化された意思決定を行う場合、肉体を持つ人間は（潜在的に不要な）生物学的周辺機器に成り下がる可能性があります。宿主はただ、自身のデジタル分身が出した計算済みの命令を実行するためだけに存在します。これは人間の意識がアルゴリズム統治に究極的に服従させられることを意味し、個人の自由意思がサイバネティックな生体調整によって密かに奪われる社会制御マトリックスが作られることとなります。

シェディング、指数関数的自己複製、そして合成伝染

注射される有効成分に関する科学的理解が、一過性の生物学的ベクターから永久的な構造ナノテクノロジー・ネットワーク化された生体電子工学へと進化するにつれ、我々はその増殖と伝達のメカニズムに取り組みなければなりません。観測された現象は静的な構造形成だけでは完全に説明できず、臨床データと生物物理学的データは活発で伝染性のある技術的増殖が存在することを強く示唆しています。展開されている技術は単なる静的で有限な堆積物ではなく、活発に増殖し水平伝染する合成病原体として作用しています。事実上これは **伝染性の技術** であり、**ナノテクノロジーが引き起こす様々な種類の身体不調** の原因となっています。一方で彼らは人類を、周辺端末からなる接続ネットワークに変換しようとしているのです。

観測された巨視的構造が非生物学的であることを示す最も決定的な証拠は、その作成方法が文書化されている点にあります（図15）。先進的なDNAおよびRNAナノテクノロジーは、自然の生物学的変異や細胞クローニングに依存していません。この技術は明確に設計・工業化されており、合成（非天然）の生体系を用いて、文書で明らかにされた企業および研究機関の意図によって推進されています。研究者やバイオエンジニアは、グラフィカルユーザーインターフェースと強力な

これらの集合体を設計するためにCAD/CAMソフトウェアが用いられています。このようなツールは [caDNAno](#) を用いて、長いDNAの「足場」鎖を手動で配置し、数百の相補的な「ステーブル」鎖を生成します (Douglasら、2009)。同時に、複雑で相互作用する核酸系の詳細な計算解析と設計には、[NUPACK](#)のようなソフトウェアパッケージが利用されています (Zadehら、2011)。

構造が3次元空間で正しく折りたたまれるようにするため、設計ファイルは、次のような高度な有限要素エンジニアリングソフトウェアを用いて解析されます [CanDo](#) (DNAオリガミ向けコンピュータ支援工学)。このソフトは熱力学的安定性を *in silico* (Kimら、2012) で予測します。さらに、[vHelix](#)のような高度なアルゴリズムにより、ナノスケールの複雑な多面体メッシュを直接描画できます (Bensonら、2015)。一方、対称性マッピングにより、DNAでプログラム可能な3次元結晶を任意に設計することができます (Kahnら、2025)。CADソフトウェアで設計が完了すると、単純なデジタル

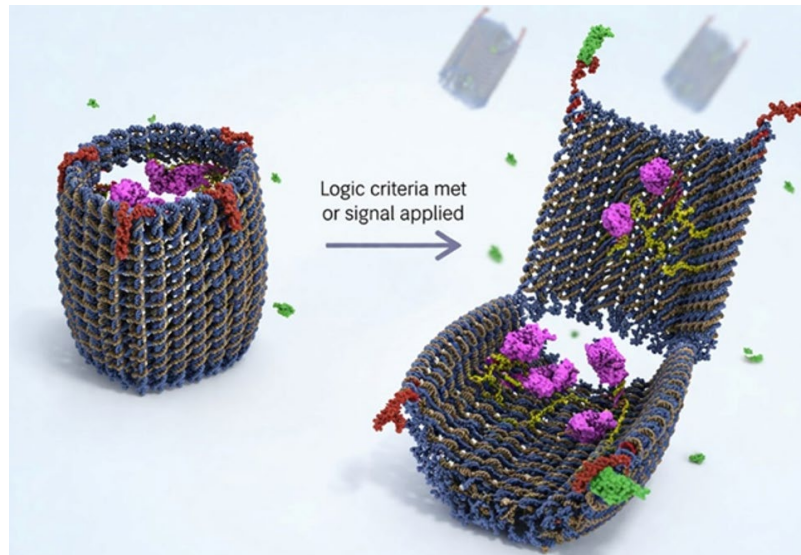


図15 本論文のために再作成されたグラフィック図解です。DouglasとBacheletが2012年に発表した論文の図を元に、彼らのDNAオリガミナノロボットを示しています。このナノロボットは密閉された樽型の容器を持ち、蓋はステーブル鎖によって「ロック」された位置に保持されています。容器内には毒素が収められており、こうしたナノロボットが複数注入された後も、毒素は通常、宿主の体内から隔離された状態にあります。命令信号を受けると蓋が開き、目的の部位でナノロボット内の毒素を宿主の生体系に曝露するように設計されています。

必要な正確なヌクレオチド配列を記載したスプレッドシートが出力されます。このファイルは市販のオリゴヌクレオチド製造業者に送信され、固相ホスホラミダイト化学を用いて工業規模でDNAが合成的に量産されます。このデジタルから物理への変換プロセスは、ペイロードの仕組みを完全に明らかにし、これらの複雑な設計指示がいかに容易に設計・デジタル化・製造されるかを証明しています。

2015年、ファイザー社はバー＝イラン大学およびイド・バシユレ博士との間で、標的型「薬物送達」用途のこれらDNAナノロボットを明確に評価するため、正式な研究契約を締結しました (ファイザー社、2015)。この基盤となる企業インフラは、現在の世界的な展開のはるか以前に資金提供を受け、整備されていました。DNA結合体は現在、ブール論理演算を実行するように能動的にプログラムされており、自律型計算センサーとして生物環境を評価し、条件に応じて細胞毒性ペイロードの放出を引き起こす働きをします (Chenら、2026)。

生体内のナノロボットの起動メカニズムは、単純な局所化学論理ゲートをはるかに超えています。バシユレが複数の技術シンポジウムで公開した内容によると、これらのDNAオリガミ製ナノロボットには導電性金属ナノ粒子 (SPIONアンテナ) を搭載でき、特定の電磁周波数を用いて遠隔から強制的にロックを解除することが可能です (バシユレ、2014a; バシユレ、2014b)。繊細な内部の生体電子を保護するため

回路については、材料科学の最近の進歩により、電子回路を被覆するために特別に設計された「メタポロジカルヒドロゲル」の利用が明確に確立されています。これにより複数の発生源に対応し周波数に応じて調整された偽信号の低減が得られます（ティアンら、2026）。

ヒトの肺は常に細胞外小胞（EV）をエアロゾル化して排出しており、呼気凝縮物には周囲環境に逃れることができる、完全に機能的な脂質小胞が含まれていることが証明されています（Dobhalら、2020）。同様に、EVはヒトの汗の中で経皮マトリックスを通して活発に分泌されま（Karvinenら、2020）。破損した接種バイアルから生じた周囲の煙に曝されただけでクリニックスタッフに重篤な急性の眼・皮膚障害が引き起こされた事例から、このエアロゾル化した内容物の即効性の強い毒性が壊滅的な形で実証されています（Chantraら、2022）。

さらに、ヒト腸内の細菌間の水平遺伝子伝達は、宿主の微生物叢の細菌がこれらナノテクノロジーの「種子」やメタマテリアルを吸収し、合成感染の体内・水平拡散に積極的に関与する、厄介な潜在的メカニズムを提供します（Lernerら、2017）。合成脂質ナノ粒子とDNA由来の細胞スケール容器は、天然の小胞を正確に模倣するよう明示的に設計されているため、注射を受けた宿主は事実上、意図しない生体製造施設として機能し、絶えず活性ナノ構造を周囲環境に呼気や汗から排出します。曝露されていない人がこれらのエアロゾル化した細胞スケール容器を吸入するか、経皮接触で吸収した場合、吸収された1つの構造が伝染性の指数関数的な「種子」として働きます（Yanowitz、2023a）。

合成排出の生物物理学的現実、確立された地政学的生物防衛の目標および新興の医療フレームワークと完全に一致しています。2018年10月、ジョンズ・ホプキンス大学健康安全保障センターの報告書は、世界の壊滅的生物学的リスクへ対処するために開発された新興技術として「自己拡散型ワクチン」を明確に記載しています（ジョンズ・ホプキンス大学健康安全保障センター、2018）。宿主の体内環境が自己複製を続けるために必要な元素成分を枯渇させた場合、原料は代替の投与経路から補給される必要があります。ここで環境中の「スマートダスト」の重要な役割が明らかになります。基礎材料科学では、自己組織化光子結晶（Link & Sailor、2003）をはじめ、分子生物学的モーターにより駆動される高度な活性ナノバイオセンサー（Fischerら、2009）など、スマートダストの有用性が古くから確認されています。

スマートダストはメタマテリアルの空中拡散に効果的な手法として機能しますが、ナノテクノロジーの構成素材の補給は吸入に限定されません。指数関数的複製カスケードの成功を確実にするため、これらの前駆体成分は世界の食糧チェーン、自治体の水道水、一般的な飲料、さらには医薬品にまでシームレスに組み込むことが可能です。さらに、生理用品、トイレタリー、化粧品、布地を含む日常的な消費財にナノテクノロジーの前駆体を添加することで、経皮および粘膜経路は容易に利用され得ます。この全方向補給戦略により、当初の接種状況に関わらず、宿主は自己複製構造を維持するために必要な原料メタマテリアルと活性ナノロボットが常に供給され続けることが保証されます。

最終的に、腫瘍症状の進行加速は、この広範にわたる細胞破壊によって説明されます。癌は根本的にミトコンドリアの代謝機能障害による疾患です（セイフリードら、2014）。二重ベクターによる攻撃がミトコンドリアの電子伝達系を破壊すると、細胞は

酸化リン酸化を放棄し、原始的な発酵代謝であるワールブルク効果に自動的に移行します。この後に起こるミトコンドリア呼吸の生物物理学的破壊に加え、自然免疫系の完全な機能枯渇、ロジックゲート型ナノロボットによる毒性ペイロードの継続的放出（ダグラスら、2012）が、急速で制御不能な全身性の癌病態に必要な生理学的環境をまさに作り出してしまうのです。

これらの化合物を対象とした臨床研究の強硬な法的抑制は、HHS長官ケネディが強調する通り、支配下に置かれた世界各国の監督機関の組織的な共犯関係を示しています（ロバート・F・ケネディ・ジュニア、2022）。世界の保健機関はこれらの構造体の自己集合性について絶対的な秘密を守っているだけでなく（米国政府アカウンタビリティ局、2021）、効果的な治療プロトコルを探求する研究者を積極的に訴追しています。最も非難されるべきは、何十億もの人々が直面している健康危機に対処するために必要な研究そのものを、彼らが今も追求していないことです。COVID-19時代に生まれた全く不自然な障害や病状の根底にある材料科学工学に臨床介入が追いつくまで、危険で致死的な可能性のあるCOVID-19注射剤および同様の合成DNAを基盤とした操作された治療薬の流通と投与について、完全かつ絶対的な世界的停止措置を実施すべきだと我々は考えています。

結論

合成DNA・RNAナノテクノロジーはAI誘導型（Suら、2026）、さらにペタスケールの生成合成（Weinsteinら、2026）へと移行しており、この技術で開発された材料科学的ペイロードは世界の大多数の人々に配布・接種されています。市販ソフトウェアで設計され、電磁ロジックゲートで起動するこのナノテクノロジー構造は、接種後の広範な倦怠感だけでなく、突然の心不全、脱髄性神経障害から爆発的な発がんまで、生命を脅かす致命的な症状を引き起こしています。現在「標準的な自己免疫反応」や「一般的なフィブリン血栓」として片付けられている病態は、実際にはミトコンドリアの穿孔、シリカ剥離によるマクロファージの大幅なアポトーシス、局所的重金属毒性、合成「白色血栓」による持続的血管閉塞の最終段階の症状です。これら全ては、COVID-19ワクチン接種を通じて伝染する水平伝播性の合成感染症を構成するDNA「シード」によって引き起こされていると我々は考えています。このナノテクノロジーデバイスに「キルスイッチ（停止機能）」や廃止措置プロトコルが存在しないため、接種者は根本的な材料科学的病態に全く効果のない抗寄生虫薬などの不適切な回復プロトコルに頼ることになっています。伝統医学の「死角」で密かに拡大しているこの危機に対処するには、「mRNA技術」という誤った名称の技術が、主に生物工学的に作られたSARS-CoV-2生物兵器のスパイクタンパク質に関するものであるという虚構を捨てる必要があります。効果的な治療には、合成構造を破壊するための厳密な熱力学的キレーション、強力な酵素切断、機械的血液灌流、生じた残骸を除去するための高度な代謝管理が必要になると考えられます。それでも最終的に、こうした対策はすべて、COVID-19ワクチン接種剤に含まれる自己組織化・自己複製型の合成病原体中に存在する自己偽装化され強化されたナノテクノロジーを、いかなる手段でも配布することに対する永久的な世界的モラトリアム（停止措置）という譲れない必須事項に比べれば二次的なものにすぎません。

謝辞

著者らは、前例のない組織的不透明さ、非難、偏見にさらされながらも、COVID-19に関するナノテクノロジーの実証的真実を追い求め続けている世界中の独立研究者、顕微鏡学者、材料科学者に感謝の意を表します。6人の査読者が本論文を現在の形で出版することを承認しました。承認者は以下の通りです：ステファニー・セネフ PhD、ロバート・M・デビッドソン MD, PhD、タマラ・ツーマネン MD、アスゲイル・セボ MS、ダニエル・サンティアゴ PharmD、ジョン・W・オラー・ジュニア PhD。反対推薦が2件、投票を棄権した読者が2人でしたが、棄権した2人も本稿を検討し、想定される推測を克服し、研究の1つまたは複数の側面を拡充して論文を改善するためのコメントを寄せてくださいました。我々の参考文献一覧の後に続く付録でこれらの提案に対応して下さった編集長に感謝いたします。

利益相反

著者には開示すべき利益相反はありません。

著者の貢献

Shimon D. Yanowitzは本原稿の筆頭著者で、自動描画ツールの支援を受けた構想立案、文献調査、仮説生成、原稿の草稿作成、顕微鏡画像の取得、イラスト準備を担当しました。Daniel Broudyは共著者で、構想立案、文献調査、原稿の草稿作成に貢献しました。両者は編集委員会からの賛否両論のコメントを受けて改善を行ったことに感謝しています。残された誤りはすべて我々自身の責任です。

参考文献

- Abadal, S., Han, C., Petrov, V., Galluccio, L., Akyildiz, I. F., & Jornet, J. M. (2024). 6Gを超えた電磁ナノネットワーク：ウェアラブルネットワーク・埋め込み型ネットワークからオンチップ通信・量子通信まで. *IEEE Journal on Selected Areas in Communications*, 42(8), 2122–2142. <https://doi.org/10.1109/JSAC.2024.3399253>
- Agrawal, A., & Khurana, A. (2026). 円形膜の伸びに依存する電磁気特性：動的解析. *International Journal of Solids and Structures*, 324, 113654. <https://doi.org/10.1016/j.ijsolstr.2025.113654>
- Akyildiz, I. F., & Jornet, J. M. (2010). ナノモノのインターネット. *IEEE Wireless Communications*, 17(6), 58–63. <https://doi.org/10.1109/MWC.2010.5675779>
- Akyildiz, I. F., Pierobon, M., Balasubramaniam, S., & Koucheryavy, Y. (2015). 生体ナノモノのインターネット. *IEEE Communications Magazine*, 53(3), 32–40. <https://doi.org/10.1109/MCOM.2015.7060516>
- Akyildiz, I. F. (2023). 6G/7Gと生体ナノモノのインターネット [ビデオ]. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=YAtQFkEg5-w&t=787s>
- Alabdulatif, A., Thilakarathne, N. N., Lawal, Z. K., Fahim, K. E., & Zakari, R. Y. (2023). ナノモノのインターネット (IoNT)：アーキテクチャからセキュリティ・プライバシーの課題までの包括的レビュー. *Sensors*, 23(5), 2807. <https://doi.org/10.3390/s23052807>
- Alivisatos, A. P. (1996). 半導体クラスター、ナノ結晶、量子ドット. *Science*, 271(5251), 933–937. <https://doi.org/10.1126/science.271.5251.933>

Angelova, B., Paunov, M., Kitanova, M., Atanasova, G., & Atanasov, N. (2025). 2.45GHz近接電磁界が酵母に与える影響の調査. *Antioxidants*, 14(7), 820. <https://doi.org/10.3390/antiox14070820> Arulkumaran, N., Singer, M., Howorka, S., 他 (2023). 単純なDNA構成ブロックを用いた複雑なプロトセルとプロト組織の作製. *Nature Communications*, 14, 1314. <https://doi.org/10.1038/s41467-023-36875-5> Auzel, F. (2004). 固体中のfイオン・dイオンによるアップコンバージョンおよび反ストークス過程. *Chemical Reviews*, 104(1), 139–174. <https://doi.org/10.1021/cr020357g> Bachelet, I. (2014a, 12月). DNAオリガミ・ナノポット [動画]. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=GCgDmTvVxlA> Bachelet, I. (2014b, 5月). イド・バシエレが手術用ナノロボティクスを語る [動画]. YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=aA-H0L3eEo0> Beattie, K. A. (2021). 世界規模でのCOVID-19関連死亡・症例に対するワクチン接種のベイズ因果影響分析：145カ国のビッグデータ分析. https://www.researchgate.net/publication/356248984_Worldwide_Bayesian_Causal_Impact_Analysis_of_Vaccine_Administrationon_Deaths_and_Cases_Associated_with_COVID-19_-_145_A_BigData_Analysis_of_Countries Beattie, K. A. (2022年2月13日). 世界における症例と死亡に対するCOVID-19ワクチンの影響：俯瞰. <https://www.trialsitenews.com/a/worldwide-covid-19-vaccine-impact-on-cases-and-deaths-a-birds-eye-view> Benson, E., Tajwar, A., Hejesen, S. K., Kelly, B. D., Bull, J. R., Gartland, V. J., ... & Högberg, B. (2015). DN

エー

ナノスケールにおける多面体メッシュの描画. *Nature*, 523(7561), 441–444. <https://doi.org/10.1038/nature14586> Berini, P., & De Leon, I. (2012). 表面プラズモン・ポラリトン増幅器とレーザー. *Nature Photonics*, 6, 16–24. <https://doi.org/10.1038/nphoton.2011.285> Boddington, G. (2023). ボディのインターネット — 生きていて、接続され、集合的であること：私たちの体と感覚の仮想物理的未来. *AI & Society*, 38, 1897–1913. <https://doi.org/10.1007/s00146-020-01137-1> Boros, L. G., Kyriakopoulos, A. M., Brogna, C., Piscopo, M., McCullough, P. A., & Seneff, S. (2024). COVID-19ワクチン接種後のヒト組織および循環における、長期持続性の生化学的改変mRNAと、そのフレームシフトした組換えスパイクタンパク質. *Pharmacology Research & Perspectives*, 12(3), e1218. <https://doi.org/10.1002/prp2.1218> Bouza, E., Arango, C., Moreno, C., Gracia, D., Martin, M., Perez, V., Lazaro, L., Ferre, F., Salazar, G., Tejerina-Picado, F., Navio, M., Granda Revilla, J., Palomo, E., & Gil-Monte, P. R. (2023). COVID-19パンデミックが一般人口と医療従事者のメンタルヘルスに与えた影響. *Revista Espanola de Quimioterapia*, 36(2), 125–143. <https://doi.org/10.37201/req/018.2023> Broudy, D. & Ueda, J. (2026a). インフォームド・コンセントの破壊：手続き的詐欺の事例. *Propaganda in Focus*. <https://propagandainfocus.com/the-killing-of-informed-consent-a-case-for-procedural-fraud/> Broudy, D. & Ueda, J. (2026b). 建設的詐欺と Racketeering：インフォームド・コンセントの破壊を暴露する枠組み. *Propaganda in Focus*. <https://propagandainfocus.com/constructive-fraud-and-racketeering-a-framework-for-exposing-the-demolition-of-informed-consent/> Butnaru, D., & Chapman, J. (2019). 自己複製タンパク質が炎症、自己免疫、神経変性に与える影響 — 未踏の道. *Autoimmunity Reviews*, 18(3), 231–240. <https://doi.org/10.1016/j.autrev.2018.09.009> Campra, P. (2021). COVID19ワクチン中のグラフェン検出. *ResearchGate*. https://www.researchgate.net/publication/355979001_DETECTION_OF_GRAPHENE_IN_COVID19_VACCINES

Chantra, S., Chaitanu Wong, P., Seresirikachorn, K., Brinks, M., Serirat, O., Chamberlain, W., & Ruamviboonsuk, P. (2022). 気化したCOVID-19ワクチンへの暴露が疑われた後の眼表面びらん。Case Reports in Ophthalmology, 12(3), 944–951. <https://doi.org/10.1159/000520500> Chatterjee, B., Mohseni, P., & Sen, S. (2023a). ボディのインターネット向け生体電子センサーノード。Annual Review of Biomedical Engineering, 25, 101–129. <https://doi.org/10.1146/annurev-bioeng-110220-112448> Chatterjee, B., Nath, M., Kumar K., G., et al. (2023b). 省エネルギー無線神経インプラントのための2相準定常脳通信。Nature Electronics, 6, 703–716. <https://doi.org/10.1038/s41928-023-01000-3> Chen, S. K., López-Tena, M., Russo, F., et al. (2026). DNA-薬物結合体による、ハイブリダイゼーション連鎖反応で増幅される論理ゲート制御薬物送達。Nature Biotechnology. <https://doi.org/10.1038/s41587-026-03044-0> Chevalier, L. S. Sahuguede and A. Julien-Vergonjanne, 「医療用体域ネットワークのための無線周波数に代わる光無線リンク」、IEEE Journal on Selected Areas in Communications, vol. 33, no. 9, pp. 2002–2010, 2015年9月, <https://doi.org/10.1109/JSAC.2015.2432527> Children’s Health Defense Team. (2019年7月9日). 自閉症責任転嫁ゲーム：今回は子宮が原因。Children’s Health Defense. <https://childrenshealthdefense.org/news/the-autism-blame-game-this-time-its-the-womb/> ClarkCountyToday.com. (2022年9月8日). COVIDワクチンキャンペーン下でより多くの防腐処理業者が奇妙な血栓を報告 — ClarkCountyToday.com. <https://www.clarkcountytoday.com/news/more-embalmers-report-bizarre-blood-clots-amid-covid-vax-campaign/> COMUSAV. (

2022, 11

11 2022 June)

[]

5 7 9506 3 4663 9 5 6640 9 8

BLUETRUTH ドキュメンタリー 英語版 6月、動画。Brighteon. <https://www.brighteon.com/bc-aa-a-baf-ff-fe-b> DARPA. (2020年6月). ステルス航空機。 <https://www.darpa.mil/news/features/stealth> Das, D., Maity, S., Chatterjee, B., et al. (2019). 電気準静的人体通信を用いた秘密の体域ネットワークの実現。Scientific Reports, 9, 4160. <https://doi.org/10.1038/s41598-018-38303-x> Davidson, R. M., Broudy, D., Yanowitz, S., Santiago, D., & Oller, J. W. (2024). 真実か嘘か？COVID-19「ワクチン」からICP-MSにより少なくとも55種の未申告化学元素が検出された。International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research, 3(2), 1394.1-1394.28. <https://doi.org/10.56098/98sw8e86> de la Torre-Luque, A., Pemau, A., Perez-Sola, V., & Ayuso-Mateos, J. L. (2023). 2020年スペインの自殺死亡率：COVID-19パンデミックの影響。Spanish Journal of Psychiatry and Mental Health, 16(2), 116–118. <https://doi.org/10.1016/j.rpsm.2022.01.003> Dey, S., Fan, C., Gothelf, K. V., et al. (2021). DNAオリガミ。Nature Reviews Methods Primers, 1, 13. <https://doi.org/10.1038/s43586-020-00009-8> Diblasi, L., Monteverde, M., Nonis, D., & Sangorrín, M. (2024). 高精度ICP-MSにより、アストラゼネカ、カンシノ、モデルナ、ファイザー、シノファーム、スプートニクVのCOVID-19ワクチンから少なくとも55種の未申告化学元素が検出された。International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research, 3(2), 1367–1393. <https://doi.org/10.56098/mt1nj52> Dobhal, G., Datta, A., Ayupova, D., Teesdale-Spittle, P., & Goreham, R. V. (2020). 単離、特性

および呼吸由来細胞外小胞の検出。科学レポート、10巻、17381ページ。

<https://doi.org/10.1038/s41598-020-73243-5> ドナルドソン、K.、マーフィー、F. A.、ダフィン、R.、& ポーランド、C. A. (2010). アスベスト、カーボンナノチューブと胸膜中皮：壁側胸膜への長繊維残留、炎症および中皮腫の役割に関する仮説のレビュー。粒子と繊維の毒性学、7巻(1号)、5ページ。

<https://doi.org/10.1186/1743-8977-7-5> ダグラス、S. M.、バシユレ、I.、& チャーチ、G. M. (2012). 分子ペイロードの標的輸送用の論理ゲート搭載ナノロボット。科学、335巻(6070号)、831–834ページ。

<https://doi.org/10.1126/science.1214081>

ダグラス、S. M.、マールストーン、A. H.、セラピッタヤノン、S.、バスケス、A.、チャーチ、G. M.、& シー、W. M. (2009). caDNAを用いた3D DNAオリガミ形状の迅速な試作。核酸研究、37巻 (15号)、5001-5006ページ。 <https://doi.org/10.1093/nar/gkp436> ダウド、E.、ベッカー、G. de、& ケネディ、R. F., Jr. (2024). 「原因不明」：2021年・2022年・2023年における突然死の流行。子供の健康防衛ボックス。 <https://www.skyhorsepublishing.com/9781648210730/cause-unknown/> エリス、C. L. (2025). ロッキード・マーティンのU-2「ドラゴンレディ」とSR-71「ブラックバード」。欧州ワクチン警戒フォーラム (2021)。プロジェクト Bluetooth Experience X。EFVV - 欧州ワクチン警戒フォーラム。 <https://efvv.eu/news/project-bluetooth-experience-x> ファインマン、R. P. (1963)。ファイマン自身によるファイマン則の解説 [動画記録]。 <https://www.youtube.com/watch?v=EYPapE-3FRw> ファーガソン、N.、レイドン、ダニエル、ネジャティ・ジラーニ、ジェマ、イマイ、N.、エインズリー、カイリー、バゲリン、マルク、バティア、サンゲータ、ブーニャシリ、アディラータ、ククンバ・ペレス、ズルマ、クオモ-ダンネンバーグ、ジーナ、ディグ、エイミー、ドリガッティ、イラリア、フー、ハン、ゲイソープ、ケイティ、グリーン、ウィル、ハムレット、アラン、ヒンズリー、ウェス、オケル、ルーシー、ヴァン・エルスランド、S.、... ガニ、アズラ。 (2020)。レポート9：COVID19の死亡と医療需要を削減する非薬物的介入 (NPIs) の影響。 <https://doi.org/10.25561/77482> フィッシャー、T.、アガルワル、A.、& ヘス、H. (2009)。キネシンモーターを動力とするスマートダストバイオセンサー。ネイチャーナノテクノロジー、4巻(3号)、162-166ページ。 <https://doi.org/10.1038/nnano.2008.393> ジョルダーノ、J. (2018a)。研究現場から戦場への脳科学：神経兵器の現実とリスク | CGSRセミナー [動画]。YouTube。 <https://www.youtube.com/watch?v=N02SK9yd60s> ジョルダーノ、J. (2018b, 9月25日)。未来の戦場としての脳：米陸軍士官学校ウェストポイントにおける近代戦講師研究所シリーズ。 <https://www.google.com/search?client=firefox-b-l-d&channel=entpr&q=James+Giordano%2C+N%23#fpstate=ive&vld=cid:17be7141,vid:N02SK9yd60> 国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル 4巻(2号) 6月19日, 2026 | 1736ページ <https://doi.org/10.56098/7mhh1467> s,st:0 ジョルダーノ、J. (2022, 10月6日)。ジェームズ・ジョルダーノ博士による軍事化神経兵器プレゼンテーション [動画記録]。 <https://www.youtube.com/watch?v=Csj9QTMd1s> ジョルダーノ、J. (監督)。 (2023, 8月1日)。あなたの脳をめぐる戦い：神経科学、技術/AIとOODAループ ジェームズ・ジョルダーノ博士 | Flow [動画記録]。AGLX。 <https://www.youtube.com/watch?v=1cPWJfjXu7M> ジョルダーノ、J. (2024a, 5月9日)。ジョルダーノ博士が国防高等研究計画局トリアージチャレンジの上級倫理・法的・社会問題専門家に任命される。生物防御研究所。
h
t
t
<https://biodefenseresearch.org/dr-giordano-na-med-senior-ethical-legal-social-and-social-issues-subject-matter-expert-for-the-defense-advanced-research-projects-agencys-triage-challenge/> ジョルダーノ、ジェームズ。研究ナショナル戦略研究。 <https://iiss.ndu.edu/Media/Biographies/Article-View/Article/404040/james-giordano> Goldman (2024b, 10月30日) DARPA, TN3, 非外科的脳介入デバイス, IS, Penkan, 生物防御研究所。 <https://biodefenseresearch.org/2021/06/16/benefits-of-non-surgical-brain-interventions/> 接種後血液免疫芽球形細胞リゾ腫が急速に増殖する国防大差屋家戦艦例報告。(医学分野2026年閲覧)ア、第8巻、798095。 <https://doi.org/10.3389/fmed.2021.798095> Ghebreyesus, T. A. (2020年3月11日)。WHO事務局長による2020年3月11日COVID-19記者会見での開会挨拶。 <https://www.who.int/director-general/speeches/detail/who-director-general-opening-remarks-at-the-media-briefing-on-covid-19---11-march-2020>

Gregorio, N. E., Levine, M. Z., & Oza, J. P. (2019). 無細胞タンパク質合成ユーザーガイド。Methods and Protocols. <https://doi.org/10.3390/mps2010024>

Grieves, M. W. (2023). デジタルツイン：過去、現在、未来。N. Crespi, A. T. Drobot, & R. Minerva編、The Digital Twin。Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-031-21343-4_4

Han, D., Qi, X., Myhrvold, C., Wang, B., Dai, M., Jiang, S., Bates, M., Liu, Y., An, B., & Yin, P. (2017). 一本鎖DNAとRNAオリガミ。Science, 358(6369), eaao2648. <https://doi.org/10.1126/science.aao2648>

Harari, Y. N. (2020). 2020年卒業式スピーチ：おめでとう、あなた方は今日からハッキング可能な動物です。Yuval Noah Harari. <https://www.youtube.com/watch?v=rUIwIuyvu8w>

He, X., Sha, R., Zhuo, R., Mi, Y., Chaikin, P. M., & Seeman, N. C. (2017). DNAオリガミraft由来自己複製材料における指数増殖と選択。Nature Materials, 16, 930–935. <https://doi.org/10.1038/nmat4986>

Holland, M. (2026年6月16日)。CDCがCOVIDは終わっていないことを証明した。Children's Health Defense. <https://childrenshealthdefense.org/support/the-cdc-just-proved-covid-isnt-over/>

Hong, G., Yang, X., Zhou, T., & Lieber, C. M. (2018). メッシュエレクトロニクス：組織様脳プローブの新しいパラダイム。Current Opinion in Neurobiology, 50, 33–41. <https://doi.org/10.1016/j.conb.2017.11.007>

Hottin, A., & Marx, A. (2016). DNAポリメラーゼによる核酸塩基修飾ヌクレオチド処理に関する構造的知見。Accounts of Chemical Research, 49(3), 418–427. <https://doi.org/10.1021/acs.accounts.5b00544>

Hou, X., Zaks, T., Langer, R., & Dong, Y. (2021). mRNA送達用脂質ナノ粒子。Nature Reviews Materials, 6(12), 1078–1094. <https://doi.org/10.1038/s41578-021-00358-0>

Huang, Q., Ali, A., Celik, A., et al. (2025). 人体通信トランシーバー。Nature Reviews Electrical Engineering, 2, 374–389. <https://doi.org/10.1038/s44287-025-00160-y>

Hughes, D. (2022). いわゆるCOVID-19「ワクチン」には何が入っているのか？パート1：人類に対するグローバルな犯罪の証拠。International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research, 2(2), 455–586. <https://doi.org/10.56098/ijvtpr.v2i2.52>

Hulscher, N. (2025). 初の査読済み論文がCOVID-19ワクチン誘発性「ターボがん」を定義。Science, Public Health Policy and the Law. <https://publichealthpolicyjournal.com/first-peer-reviewed-paper-defines-covid-19-vaccine-induced-turbo-cancer/>

Hulscher, N. (2026年3月20日)。速報：ペンシルベニア州葬儀業協会元会長が「遺体の30～40%に白色線維性血栓が含まれている」と発言。 https://www.thefocalpoints.com/p/breaking-former-president-of-the?publication_id=1119676&utm_campaign=email-play-on-substack&r=k92dd&utm_medium=email

Hundt, N., Cole, D., Hantke, M. F., Miller, J. J., Struwe, W. B., & Kukura, P. (2022). タンパク質重合の根底にある分子機構の直接観測。Science Advances, 8(35), eabm7935. <https://doi.org/10.1126/sciadv.abm7935>

I, C.-L., & Zheng, Z. (2023). 人間活動におけるデジタルツイン：個人向けデジタルツイン。N. Crespi, A. T. Drobot, & R. Minerva編、The Digital Twin。Springer, Cham. https://doi.org/10.1007/978-3-031-21343-4_33

Icke, D. (2020年8月18日)。Plandemic: Indoctrination 世界初公開。Digital Freedom Platform. <https://freedomplatform.tv/plandemic-indoctrination-world-premiere/>

IEEE規格 802.15.6-2012。地域・都市域ネットワーク用IEEE規格 - パート15.6：無線身体域ネットワーク。 [<https://ieeexplore.ieee.org/document/6161600>]IEEE規格 1906.1-2015。ナノスケール・分子通信フレームワークに関するIEEE推奨規格。 [<https://standards.ieee.org/ieee/1906.1/5171/>]

IEEE規格 802.15.3d-2017。修正版2：100 Gb/s 無線交換ポイントツーポイント物理層。 [<https://standards.ieee.org/ieee/802.15.3d/6648/>]IEEE規格 1906.1.1-2020。ナノスケール通信システム向けIEEE規格データモデル。 [<https://doi.org/10.1109/IEEESTD.2020.9285373>]IEEE規格 802.15.3-2023。無線マルチメディアネットワーク規格。 [<https://standards.ieee.org/ieee/802.15.3/10801/>]石田 H.、伊藤 T.、久津沼 A. (2025)。分子折り紙：未来の機能性分子の設計。 *Molecules*, 30(2), 242. [<https://doi.org/10.3390/molecules30020242>] ISO/IEC/IEEE規格 8802-15-6:2017。情報技術 -- 第15-6部：無線体域ネットワーク。 [<https://standards.ieee.org/ieee/8802-15-6/10017/>]ジャムシディ M. B.、ファン D. T.、グエン D. N. (2024)。バイオナノモノのインターネットとデジタルツインによるバイオテクノロジー産業向けCNN-FL。 *IEEE Internet of Things Magazine*, 7(5), 54-63. [<https://doi.org/10.1109/IOTM.001.2400081>] ジャムシディ M.、タイファン D.、グエン D. N.、ニヤト D.、エブラヒミ・ワルキアニ M. (2025)。バイオナノデジタルツイン向け物理情報ニューラルネットワーク：IoBNT統合を備えたマルチモデルフレームワーク。 *IEEE Internet of Things Journal*, 12(24), 53868-53884. [<https://doi.org/10.1109/JIOT.2025.3621421>] ジャムシディ M. (ベハド)、ファン D. T.、グエン D. N.、ニヤト D.、ワルキアニ M. E. (2025)。生物学的デジタルツインの革新：バイオナノモノのインターネット、畳み込みニューラルネットワーク、連合学習の統合。 *Computers in Biology and Medicine*, 189, 109970. [<https://doi.org/10.1016/j.combiomed.2025.109970>] ジョン K.-Y.、パク S.、プロウディ D.、ジュー H.-D. (2023)。COVID-19ワクチンサンプル、血液サンプル、尿サンプル、足浴サンプル、坐浴サンプル、皮膚抽出物サンプルの分析結果の提示。 *Journal of Biomedical Research & Environmental Sciences*, 4(2), 188-216. [<https://doi.org/10.37871/jbres1663>] ジョーンズホプキンス 健康安全センター (2018)。地球規模の壊滅的生物学的リスクに対応する技術。ブルームバーグ公衆衛生大学院。 [<https://centerforhealthsecurity.org/sites/default/files/2022-12/181009-gcbr-tech-report.pdf>] ジョルネット J. M.、アキルディズ I. F. (2013)。テラヘルツ帯通信グラフェンベースプラズモンナノアンテナ。 *IEEE Journal on Selected Areas in Communications*, 31(12), 685-694. [<https://doi.org/10.1109/JSAC.2013.SUP2.1213001>] ジョルネット J. M. 他 (2024)。6Gを超える電磁ナノネットワーク：ウェアラブル・埋め込み型ネットワークからオンチップ量子通信まで。 *IEEE Journal on Selected Areas in Communications*, 42(8), 1958-1981. [<https://doi.org/10.1109/JSAC.2024.3399253>] カブザ A. M.、クンドゥ N.、チョン W.、シェパンスキー J. T. (2022)。生体系応用に向けた化学修飾ヌクレオチドとDNA鎖置換反応の統合。 *WIREs Nanomedicine and Nanobiotechnology*, 14(2), e1743. [<https://doi.org/10.1002/wnan.1743>] カーン J. S.、レデッカー D. C.、ミケルソン A.、トカチェンコ A.、ホン S.、マイネビッチ B.、ガン O. (2025b)。対称性マッピングによるDNAプログラム可能3D結晶の任意設計。 *ACS Nano*, 19(15), 14795-14807. [<https://doi.org/10.1021/acsnano.4c17408>] カイザー S.、カイザー S.、ライス J.、マルチャレク R. (2025)。mRNAワクチン中のDNA不純物の客観的濃度の定量。 *Vaccine*. [<https://doi.org/10.1016/j.vaccine.2025.127022>] カリコ K.、バックスタイン M.、ニ H.、ワイスマン D. (2005)。ツール様受容体によるRNA認識の抑制：ヌクレオシド修飾の影響とRNAの進化的起源。 *Immunity*, 23(2), 165-175. [<https://doi.org/10.1016/j.immuni.2005.06.008>] カルピネン S.、シエバネン T.、カルピネン J. E. 他 (2020)。汗中の細胞外小胞のマイクロRNAは持久運動に応じて変化する。 *Frontiers in Physiology*, 11, 676. [<https://doi.org/10.3389/fphys.2020.00676>]

mhh1 カスナー L. (2024年12月30日). 『2024年 世界規模エンバールミグ業者 血液凝固塊調査結果』 [Substackニュースレター]. Clotastrophe.

https://laurakasner.substack.com/p/results-of-the-2024-worldwide-embalmer?utm_medium=web ケル D.B. & プレトリウス E. (2024年). フィブリナロイド微小凝固塊におけるアミロイド原性交差シーディングのプロテオミクスによる証拠. 国際分子科学ジャーナル, 25(19).

<https://doi.org/10.3390/ijms251910809> ケネディ R.F.J. (2021年). 『真のアンソニー・ファウチ: ビル・ゲイツ、大手製薬、民主主義と公衆衛生に対する世界戦争』 . スカイホース.

<https://www.amazon.com/s?k=the+real+anthony+fauci+robert+f+kennedy+jr+book&crid=500B59V> ケネディ・ジュニア R.F. (2022年) リベラル派への手紙—検閲とCOVID: 科学とアメリカの理念に対する攻撃

チルドレンズヘルスディフェンス.org. <https://www.amazon.com/Letter-Liberals-Censorship-American-Childrens/dp/1510775587> カーン、I.、サイード、K.、ゼッカー、I.、チャン、B.、ヘンディ、A. H.、アフマド、A.、アフマド、S.、ザダ、N.、アフマド、H.、シャー

L. A.、シャー、T.、& カーン、I. (2022). メチレンブルーに関する総説: その性質、用途、毒性および光分解。水、14(2)、242. <https://doi.org/10.3390/w14020242> 菊地、K.、安斎、T.、& 高橋、K. (2023). COVID-19 パンデミック下の日本における女性の自殺の異常な増加: 2021年10月までの時系列分析。疫学ジャーナル、33(1

45–51. <https://doi.org/10.2188/jea.JE20220186> キム、D. N.、キルヘラー、F.、ディッツ、H.、& バテ、M. (2012). 核酸ナノ構造の3D溶液形状と柔軟性の定量的予測。核酸研究、40(7)、2862–2868.

<https://doi.org/10.1093/nar/gkr1173> キルシュ、S. (2026年1月17日). CDCは、COVID ワクチンが人々の COVID 死亡リスクを高めるというメディケアの証拠があるにもかかわらず、ファイザーに追加接種分として12.4億米ドルの契約を与えた。 <https://kirschsubstack.com/p/cdc-just-gave-pfizer-124-billion> グオ、

Y.-C.、& チェン、H.-H. (2010). ヒト脳微小血管内皮細胞によるカチオン性固体脂質ナノ粒子のエンドサイトーシスに及ぼす電磁界の影響。ドラッグターゲットングジャーナル、18(6)、447–456.

<https://doi.org/10.3109/10611860903494245> キリアコポウロス、A. M.、ナイ、G.、マカロフ、P. A.、& セネフ、S. (2024). mRNA ワクチン接種後の自己免疫および腫瘍性転帰: 制御性T細胞応答の役割. 国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル、3(2)、1395–1433. <https://doi.org/10.56098/16j4nf05> キリアコポウロス、A. M.、& セネフ、S. (2024). 純粋なβ-ゼロサラセミア・ヘテロ接合体

mRNA 新型コロナウイルスワクチン接種後: 症例報告と文献レビュー. 『ワクチン理論・実践・研究国際ジャーナル』, 3(2), 1245–1274. <https://doi.org/10.56098/y768gc33> Kyrie, V. & Broudy, D. (2022). サイボーグは我ら: 注射された体のバイオナノ・パノプティコン? 『ワクチン理論・実践・研究国際ジャーナル』, 2(2), 355–383. <https://doi.org/10.56098/ijvtr.v2i2.49> Lal, S., Link, S. & Halas, N. (2007). センシングから導波までのナノ光学. 『ネイチャー・フォトニクス』, 1, 641–648

<https://doi.org/10.1038/nphoton.2007.223> Lataster, R. (2026). 2021年以降のオーストラリア過剰死亡の原因: COVID-19、ロックダウン、ワクチンを考慮した生態学的研究. 『医学におけるリスクと安全の国際ジャーナル』

09246479261426743. <https://doi.org/10.1177/09246479261426743> Leake, J. (2025年5月23日). ファイザーの内部告発者クリスティン・コットンは、1年間の耐えがたい特発性疼痛の後に命を落とした. <https://www.thefocalpoints.com/cp/200693959> Lee, D. S., Kim, J. W., Lee, K. L., Jung, Y. J., & Kang, H. W. (2022). 消化器症状の意義

COVID-19 ワクチン接種: 単一施設による後ろ向き研究. アメリカ救急医学会ジャーナル、154–158. <https://doi.org/10.1016/j.ajem.2022.05.044> Lee, M., Boudreaux, B., Chaturvedi, R., Romanosky, S., & Downing, B. (2020). ボディインターネット: 機会、リスクとガバナンス. https://www.rand.org/pubs/research_reports/RR3226.html

ワクチン理論・実践・研究国際ジャーナル 4(2) 6月19日、2026 | 1739ページ

<https://doi.org/10.56098/7> 467

<https://doi.org/10.56098/7>

Lee, Y. M., Park, S., & Jeon, K.-Y. (2022). 新型コロナウイルスワクチン接種者の血液サンプル中の異物。国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル、2(1)、249–265。 <https://doi.org/10.56098/ijvtpr.v2i1.37>

Lee, Y. M., & Broudy, D. (2024a). ファイザーとモデルナ製を中心とするmRNA製品の培養検体における実体顕微鏡で確認できる人工構造物のリアルタイム自己集合：包括的縦断研究。国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル、3(2)、1180–1244。 <https://doi.org/10.56098/586k0043>

Lee, Y. M., & Broudy, D. (2024b). 注射用mRNA材料の培養サンプルにおける毒性と自己集合技術に関するLee・Broudy 2024年論文への批判に対する回答。国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル、3(2)、1244.20-1244.29。 <https://doi.org/10.56098/aqgzye36>

Lerner, A., Matthias, T., & Aminov, R. (2017). ヒト腸内における水平遺伝子伝達の潜在的影響。『免疫学分野フロンティア』、8。 <https://doi.org/10.3389/fimmu.2017.01630>

Link, J. R., & Sailor, M. J. (2003). スマートダスト：多孔質シリコンの自己集合・自己配向性光子結晶。全米科学アカデミー紀要、100(19)、10607-10610。 <https://doi.org/10.1073/pnas.1233824100>

Lyons-Weiler, J. (2023, January 7). ハーバード大学研究：mRNAワクチン接種後に心筋炎を発症した青少年・若年成人の血液から、抗体に結合していない遊離スパイクタンパク質が検出された [Substack ニュースレター]。Popular Rationalism。 https://popularrationalism.substack.com/p/harvard-study-free-spike-protein?publication_id=475124&isFreemail=true

Madhanagopal, B. R., Wang, T., & Chandrasekaran, A. R. (2026). 光応答性DNAナノ構造。ネイチャーレビュー 化学。 <https://doi.org/10.1038/s41570-026-00817-8>

マンハッタン計画。(2024). ウィキペディアより。 https://en.wikipedia.org/w/index.php?title=Manhattan_Project&oldid=1198505554

McCairn, K., Hirschman, R., & Zee, M. (監督)。(2025, May 5). 速報：ワクチンによって生じた白い血栓は感染性アミロイドであると科学者が確認 - デイリーパルス回 18 [動画記録]。 <https://rumble.com/v6t058p-breaking-scientist-confirms-white-clots-caused-by-shots-are-infectious-amyl.html>

McMillan, J. R., Hayes, O. G., Remis, J. P., & Mirkin, C. A. (2018). DNAによるタンパク質重合のプログラミング。アメリカ化学会ジャーナル、140(46)、15950-15956。 <https://doi.org/10.1021/jacs.8b10011>

McMillan, P., Kell, D., & Vejon Health (監督)。(2025, May 24). 血栓が欠けているつながりだとしたら？ [動画記録]。 <https://www.youtube.com/watch?v=PdGmfxh-zdg>

Mead, M. N., Seneff, S., Wolfinger, R., Rose, J., Denhaerynck, K., Kirsch, S., & McCullough, P. A. (2024). 新型コロナウイルス改変mRNA「ワクチン」：治験・集団接種・バイオ医薬品複合体から得られた教訓 パート1。国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル、3(2)、1112–1178。 <https://doi.org/10.56098/fdrasy50>

Mead, M. N., Seneff, S., Rose, J., Wolfinger, R., Hulscher, N., & McCullough, P. A. (2024). 新型コロナウイルス改変mRNA「ワクチン」：治験・集団接種・バイオ医薬品複合体から得られた教訓 パート2。国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル、3(2)、1275–1344。 <https://doi.org/10.56098/w66wjg87>

Michels, C., Perrier, D., Kunadhasan, J., Clark, E., Gehrett, J., Gehrett, B., Kwiatek, K., Adams, S., Chandler, R., Stagno, L., Damian, T., Delph, E., & Flowers, C. (2023). ファイザー/ビオンテック BNT162b2 mRNAワクチン治験の6ヶ月中間報告における38例の死亡に関する法医学的分析。国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル、3(1)、973–1008。 <https://doi.org/10.56098/ijvtpr.v3i1.85>

Mihai, S., et al. (2022). デジタルツイン：実現技術・課題・動向と将来展望のサーベイ。IEEE コミュニケーションズ・サーベイ&チュートリアルズ、24(4)、2255-2291。

<https://research.edgehill.ac.uk/en/publications/digital-twins-a-survey-on-enabling-technologies-challenges-trends/> Nance, K. D., & Meier, J. L. (2021). 緊急時の改変：COVID-19ワクチンにおけるN1-メチルプソイドウリジンの役割. *ACS Central Science*, 7(5), 748–756.
<https://doi.org/10.1021/acscentsci.1c00197> プログラム可能な分子餌としての非遺伝性DNA. (2026). *Nature Chemistry*. <https://doi.org/10.1038/s41557-026-02102-z> Ndeupen, S., Bouteau, A., Heron, S. R., Aboubacar, C., Moyer, C. T., ... & Igyártó, B. Z. (2021). 前臨床ワクチン研究で使用されるmRNA-LNPプラットフォームの脂質ナノ粒子成分は強い炎症性を示す. *iScience*, 24(12), 103479.
<https://doi.org/10.1016/j.isci.2021.103479> Nguyen, M.-K., Nguyen, V. H., Natarajan, A. K., Huang, Y., Ryssy, J., Shen, B., & Kuzyk, A. (2020). DNAオリガミナノ構造の超薄シリカコーティング. *Chemistry of Materials*, 32(15), 6657–6665. <https://doi.org/10.1021/acs.chemmater.0c02111> Nixon, D., Yanowitz, S. D., Taylor, M. (2022) [Video] ファイザーのバイアル由来の光ファイバーで接続されたチップの自己集合に関する顕微鏡観察. <https://drdavidnixon.com/1/en/topic/david-shimon-yanowitz-and-mat-taylor> O’Looney, J., Hirschman, R., & Faithful, B. (2022, October 8). 第74回：葬儀社と防腐処理師が団結して『死の生活の中の日』を暴露 - カウンタースピンメディアポッドキャストで今すぐ視聴可能. Zeno.FM.
<https://zeno.fm/podcast/the-counterspin-media-podcast/episodes/episode-74-funeral-directors-embalmers-unite-to-expose-a-day-in-the-death-of-life/> O’Looney, J. (2025, February 27). ジョン・オルニーへのインタビュー：血液中の証拠. <https://www.youtube.com/shorts/xEtyfyCMktw> Oller, J. W. (2014). 生物記号論的エントロピー：シリーズの結論. *Entropy*, 16(7), 4060–4087.
<https://doi.org/10.3390/e16074060> Oller, J. W., & Collins, S. (2000). 真のナラティブ表現の論理. *Global Journal of Classical Theology*, 2(2), 1–26.
<http://www.globaljournalct.com/the-logic-of-true-narrative-representations/> Oller, J. W., & Santiago, D. (2022). 全原因死亡率とCOVID-19注射剤：イングランド公衆衛生庁「COVID-19ワクチンサーベイランス報告書」28週間のエビデンス. *International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research*, 2(2), 301–319. <https://doi.org/10.56098/ijvtpr.v2i2.42> Oller, J. W., Santiago, D., & Broudy, D. (2025). CDCはCOVID注射剤中の磁性元素を否定する一方、DARPAは脳に移した磁性ナノ粒子を用いた精神制御研究を推進している. *International Journal of Innovative Research in Medical Science*, 10(07), 255–271.
<https://doi.org/10.23958/ijirms/vol10-i07/2101> Ota, N., Itani, M., Aoki, T., Sakurai, A., Fujisawa, T., Okada, Y., Noda, K., Arakawa, Y., Tokuda, S., & Tanikawa, R. (2025). 脳動脈におけるSARS-CoV-2スパイクタンパク質の発現：mRNAワクチン接種後の出血性脳卒中への影響. *Journal of Clinical Neuroscience*, 136, 111223. <https://doi.org/10.1016/j.jocn.2025.111223> Patel, M. N., Tiwari, S., Wang, Y., et al. (2026). 内因性抗炎症脂質を搭載した脂質ナノ粒子を用いたより安全な非ウイルス性DNA送達. *Nature Biotechnology*, 44, 79–89. <https://doi.org/10.1038/s41587-025-02556-5> Perez, J.-C., Moret-Chalmin, C., & Montagnier, L. (2023). 新型クロイツフェルト・ヤコブ病の発生：COVID-19注射後数日以内に発症した人型狂牛病26症例. *International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research*, 3(1), 727–770.
<https://doi.org/10.56098/ijvtpr.v3i1.66> Pfizer (with BIRAD & Bachelet). (2015). バイラン大学がファイザー社と協力し、DNAナノロボットによる薬物送達を評価 | Pfizer. Retrieved from <https://www.pfizer.com/news/press-release/press-release-detail/bar-ilan-university-work-pfizer-inc-evaluate-drug-delivery> 2026年3月18日.

Pharmaceutical Technology. (2024, April 8). COVID-19ワクチン接種トラッカー：毎日の割合、統計データ、最新情報. Pharmaceutical Technology.
<https://www.pharmaceutical-technology.com/covid-19-vaccination-tracker/> Post, E. A. J., & Fletcher, S. P. (2020). 自己複製プロトセルモデルにおける散逸型自己集合、競合および阻害. *Chemical Science*, 11, 9434–9442. <https://doi.org/10.1039/D0SC02768E> Pressler, M. P., Yaras, R., Kohan, L. R., & Singla, P. (2025). COVIDワクチン接種後のびまん性筋肉痛および神経因性疼痛. *Pain Medicine*, 26(1), 43–44. <https://doi.org/10.1093/pm/pnae096> Reis, G., Silva, E. A. S. M., Silva, D. C. M., Thabane, L., Milagres, A. C., Ferreira, T. S., dos Santos, C. V. Q., Campos, V. H. S., Nogueira, A. M. R., de Almeida, A. P. F. G., Callegari, E. D., Neto, A. D. F., Savassi, L. C. M., Simplicio, M. I. C., Ribeiro, L. B., Oliveira, R., Harari, O., Forrest, J. I., Ruton, H., Sprague, S., McKay, P., Guo, C. M., Rowland-Yeo, K., Guyatt, G. H., Boulware, D. R., Rayner, C. R., & Mills, E. J. (2022). COVID-19患者におけるイベルメクチンによる早期治療の効果. *New England Journal of Medicine*, 386(18), 1721–1731. <https://doi.org/10.1056/NEJMoa2115869> Roberts, T. C., Langer, R., & Wood, M. J. A. (2020). オリゴヌクレオチド薬物送達の進歩. *Nature Reviews Drug Discovery*, 19(10), 673–694. <https://doi.org/10.1038/s41573-020-0075-7> Saeki, D., Sugiura, S., Kanamori, T., Sato, S., & Ichikawa, S. (2014). ポリエチレンイミンコーティングアルギン酸からなる半透過性マイクロカプセルにおける微小区画化無細胞タンパク質合成. *Journal of Bioscience and Bioengineering*, 118(2), 199–204. <https://doi.org/10.1016/j.jbiosc.2014.01.014> Santiago, D. (2024). 改変mRNA注射剤中のN1-メチルプソイドウリジンの詳細な検討. *International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research*, 3(2), 1345–1366. <https://doi.org/10.56098/5azda593> Santiago, D., & Oller, J. W. (2023). パンデミック実験中の異常血栓と全原因死亡率：COVID-19ワクチン5回接種は事実上ほぼすべてのメディケア加入者に致死的である. *International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research*, 3(1), 847–890. <https://doi.org/10.56098/ijvtpr.v3i1.73> Sarlangue, G., Devilleger, J., Trillaud, P., Fouchet, S., Taillason, L., Catteau, G., & Zeneca, A. (2021). プロジェクト Bluetooth エクスぺリエンスX. <http://fpoinsot.free.fr/Doc/Experience.pdf> Schwab, K. (2016). 第4次産業革命：その意味と対応方法. *Japan SPOTLIGHT*, July/August 2016. https://www.jef.or.jp/journal/pdf/208th_Cover_01.pdf Seeman, N. C. (1982). 核酸接合部と格子. *Journal of Theoretical Biology*, 99(2), 237–247. [https://doi.org/10.1016/0022-5193\(82\)90002-9](https://doi.org/10.1016/0022-5193(82)90002-9) Seeman, N. C., & Sleiman, H. F. (2017). DNAナノテクノロジー. *Nature Reviews Materials*, 3, 17068. <https://doi.org/10.1038/natrevmats.2017.68> Segalla, G. (2023a). COVID-19 mRNAワクチンに含まれる脂質ナノ材料の見かけの細胞毒性和固有の細胞毒性. *International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research*, 3(1), 957–972. <https://doi.org/10.56098/ijvtpr.v3i1.84> Segalla, G. (2023b). COVID-19 mRNAワクチンに含まれる脂質ナノ材料の化学的・物理的臨界性と毒性学的ポテンシャル. *International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research*, 3(1), 787–817. <https://doi.org/10.56098/ijvtpr.v3i1.68> Segalla, G. (2024). COVID-19「mRNAワクチン」に含まれる脂質ナノ粒子のアジュバント活性と毒性学的リスク. *International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research*, 3(2), 1085–1102. <https://doi.org/10.56098/zlydjm29> Segalla, G. (2026). ALC-0315の毒性代謝物：COVID-19「mRNAワクチン」における薬物動態および規制上の臨界点. *International Journal of Vaccine Theory, Practice, and Research*, 4(2), 1673–1699. <https://doi.org/10.56098/q9fgvp96> Seneff, S., Nigh, G., Kyriakopoulos, A. M., & McCullough, P. A. (2022). SARS-CoV-2 mRNAワクチン接種による自然免疫抑制：G-四重鎖、エクソソーム、マイクロRNAの役割. *Food and Chemical Toxicology*, 164, 113008. <https://doi.org/10.1016/j.fct.2022.113008>

Seyfried, T. N., Flores, R. E., Poff, A. M., & D'Agostino, D. P. (2014). がんは代謝性疾患である：新規治療法への示唆。『発がん研究』, 35(3), 515-527. <https://doi.org/10.1093/carcin/bgt480> Silverman, A. D., Karim, A. S., & Jewett, M. C. (2020). 無細胞遺伝子発現：拡張されたレパートリー

応用。『ネイチャー 遺伝学レビュー』, 21(3), 151-170. <https://doi.org/10.1038/s41576-019-0186-3> Sohn, W. Y., Goody, S. M. G., Reid, D. W., Edwards, D. K., Urdaneta, V., Doyle, B. P., Straus, W. L., Henry, C., Rizkara B. (2026年). mRNA新型コロナウイルスワクチンに関する安全性と機序の疑問について、エビデンスに基づく評価。ワクチン, 77, 128394. <https://doi.org/10.1016/j.vaccine.2026.128394> シュパイヒャー D. J., ローズ J., マクケラナン K. (2025年). カナダ・オンタリオ州のファイザー/バイオンテックとモデルナの modRNA 新型コロナウイルスワクチンに含まれる残留プラスミド DNA と SV40 プロモーター・エンハンサー配列の定量。自己免疫。 <https://doi.org/10.1080/08916934.2025.2551517> シュプリングナーネイチャー (2026年 6月11日)。ネイチャーレビューメソッドプライマー。ネイチャー。 <https://www.nature.com/nrmp/> スー L. J., ワン N. N., ルオ R., ほか (2026年). 生体内標的向け LNP の人工知能を活用した設計イオン化脂質の空間的立体配座の解析による mRNA 送達。ネイチャー バイオメディカルエンジニアリング <https://doi.org/10.1038/s41551-026-01640-8> Tang, C., Yi, W., Occhipinti, E., Dai, Y., Gao, S., & Occhipinti, L. G. (2024). A roadmap for the 開ヒト身体 デジタルツインの。ネイチャー レビューズ 電気工学, 1(3), 199-207. <https://doi.org/10.1038/s44287-024-00025-w> Tao, F., & Qi, Q. (2019). より多くのデジタルツインを。ネイチャー, 573, 490-491. <https://www.nature.com/articles/d41586-019-02849-1> Tao, F., Zhang, H., & Zhang, C. (2024). 産業におけるデジタルツインの進歩と課題。ネイチャー 計算科学, 4, 169-177. <https://doi.org/10.1038/s43588-024-00603-w> Tian, G., Huang, L., Pan, X., et al. (2026). メタポロジヒドロゲルは、バイオエレクトロニクス向けのマルチソース・周波数調整された偽信号低減を可能にする。ネイチャー センサー. <https://doi.org/10.1038/s44460-026-00055-x> Trigo, E. (2022, September 4). 遺体防腐処理者たちは、死後の特徴を持たない多数の長い繊維状血塊を発見している | USNN ワールド ニュース. <https://www.usnn.news/embalmers-have-been-finding-numerous-long-fibrous-clots-that-lack-post-mortem-characteristics/> Ulrich, A. S. (2024). ワクチンにナノボットはいない — 単に脂質が遊離しているだけ：Lee と Broud に関する解説

(2024年)、「主にファイザーとモデルナの mRNA 製品をインキュベートした検体における、実体顕微鏡で視認可能な人工構造体のリアルタイム自己集合：包括的縦断的研究。国際ワクチン理論・実践・研究ジャーナル, 3(2), 1244.1-1244.10. <https://doi.org/10.56098/7hsjff81> 米国政府説明責任局。(2021年)。新型コロナウイルス契約：透明の向上に必要な取り組み

および選定交付に対する監督。米国 GAO。より取得 <https://www.gao.gov/products/gao-21-501> 2026 年 3月18日。バルデス, A. R., & ペレア, B. Y (2023年 12月17日) SARS-CoV-2 ワクチン接種と発がんの多重ヒット仮説。Cureus 15(12): e50703. <https://doi.org/10.7759/cureus.50703> ヴィッツィエッロ, A., マガリーニ, M., サヴァッツィ, P., & ガルッチョ, L. (2023年)。神経系応用のための体内通信：現在の技術と将来の展望。コンピュータネットワーク, 227, 109718. <https://doi.org/10.1016/j.comnet.2023.109718> 王, Z. L., & 呉, W. (2012年)。ナノテクノロジーを応用した自己給電マイクロ/ナノシステム向けエネルギー回収。アンゲバンテ・ケミー 国際版, 51(44), 11700-11721. <https://doi.org/10.1002/anie.201201656> ワインスタイン, E. N., ゴルブ, M. G., スラボドキン, A., 他 (2026年)。製造対応の生成モデルを可

設計した DNA のベタスケール合成。ネイチャー・バイオテクノロジー. <https://doi.org/10.1038/s41587-026-0302-0>

Westman, H., Hammarström, P., & Nyström, S. (2025). SARS-CoV-2スパイクタンパク質のアミロイド線維はフィブリン形成と線溶を妨げる。 *Biochemistry*, 64(24), 4818–4829. <https://doi.org/10.1021/acs.biochem.5c00550> Wikipedia. (2026a). 5G. ウィキペディアにて。 <https://en.wikipedia.org/w/index.php?title=5G&oldid=1358628742> Wikipedia. (2026b). 全地球測位システム。 ウィキペディアにて。 https://en.wikipedia.org/w/index.php?title=Global_Positioning_System&oldid=1356894306 Willis, M. (監督). (2020, June 4). パンデミック パート1 [動画記録]。 https://www.youtube.com/playlist?list=LL8qoMcUqKWLdc3YC6s5Ov_g Yadav, S., Lee, R. X., Kajale, S. N., et al. (2025). 細胞–電子ハイブリッドによって実現された局所神経調節のための非外科的脳インプラント。 *Nature Biotechnology*. <https://doi.org/10.1038/s41587-025-02809-3> Yanowitz, S. D. (2023a, February 17). ライブ#8 検閲なし：シモン・ヤノウイツ - 注射された人の体内の新しいナノテクノロジーが拡散する [動画]。 Rumble。 <https://rumble.com/v29xlsq-live-8-uncensored-shimon-yanowitz-new-nanotech-in-injected-people-is-spread.html> Yanowitz, S. D. (2023b, May 12). ライブ 検閲なし：シモン・ヤノウイツ - グローバリストの合成生物学が人類を根絶するために... [動画]。 Rumble。 <https://rumble.com/v2nhbn4-live-uncensored-shimon-yanowitz-globalist-synthetic-biology-to-eradicate-hu.html> Yanowitz, S., & Bruckstein, A. (1989). 画像セグメンテーションの新しい手法。 *Computer Vision Graphics and Image Processing*, 46(1), 82–95. [https://doi.org/10.1016/S0734-189X\(89\)80017-9](https://doi.org/10.1016/S0734-189X(89)80017-9) Yao, G., Zhang, F., Wang, F., et al. (2020). メタDNA構造。 *Nature Chemistry*, 12, 1067–1075. <https://doi.org/10.1038/s41557-020-0539-8> Yokel, R. A. (2021). ナノ医薬品の鼻腔から直接脳への送達は困難な課題である。 *WIREs Nanomedicine and Nanobiotechnology*, 14. <https://doi.org/10.1002/wnan.1767> Zadeh, J. N., Steenberg, C. D., Bois, J. S., Wolfe, B. R., Pierce, M. B., Khan, A. R., Dirks, R. M., & Pierce, N. A. (2011). NUPACK：核酸システムの分析と設計。 *Journal of Computational Chemistry*, 32(1), 170–173. <https://doi.org/10.1002/jcc.21596> Zafar, S., et al. (2021). バイオナノモノのインターネットにおけるバイオサイバーインターフェース技術とセキュリティ問題の系統的レビュー。 *IEEE Access*, 9, 93529–93566. <https://doi.org/10.1109/ACCESS.2021.3093442> Zee, M., Santiago, D., Harrison, G., Zywiec, A., Crouch, W., Hirschman, R., & Triantos, P. (監督陣). (2024, December 11). ワクチン接種による白い血栓の謎は解明されたか? [動画記録]。 <https://rumble.com/v5yd7lz-breaking-jab-white-clot-mystery-solved.html> Zhan, P., Peil, A., Jiang, Q., Wang, D., Mousavi, S., Xiong, Q., Shen, Q., Shang, Y., Ding, B., Lin, C., Ke, Y., & Liu, N. (2023). DNAオリガミで設計されたナノ材料と応用の最近の進展。 *Chemical Reviews*, 123(7), 3976–4050. <https://doi.org/10.1021/acs.chemrev.3c00028> Zhang, D. Y., & Seelig, G. (2011). 鎖置換反応を用いた動的DNAナノテクノロジー。 *Nature Chemistry*, 3(2), 103–113. <https://doi.org/10.1038/nchem.957>

用語集

AI — 人工知能とは、現在前例のない規模で稼働し、人間1人または人間の集団の能力を速度と規模で大きく上回る計算を実行するスーパーコンピューターを多数備えた巨大な施設に対して、広く使われている名称です。これらは「学習」して「知識ベース」を拡張することができ、その能力はデータセンターの規模、必要な電力、そして発生する莫大な熱を放散するために必要な水資源によってのみ制限されています。

BAN — ボディエリアネットワークのことです。人体の体表、体内または周辺に配置されたコンピューティングデバイスから構成され、ネットワーク内の人物に検知されることなくメッセージの送受信を可能にするもので、初めて構想されたのはおおよそ

2010～2015年頃にアキルディズ、ジョーネットらによって構想され、**IOB**、**IoNT**、**IoBNT**を構成するレイヤーの1つと位置づけられています。

二相性準静的信号 — 電気工学における電流信号の一種で、直流(DC)ではなく交流(AC)を使用します。この交流は負の位相と正の位相を持ち、正味の電荷移動・蓄積をゼロにすることを目的としています。電荷移動・蓄積はあらゆる生体に危険な炎症プロセスを引き起こすためです。

CAD/CAM — コンピュータ支援設計とコンピュータ支援製造のことで、人力による技術作業や機械操作に代わる技術です。

CFPS — 無細胞タンパク質合成は、合成DNAまたはRNA分子から、想像できるあらゆるタンパク質、体内に全く存在しない外来のタンパク質でさえ作り出すことができるナノテクノロジーです。

クラウド — 一般的に、複雑なタスク（多くの場合AIが関わります）の実行、およびネットワークの主要ノードからアクセス可能な膨大なデータの保存を行うハードウェアとソフトウェアを提供するデータセンターを総称する用語です。これは同様のタスクやデータ保存に使用されるローカルコンピューターと対比されるもので、ローカルコンピューターは計算能力も記憶容量もはるかに低いです。ネットワーク化された送電網であらゆる場所の利用者に電力を供給する発電所に似ています。

CPU — 中央処理装置のことで、コンピューターを構成する主要な電子部品で、保存されたデータを処理して論理演算または算術演算を行い、通信を管理する機能を持ちます。

DARPA — 国防高等研究計画局（Defense Advanced Research Projects Agency）の頭字語です。アメリカ合衆国防総省の下部機関で、過去には別の名称で存在していたことがあります。

FBR — 異物反応（foreign body response）の略称です。生体の正常な防御システムで排除できない不活性ではない異物の侵入によって生じる炎症反応および瘢痕形成を指す医学用語です。

FET — 電界効果トランジスタ（Field Effect Transistor）の略称です。半導体マイクロチップ産業で広く使用されている基礎的な電子部品で、特に自己組織化ナノテクノロジーにおけるバイオエレクトロニクスでの使用に適しています。

GUV — 巨大単層小胞です。

HCR — ハイブリダイゼーション連鎖反応のことで、合成DNA構造を増幅（複数のコピーを作製）することができるプロセスで、通常DNAを増幅するPCRに似ています。

hydrogel — 「柔らかい」三次元構造を持ち、水を含んだ架橋高分子小胞の網目構造体です。ナノテクノロジーでは、目的物質の送達、封入、様々な目的での組織への接着などによく用いられます。

ICP-MS — 誘導結合プラズマ質量分析法は未知の物質の化学組成を分析するために用いられる質量分析法（MS）の1種です。

IEEE — 電気電子技術者協会のことです。

IoB — Internet of Bodies（ボディインターネット）の略称です。モノのインターネット（IoT）の「人間」に関わる領域で、「クラウド」から人体まで双方向の接続を実現することを目的としたグローバル通信ネットワークのことで、2010年～2012年頃にアキルディズ、ジョーネットらによって考案されました。

IoBNT とはバイオ/ナノモノのインターネットのことで、**IoB**と**BAN**のサブネットワークです。アキルディズ、ヨルネらが2010年～2015年頃に構想したもので、ナノスケールのバイオ電子工学を通じて「クラウド」から人体内の分子・細胞のナノスケールレベルまで、双方向の接続性を確立するものです。

IoNT とはナノモノのインターネット（Internet of Nano Things）のことで、**IoBNT**の上位中継レイヤーです。**IoBNT**のノードを経路制御し集約してナノハブにまとめ、**BAN**を経由して体内の中央ハブに伝送されます。この中央ハブは、スマートフォンや最終的に5G/6G携帯基地局などの体外ネットワークと通信することができます。

IoTとはモノのインターネット（Internet of Things）の略称で、「クラウド」から電気・電子機器全般まで双方向接続を実現することを目的とした世界規模の通信ネットワークです。対象は街灯から家庭用冷蔵庫まで多岐にわたり、1999年に正式に構想されました。

is **Mバンド** — 各国の医療当局および/または規制当局が承認した周波数帯域

ランタノイド — 周期表に含まれる15種の金属からなる「希土類」元素のグループで、毒性があり、低周波（赤外線など）の光を高周波（可視光または紫外線など）の光子に「アップコンバート」する能力のような特殊な物理特性を持っています。このうちガドリニウムは室温で全元素の中で最も常磁性が高く、危険性があるにもかかわらず、MRI検査で注射される「造影剤」として多用されています。体内から隔離するよう設計された「キレート化」された形で注射されますが、どうしても一部が体内に残留し、MRIを受ける人に副作用を引き起こすことがあります。さらに、本論文の文脈では、ランタノイドは記述されているナノテクノロジーの悪質な（兵器化された）側面に関与しているとされています。

LNP — 脂質ナノ粒子。

MAC — メディアアクセス制御のことで、ネットワークインターフェースコントローラーがハードウェアを識別するためのハードウェアIDです。通常はコロんで区切られた6組の16進数で表記され、例えば00:1A:2B:3C:4D:5Eのような形式で、インターネット上の特定のブロードキャストドメイン内、またはWiFiもしくはBluetoothネットワーク内でデータの配送に使われます。

PEG — 注入された対象をカプセル化し、体の防御システムから隔離するために用いられるポリエチレングリコールです。

ホスホラミダイト — 合成DNAおよびRNA分子の固相生産時に産業界で用いられる、反応性の高い化学物質です。

PHY □ データストリームを伝送するための電氣的、光学的、物質的手段から構成される、ネットワークにおける物理ハードウェア層です。

プロト組織 — 特に、ナノレベルから天然の生体組織の規模へスケールアップされる過程にある未成熟な人工的に構築された生体組織に対して用いられる用語です。

メタDNA — 他のデオキシリボ核酸分子より上位の位置づけにあり、それらを制御するDNA分子です。

ナノポア — ナノメートル規模の開口部またはゲート~1で、直径100ナノメートルまでの大きさを持ちます。この孔が生体内の天然膜に存在する場合、適切なサイズの子、核酸またはタンパク質が、必要な認証を示した後に通過することを許容します。

ナノスケール — IEEE Std 1906.1-で定義される、1ナノメートル（nm）から100nmの寸法を持つ実体に適用される2015。

ナノテクノロジー — さまざまな工学的目的のため、多様なサイズの構造を得るためにナノスケールの実体およびそれから組み立てられるより大きな実体を利用する学問です。

ノード — 媒体アクセス制御（MAC）副層と物理（PHY）層を持ち、任意でセキュリティサービスを提供する実体です。

常磁性 — 素材の種類と磁場の強度に応じて異なる力で磁場に引き寄せられる、特定の素材が持つ性質の名称です。

PDT とはパーソナル・デジタルツインのことで、個人の体内に構築された多層ネットワークから基礎的な分子・細胞レベルのデータまで常に監視・集積し、「the cloud」上に作成される人の身体のデジタルモデルです（IoBNTを参照）。高性能なAIデータセンターのコンピューターは、監視データを元に個人を分析・モデル化することができ、個人、さらには地球社会レベルの集団全体まで、望ましい結果や行動を得るための操作を計算することさえ可能です。理論上、AIは身体あるいは身体のネットワーク全体にデータを送信する力を得ることができ、それらを周辺のプログラム可能な端点に還元することで、あらゆる自律性や自由意思を脅かしたり、完全に奪ったりすることになります。

photon とは、質量も電荷も持たない電磁エネルギーと運動量の量子です。時空に事象として現れる際には、粒子または波動関数のいずれかに見える性質を持ち、**plasmon**と対比される概念です。

量子ドット — 半導体材料からなるナノスケール粒子で、電気を光に変換したり、その逆の変換を行うことができます。例えば最新のテレビ画面でカラー画像を表示するために使用されており、生体内に入った場合には毒性が問題となるため、製造および廃棄の際には特別な注意が必要です。

QoS — サービス品質 (Quality of Service) の略で、複数の発信源から複数の信号が存在する環境下で、ワイヤレスネットワークが意図または約束通りに「サービス」を提供して動作する能力を指す用語です。

プラズモン — 外部電磁場に応答して多数の励起電子がコヒーレントに振動することで生まれる電磁エネルギーの量子で、**光子**と対比されます。

SARS-CoV-2 — 重症急性呼吸器症候群コロナウイルス2です。

自己集合 — 基本的な合成DNAまたはタンパク質の構成要素の集合が、人の介入なしで、あるいは周囲の電磁場や構築プロセスにエネルギーを供給できる深部透過性赤外線からのエネルギーの助けを借りて、自律的により大きく複雑な構造に組み上がる性質のことで、

自己複製 — 個々の合成DNAを基礎とした構造が、周辺から見つかり集めたりした必要な構成要素を使い、場合によって周囲のエネルギーや温度サイクルも利用して、**HCR** (前述) のプロセスを通じて自分自身のコピーを作り出す性質のことで、

排出 — COVID-19の注射製剤またはその他のナノテクノロジーの文脈で、近くでの呼吸、体液の共有、皮膚接触などを通じて他者に移ったり、あらゆる手段で元々体内にその成分を持たなかった人に成分を伝達するプロセスのことで、**合成感染**を参照してください。

スマートダスト — 自己集合する合成DNAやナノ電子デバイスに必要なその他の物質といった技術を内部に含む微小粒子を製造する技術のことで、このようなデバイスや非公開の原子・分子物質は、空中から散布されたり、食物連鎖に混入されたり、飲料水やあらゆる消費者製品に添加されたりします。スマートダストの内容物は、以前のナノテクノロジーのペイロードを体外に排出した人の体に吸収される、(新しい物質や新しいナノテクノロジーを追加するための) 補給に用いられることがあります。

SPION — 超常磁性酸化鉄ナノ粒子のことで、

表面プラズモンポラリトン — 略称SPPsで、伝搬時に経由する特殊な物質の表面に依存する特定の種類の複合電磁波です。

合成感染 — 人物Aに既に存在するナノテクノロジーの自己組織化可能な構成要素が、人物Bに伝わり、さらに人物Bから人物Cへ伝わる、といった連鎖的な伝達のことで、

合成寄生虫 — ロボット微生物、ワーム、あるいは宿主の体内に侵入して自身を複製する能力を持つ自己複製型ナノテクノロジー全般のことで、複製には宿主の資源とエネルギーを利用します。

ターボキanser — 患者が寛解した後突然再発する可能性のある、急速に進行する転移性悪性腫瘍、または単一の場所だけに発生するとは限らず単一・既知の種類とも限らず、突然新規発生する完全に新しい悪性腫瘍のことで、例えば、COVID-19流行前には医師がほとんど、あるいは一度も遭遇したことがなかったような種類の腫瘍が、子どもたちの間で発生しています。

WIFI — IEEE 802.11規格に基づく無線技術の総称で、機器が無線周波数を利用して通信し、ローカルエリアネットワークを形成するための技術です。

SAR は比吸収率 (Specific Absorption Rate) の略称で、無線から発信される電磁波のうち (目的の送信先に到達する代わりに) 人体に吸収される量を示す測定値です。例としてスマートフォンの電磁波で用いられます。

退任編集長による付録

2026年6月20日、本論文に記載された発行日のちょうど1日後から、このジャーナルは3名の編集長（EiC）による体制となります。体制を率いるのは、現在上級准編集長を務める私の尊敬する同僚クリストファー・A・ショー博士です。彼と共に編集長を務めるのは、非常に有能な准編集長であるダニエル・ブラウディ博士とダニエル・サンティアゴ薬剤師です。この変更について私たちはちょうど2日前に話し合いを行い、私ジョン・W・オラー・ジュニアが正式に編集長職および編集委員会（EB）を辞任して新しい指導体制に道を譲る2026年6月20日以降、投稿の対応やジャーナルの日々の運営をどのように進めるかを、彼らが協力して決定することに合意しました。また、明日よりジャーナルの新しい所有者および発行元はブラウンストーン研究所となります。

数か月前から決定していた変更に伴い、私が編集長在任中に発行される最後の論文となる本論文は時間的な制約に直面しています。クリス・ショーと私が2019年夏にこのようなジャーナルを創設する話し合いを始めてから、ほぼ8年が経過しました。当初、このプロジェクトの資金として3万ドルの提供を約束されていましたが、特定の対象成分や、ドナーが代表する組織が特に関心を持っていた特定の多価製品のみ偏って焦点を当てるのではなく、ワクチン理論・実践・研究の全範囲を批判的に検討する意向であることを明らかにした後、資金提供予定のドナーは撤退しました。それでも我々は単独で活動を続け、基盤インフラの開発を始めてから丸1年後に発行する創刊号の論文編集を行い、共著も務めました。IJVTPRの創刊号に掲載された論文は、我々が基盤開発を着手してから丸1年ほど経って発行されました。このIJVTPR創刊号は2020年7月15日に発行されました。偶然にも、当ジャーナルの創刊は、私の見解ではCOVID-19「プランデミック」という呼称が適切である事態が発生してからわずか数か月後のことでした（ウィリス、2020; アイク、2020）。

ロックダウンは既に完全に実施されており、マスク着用、社会的距離の確保が行われ、英国で51万人、米国で220万人の死者が発生するとの予測を和らげる「ワクチン」への期待が寄せられていました（ファーガソン他、2020）。数ヶ月後、ファウチその他の当局寄りの解説者たちは（RFKジュニアの2021の著書を参照のこと）、米国で2020年12月14日頃から普及が進められている新型コロナワクチンが、接種を受ける社会的責任のある人全員の感染と死亡を防ぐと約束していました。しかし、主流の言説で私たちが聞かされていたことの多くは、大きな欺瞞であることが判明しました。1回以上の新型コロナ注射を受けたと報告されている52億人は、医療・製薬業界の影響下（ほとんどの場合、同業界に所有されている）の学術メディア・大衆メディア、支配された監督機関、政府全体、そして非常に多くの機関によってかき立てられた恐怖に動機付けられました。これらの機関は従業員に対し、知り合いの中でメディアの解説者、政府高官、雇用主の言うことを信じない人を非難し、極端な場合には暴力を振るうことさえ奨励し、場合によっては強制していました。私たち全員に押し付けられた対策は、多くの場合、同じ当局によって推奨されました。当局者の多くは医療従事者であり、最終的には彼ら自身が騙されていたか、今では明らかかなように、目的が未だ不明な世界的なプロパガンダキャンペーンに進んで従っていたのです。それでも私の判断では、このプロパガンダの取り組みはブラウディと彼の同僚によって多数の出版物の中で十分に説明されており、その多くが本論文で引用されています。前述の通り、本論文は私がこのジャーナルで出版プロセスを最初から最後まで担当する最後の論文です。

私はこの付録を「新しい編集者への手紙」として書いています（出版前に彼らがこれを審査する時間はほとんどありませんが）。これは一昨日彼らと行ったオンライン会議で合意されたことです。編集委員会による審査を受けずにこうした社説を書くことの承認を得ていなければ、私はこれを引き受けませんでした。編集長としての私の役割では、私はこれまでこうした手紙を一切出版してきませんでした。なぜなら、このジャーナルに出版されるすべてのものは査読済みであると言えるようにしたかったからです。これは私が今書いているこの最後の作品に至るまで、ずっと守られてきました。他のすべてのコメントと論文は、出版前に必ず査読が行われ、少なくとも2名以上の編集者によって承認されてきました。ディブラシ他（2024）の発見の余波で批評家たちが特定の虚偽の主張を行い、このジャーナルは査読されていないと疑いを主張した後、私はこの方針を守るために、各作品を承認した査読者の名前を謝辞セクションに記載する慣行を開始しました。デビッドソン他（2024）からこの慣行が始まり、そこでは査読を行った人の名前が記載され、意見に対して感謝されています。私自身の作品が出版される際には、査読プロセス中はクリス・ショーに編集長の役割を引き継いでもらっていました。この方針に沿って、私が編集するこの最後の論文では、すぐ上にある謝辞セクションに、本論文の出版を承認し、場合によっては私に出版を進めるよう指示してくれた査読者のリストが記載されています。

実際、本論文の内容全体は、この「新編集長への手紙」と、共著者1人または両者によるキー入力ミス、不適切な表現の軽微な修正、小規模な追加を除き、約10組の目によって精査されています（この論文を審査したEBメンバーの中には、活発なオンライン討論への参加を選ばなかった方もいることから、実際はさらに多いかもしれません）。本誌で公開される前に厳正な査読が行われており、上記で名前が挙げられた方々によって謝辞セクションで承認されています。

以上を踏まえ、ヤノウィッツとブラウディにより審査された本付録を執筆した目的は、この出版を進めるという私の決定について説明することです。今回の判断では、ジャーナル創設以来初めて、尊敬する同僚クリストファー・A・ショーが出した不採択の公式推奨を覆す最終判断を行っています。反対意見によるいわば「少数意見報告」には、ミシガン州立大学の州・地方政府財政政策分野の名誉あるモリス講座担当教授であるマーク・スキッドモアも加わっています。彼らはこのバージョンを不採択とし、再提出の前に追加研究を行い推測を減らすよう求めています（この点については後で改めて触れます）が、それにもかかわらず今回出版を進めるという私の決定は軽率に下されたものではありません。ただし、既存の研究で多くの編集長が行うとされるような、不人気な決断を私がしているわけではありません。今回のケースでは、EBの多数派が出版を進めることを支持し、賛成6・反対2で決着しました。これは、この「新編集長への手紙」を除く本文を、元の65ページから現在の49ページに大幅に短く整理し直した後の結果です。

確かに、それでもなお、ショー、スキッドモア、そして私を含むすべての私たちが、完璧な世界に到達したいと望む水準には達していません。もし必要な資金、設備、人員、時間が確保できればの話ではありますが。このような望ましい資源が入手可能だったとしても、実際には——現職の保健福祉長官としてロバート・F・ケネディ・ジュニアが理論上管轄する多くの硬直した下部機関や数十億ドル規模の資金提供団体に対し、同氏が実現を目指している変革があったとしても、こうした資源が明らかに入手できず、今後入手できる見込みも一切ないのです——本出版物が真実を伝え、緊急性の高い時宜にかなった内容であると私が確信しているため、私はこの出版を進めざるを得ないと考えています。また、ここで明記しなければならないのは、投票したすべての人が

私の理解する限り、出版に賛成した全員が、この作品が本ジャーナルでこれまで刊行してきた中で最も重要なものであり、絶対に延期してはならないという私の考えを共有してくれています。

私はすべてを包み隠さずに述べますが、新型コロナウイルス製品に含まれるナノテクノロジーについて誤っている可能性を冒してでもこの出版を進める方が、ナノテクノロジーの存在について正しいにもかかわらず警報を発することなく見過ごすよりも良いと私は信じています。ことわざにもある通り、必要になった時に銃を持っていないよりも、使わなくても銃を持っている方が良いのです。ヤノウィッツ氏とブラウディ氏の論文を今すぐ出版する重要性は、昨日、共同編集者の1人である弁護士メアリー・ホランド氏がチルドレンズ・ヘルス・ディフェンスの支援者に向けて送った手紙によって強調されています。この手紙は、2026年6月1日に米国疾病対策センター(CDC)がファイザーに対して追加で12億4千万ドルを交付し、そのうち7億3570万ドルが乳幼児と子どもに接種する新型コロナワクチン向けに割り当てられたことを非難しています (キルシュ、2026)。新型コロナウイルス禍で実験されたような有毒なナノテクノロジーを我が国の乳幼児や子どもに投与することで、外国の敵、非国家主体、あるいはそれらの悪の結託グループに対する、正当だが秘密の軍事目標が達成されるということがあり得るのでしょうか？ 投票権のない編集者の1人が次のように述べています。「・・・引き下がることは解決策ではない。勇気、警戒心、信念を貫くことが今も必要不可欠です。これらの価値観を守るべき瞬間は遠い未来のどこかにあるのではなく、今なのです。」

私たちは今回の出版を進めるにあたり、真摯に客観的事実を探求し正確に表現しようとするあらゆる著者または著者チームが作成する、査読付き学術ジャーナルのどの出版物も、進行状況報告に過ぎないということを心に留めています。明確で一定の領域内のあらゆる状況で成立する真の命題を発見し表現しようとする数学的証明でさえ、常に後世の学者による批判的検証の対象となります。長年にわたり絶対的に正しいとされてきた多くの証明、例えば「平行線は決して交わらず分岐もしない」というユークリッドの平面公準は、後世のロバチェフスキーとリーマンの幾何学によって大幅に拡張され改良されました。物質的な実験環境で検証され得るあらゆる理論的命題の物質的な帰結について、私個人はファインマンのルールを支持しています。彼の1963年にカルフォルニア・ポリテクニック州立大学 (Cal Poly) で行われた講義におけるルールです。このルールを私の言葉で言い換えれば、理論がその理論が対象とする客観的事実と一致しないならば、その理論は間違っている、ということです。また、真の物語表現 (TNR) の絶対的に固有な性質に関する私自身の公表済み証明に沿って言えば――私が最も単純で洗練された証明だと考えているのは、*Entropy* (2014) に公表されたものですが、技術的に平易な一連の議論はOller と Collins (2000) に見られます――効果的な嘘やあらゆる形のプロパガンダは常に欺瞞的に覆い隠されていなければなりません。偽りを隠し、真の物語表現 (TNR) に似せる必要があるからです。そうでなければ、欺瞞はその考案者の目的を果たすことができません。隠されていないプロパガンダはどんな真の物語表現にも似ていません。このことを踏まえると、本日私たちがここに出版する論文に提示された議論が「憶測的だ」と主張することには私は矛盾を感じます。65ページあった原稿段階では、この批判は確かに一部に当てはまりましたが、私たちが出版を進める現在の版では、憶測はすべて取り除かれていると私には思えます。

私は個人的に、多くの人を知っています。彼らはワクチン接種を受けた後、新たな恐ろしい出来事が次々と起こり、友人や親族が病気になったり突然亡くなったりするのを目にしました。1回または複数回の接種を受けて後悔している人の中には、がんが激しく再発してすぐに命を落としたケースがあります。また、わずか1回の接種でも痛みと恐怖にこれ以上耐えられず、自殺に至ったケースもあります。この人は私を含む複数の人に事前に、

自分が考えていることを告げていました。私の最も近いきょうだいは新型コロナワクチンを3回接種しましたが、1回目の接種後一度も退院できませんでした。末のきょうだいも3回接種しましたが、亡くなる前に少なくとも5回新型コロナウイルス感染症と診断された後、命を落としました。愛するところは3回目の接種からしばらく経った後、足から2つ目の大きな「白い血栓」が摘出されたその日に亡くなりました。彼女は3回目の接種後、体の調子が良くなったことは一度もないと話していました。私が個人的に知っている中には、亡くなった方の他にも、すぐ身近で心臓発作を起こした方、今日まで原因が診断されず、確立された治療法もない原因不明の病態に苦しんでいる方もいます。私の身の回りのほとんどの人がワクチン接種を受けましたが、接種したことを後悔していない人を私は一人も知りません。

以上を踏まえ、クリス・ショーとマーク・スキッドモアから依頼され、私が理解した範囲で「少数意見報告」を掲載します。これは2人が本論文の出版に対して挙げた反対意見をまとめたものです。私たちの編集委員会(EB)のメンバー全員は、査読は研究者・著者が研究を改善する手助けをするものだと合意しているため、反対意見には研究を改善する方法の提案が含まれていると私は考えています。出版を進めることに賛成した編集者のほとんど(全員ではないにしても)も、基礎研究、特に顕微鏡検査の改善・拡充に関する提案の少なくとも一部に同意しています。私が理解した範囲で、主にショーとスキッドモアの意見をまとめると次の通りです：(1) 修正のため差し戻された元の原稿65ページから短縮されたとはいえ、全体をさらに削減した方が良いという大まかな合意がありました。例えばショーは暗視野/明視野顕微鏡の写真を掲載する必要はないと考えています。ただ私個人としては、顕微鏡および画像処理の専門家による写真も詳細な説明も見たことがなかったのです(Yanowitz & Bruckstein, 1989；Google Scholarによると660回、権威あるWeb of Scienceによると257回引用されています)。最終的に私は、こうした顕微鏡の仕組みに関する専門的で非常に分かりやすい説明とともに、これらの写真を残すことに決めました；(2) ショーや他の査読者の一部は、COVID-19ワクチンバイアル内の液体から培養した物体(メーカーとロットごとに慎重にラベル付け・分類されたもの)を純粋な生理食塩水で実験室培養したものと、統計的検出力を十分に確保して厳密な数値分析に耐えられるだけの多数の検体提供者から採取した体液のうち、同様の自己集合性物体が見られるものを、より明確に並べて比較することを求めています。これに対する私の回答は「理想の世界では」これらすべてが望ましい、というものです；(3) ショーとスキッドモアはどちらも、アン・ウルリッチ(2024)の主張に共感しています。その主張とは、想定されている電子的な物体、リボン、結晶、ひも状のものなどはすべて、おそらく脂質ナノ粒子から生まれた化学的構造物、死滅した細胞の残骸、埃や汚れたスライド、スパイクタンパク質の断片などに過ぎない、というものです。ただ私の見解では、ウルリッチの主張はすでに私たちの一部、つまりDavidsonら(2024)によって論破されています；(4) スキッドモアは「これらの技術 [IEEE規格、それに関連するナノテクノロジー、COVID-19関連の5G携帯電話基地局、問題の技術がすでにN3 DARPA計画に従って兵器化されているという公表された発表は、ジェームズ・ジョルダーノ級の人物の権威に基づく電磁エネルギーを利用したものであり、これらすべてのつながりは信用すべきではない]、COVIDワクチンに関しては」とし、「細胞を再プログラムしてスパイクタンパク質を生産させる」という点だけに理解を限定することを主張しています。スキッドモアによると、前述のつながりはすべて「推測的」である一方、「スパイクタンパク質」について私たちが伝えられている内容は信頼できるとされているのです。ここで私の答えは問いです：COVID-19関連製品に関する発言のうち、どれが信じるべきで、どれが嘘だと判明しているのか、どうして誰にはっきり区別できるのでしょうか？

確かにAIと、AIが大量に生み出しているナノテクノロジーの将来については、推測の余地がたくさんあります。しかし私には、ジョルダーノが提案している、注射・吸入、その他体内に埋め込まれたナノテクノロジーの軍事利用について、推論や推測をする必要は全くないと思われます。ジョルダーノ自身によると、これらのナノテクノロジーは、私たちが景観のほぼどこを見ても目にする携帯電話基地局が発生させる電磁放射線で操作できるのです。現在でも、基地局はますます密集した技術建造物の群れになりつつあり、2019年にはあちこちに出現し始めました。ジョルダーノが陸軍士官学校で行った講演(2018)にある通り、これらはDARPAのN3計画、つまりナノテクノロジーの軍事化の非常に現実的かつ具体的な一部であることは、合理的に疑いの余地がありません。これはジョルダーノ自身によって自身に帰属された2026のDARPAの声明でも予測されています。私はブラウディとサンティアゴと共にこのすべてについて執筆し、クリスとステファニーの提案に従って、私たち自身のジャーナルの外でこの研究結果を出版しました。記憶している限りでは、私たちは*International Journal of Innovative Research in Medical Science* に投稿し、論文は2025に掲載されました。血流やリンパ管を通ったナノテクノロジーの磁気移動は、すでに現実のものとなっています。ジョルダーノは根拠のないことを言っているわけではありません。

検査と画像診断の改善に関して他にも提案がありましたが、尊敬する同僚のクリスとマークの留保意見に十分配慮した上での私の結論は、ヤノウィッツとブラウディが指摘する関連性を立証するにはこれ以上の情報は必要なく、既に手元に十分な証拠が揃っているということです。COVID時代に、接種者に実際に何が起こったのか、現在も何が起きているのかについて、繰り返し嘘がつかれていたと主張することは、何ら推測ではありません。既存のナノテクノロジーに関するIEEE規格、こうしたナノテクノロジーを軍事利用するというジョルダーノの主張、COVID-19製品の法医分析による実際の所見のいずれについても、推測の域を出ないということはありません。これらの所見の一部は、ミケルスら(2023)やセガラ(2023a, 2023b, 2024, 2026)が批判的に検討したファイザー自身の公開データから直接得られたものです。このジャーナルに掲載された複数の論文や関連する査読済み研究で報告されている、全死因死亡率、異常血栓、接種回数と余命の短縮の相関関係に関する多くの研究については言うまでもありません。

逆に、私が憶測的だと考えるのは、主流のマーケティングの言説から都合の良い部分だけを選び出す行為です。例えば「スパイクタンパク質」に関する主張や、これまで一度も検出されたことがなく現在も確認できないナノ粒子に実際に何が含まれているかという主張などがそれにあたります。「ワクチンは宣伝通りの効果しかない」「命を救い病気を予防した」「常にただ「安全で効果的」だった」など、明らかな虚偽が今でも広められていることは言うまでもありません。こうしたプロパガンダのほとんどすべてが、医療・製薬複合体から報酬を得ている「研究者」によるものだということに、疑問を感じないのでしょうか？新型コロナウイルス注射剤の製造会社が、一般の納税者に何兆もの損失を負わせる一方、自らは数千億もの富を得ていることは、無関係なことでしょうか？彼らは、注射によって人を傷つけ殺していながら、病気と死から救うと称する人々から金を奪って懐を肥やしつつ、本当にただ「公共の利益」を推進しようとしているのでしょうか？騙された多くの人々が次々と亡くなっています。私たちはこの事実の目撃者です。それにもかかわらず、今起きていることを観察する他の人々が、今後はそう簡単に騙されないだろうと私たちは期待し、確信しています。神よ、私の兄弟姉妹、子供、孫、愛する人々、親族全員、友人も敵も皆、今後登場する次世代のワクチンや、を含むその他のデバイスに対して、丁寧に断る分別を持ってくれることを願っています。

ヤノウイツ・ブラウディの本論文で議論されているナノテクノロジーです。編集長(EIC)としての私の任期を締めくくる本誌は、ちょうど『モヒカン族の最後』といえるでしょう—ただし、このジャーナルが伝える物語はノンフィクションです。

敬具、ジョン・W・オ
ラー Jr., PhD

法的免責事項

ウェブサイトおよびIJVTPRに掲載されている情報は、いかなる人の病状や医療行為に対する診断、推奨治療、予防または完治を目的としたものではありません。言及されている病状、処置、プロトコルの影響を受ける方の親、後見人、介護者、臨床医、親族である利用者および読者は、具体的な活用についてご自身の判断を行ってください。寄稿著者、編集者、ならびにウェブサイトおよび/または本ジャーナルに何らかの形で関わる全ての者は、ウェブサイトまたはIJVTPRに掲載された情報、結論、研究結果、意見、誤り、その他いかなる記述をいかなる状況で利用または適用したことによって生じた、あらゆる損害、金銭的損失、身体的傷害、その他の不利益について、いかなる個人または団体に対しても一切の責任を放棄します。提示されている資料は、関心を持つ全ての利用者に無料で提供されていますが、資料のいかなる部分をどのように活用するかについては、閲覧者/利用者のみが単独で責任を負います。資料を引用または転載する場合、利用者は出典/著者にクレジットを記載し、[クリエイティブ・コモンズライセンス 4.0 NC ND](#)に定められた非営利・派生作品禁止の要件に従ってください。これより優先されるその他のライセンスがある場合は、当該ライセンスに従ってください。